

313
99



始



特 232
413



京都室町教會牧師

日高善一著

了夕才傳福音書講義

版社柏香



新約全書註解に序す

編者は決して學匠に非ず、又學者たらんと志すものでもない。福音宣布に勞苦するを其の使命と信ずる一介の凡庸な直接傳道者に過ぎない。然るに其の二十年の勤務の間、我が國の教界に最も不便を感じるものは新約全書總卷に亘る統一した註解書の乏しい事であつた。或る簡略なものを除きては、日本人の手に成る全卷に通じた著作は皆無であると言ひ得やう。信者、求道者諸彦より其の要求を訴へらるゝや、傳道者として全く途方に暮るる外はない。

編者は基督者としての修養上、又傳道者としての職責上、久しく聖書の研究には従事してゐる。且つ同様の意義から豫て基督傳の各著作に一通り眼を晒さざるを得ない立場に在り、近年新約全書の大半に關連せる使徒パウロの傳及び其の書翰集に就いても出來得る限りの研究を爲さざるを得ざるに至つてゐる。中に最大著作と稱すべき一部、デギツド・スミス博士著「聖パウロの生涯と其の書翰」は興味に引かるゝまゝ翻譯して目下印刷中に屬する。我が國の教界に有要な書籍と確認するからである。斯く其の背景僅かに臚となれるに力を得、更に福音書の初卷より、初學の態度を以て、豫て蒐集した基督傳資料、及び世に定評ある註解書類を座右に備へ、信仰的見地

から、各節を逐うて日々、時間の容す限り致々、新約全書の眞意に徹し、日本人として 基督に
 近づくべき道途の探求に努力してゐる。今各著作の間より、最も穩健自ら依頼するに足るべしと
 認められたものを摘出し、之に私見を附し、先づマタイ傳福音書講義を筆録するに至つた。

編者は續いてマルコ傳以下、往く往く各卷に適切な参考書を更に蒐集し、又自ら經驗し得たる
 所を加へ、且つ學び、且つ祈り、且つ録し、逐日其の稿を積み、終に新約全書總卷に及ぼす覺悟で
 ある。然し人事萬般皆是れ 天意に存する。幸にして 神若し藉すに時間と健康と生命とを
 以てせらるれば、やがて其の稿を完ふせんことを期してゐる。是れ目下我が國基督教界焦眉の急
 に應ぜんと欲する微衷に外ならない。

尙ほ編者は無牧の兄弟姉妹の集會、或は各戸に行はるゝ老幼打ち混じたる家庭の禮拜に於て、
 聖書を閱讀せられ、或は又外國語を以て獵涉せらるゝ時間なき熱心なる信徒諸彦が、傳道のため
 聖書を活用せらるゝに援助と概觀とを與ふる用意を以て、先進外國に於ては二種に試みらるゝ註
 解法を綜合して此の一種に纏め、兩種を兼ねる手段を採つた。勿論、其の性質上紙數に自ら制限
 あり、簡結を旨としたるため、意餘つて筆の及ばざる恨を遺した個所も少くない。深切な讀者諸
 彦は必ずや之を諒とせらるゝであらう。

終りに本書の編輯に當り、其の典據とした日本改譯新約全書の翻譯上、編者が屢疑義を挿み、
 書を送つて質問したるに對し、一々深切なる回答を寄せられた編者長敬の先進にして右改譯委員
 の一人、現青山日本基督教會牧師川添萬壽得氏に對し、特に卷頭に録して深厚なる感謝の意を表
 す。

千九百二十六年十二月上旬

日 高 善 一 識

凡 例 (マタイ傳福音書講義中)

- 一、書中『前譯』とあるは新約全書の明治初年出版の舊譯本を示す。「舊譯」と言はないのは「舊約」と語音が相通じて紛はしいのを避けたためである。以下各編之に準ずる。
- 一、註釋の間に挿入した稍や小型の肉太文字ゴシックは其の「節」と、註解せらるべき「聖書の本文」を示す。以下各篇之に準ずる。
 - 一、舊約全書よりの引照は漢字の略號を以て記入し、新約全書よりの引照は片假名を以て記入した。不統一ではあるが、識別するには却つて便利と信じたからである。(以下各編之に準ずる)
 - 一、『イン・クリ・コン』とあるは『インタアナショナル・クリチャーラ・コンメンタリイ』の略。
 - 一、『エクス・グリ・テス』とあるは『エクスポジタス・グリイキ・テストアメント』(ダブルユウ・ロバートソン・ニコル博士編輯)の略。
 - 一、『ケムプ・バイ』とあるは『ケムブリツヂ・バイブル』の略。
 - 一、『センチュ・バイ』とあるは『ゼ・センチュリイ・バイブル』の略。
 - 一、『ヘス・デキク・バイ』はヘスチング編『デキクシヨナリイ・オヴ・ゼ・バイブル』の略。

一、一人編輯の註解、マイヤア、ベンゲル、アレキサンダア・マクラレン其の他及び前各項の諸編でも著者を言ふ必要あるものは一々其の著者の名を割註として示した。

一、基督傳より最も多く引用したものは、ホルツマン、ヴァイス、エデルシヤイム、リイス、フアラア、サンデイ、デギツド・スミス(兩著)、ヘツドラマム、バアトン・エンド・マシウス、ルナンの諸著である。其のうちに特殊の引用には一々、著者名を割註した。然し例へば習慣風俗に就いてのエデルシヤイムよりの引照の如きは割註を省いた、又其の他の著述からでも編者の記憶から引照されたものは無意識に自己の所説の形で述べられてゐないとも限らない。一言斷つて置かねばならぬ。

一、ストラウス、ライトフウトホルツマン(基督傳以外)等、他の著者の述作から再度引照されたものもある。然しそれは充分信據すべきを確めて後に行はれた事は勿論である。

一、三字經、四書五經や佛教經文は皆一應の出所を確めて後引用したけれども多くは特に出所を擧げてゐない。三字經や四書の如き普通の教育ある人々に出所を掲ぐるまでもあるまいと信じたからである。其の他の日本、支那の著述、格言等も同様である。

一、神學上の諸著述からの引用の如きは、勿論著者の名は記されてはゐない。然し編者の所説の如く装うてゐないことは明言して置く。

一、日本語の註解書は一切準備しなかつた。それは讀者自ら之を利用せらるゝ便宜ある故に外ならぬ。此の點外國語の註解書と編輯の趣を異にしてゐる。

一、外國語の發音はグロイヤ語、及び聖書に記さるゝ固有名詞以外は悉く英語音を用ゐてゐる。此れは編者の著作には何時も述べらるゝ如く、獨佛の著作は英譯に據つたことと、英語音に據ることが、編者に取つては最も誤が少なかるべきを自覺するからである。

マタイ傳福音書講義目次

緒論 一

第一章 一三
系圖——耶穌の降誕

第二章 二四
東方の博士來訪——エジプトへ遁る——ナザレへ歸還

第三章 三六
バプテスマのヨハネ——耶穌のバプテスマ

第四章 五五
基督を襲へる誘惑——ガリラヤ傳道の開始

第五章 七二
（自第五章——至第七章山上の垂訓）
山上の垂訓——幸福なる生活——弟子たるの責務——耶穌自身の地位——基督者の倫理的態度
の訓示——訓示の第二||姦淫と離婚——訓示の第三||誓言——訓示の第四||犯罪の報復——訓
示の第五||愛の律法

第六章 九七
虚飾なき宗教——祈禱——虚飾なき斷食——貪慾と吝嗇との戒飾

第七章.....二二

人を審くな——附録の讀六——祈禱に就いての訓戒——二つの道——偽預言者に對する警告——
——結論——教訓の印象

第八章.....(自第八章——至第九章奇蹟).....二四

奇蹟——癩病者潔めらる——嘉せられたる信仰——ペテロ姑癒さる——弟子たるの覺悟——湖
上の暴風——ガダラ人の地方にて

第九章.....二四

靈性を先づ救ひて——取税人の宴筵——斷食問題——ヤイロの娘の癒治——附 血漏の婦——盲
者の開眼——惡鬼に憑たる啞者——傳道と治療

第十章.....(十二使徒の撰定).....二六

十二使徒の選定——使徒に對する訓示

第十一章.....二七

耶穌單獨の傳道——バプテスマのヨハネの使者——頑迷なる都市——眞理は嬰兒へ——恩寵に
充つる召命

第十二章.....二八

安息日問題——安息日の治療——耶穌の退去——普者擧者の治療と論争——休徴の要求——耶
穌の家族

第十三章.....二九

種播く者の比喩——譬の註解——毒麥の譬——芥種の譬——パンだれの譬——預言者の格言——
——毒麥の譬解説——畑に隠れたる寶——天國の學者——家族の間に於ける耶穌

第十四章.....二九

洗禮者ヨハネの處刑——耶穌の隱退と五千人の給養——耶穌湖上を歩まる

第十五章.....三〇

兩手の洗滌——カナンの女——ガリラヤの山上にて——四千人の給養

第十六章.....三〇

再び徴の要求——雄大なる告白

第十七章.....三一

變貌——癩病の小兒癒さる——再び苦難の預告——神殿課税納入

第十八章.....三二

野心の戒飾——犯罪者の處置——人を救す態度

第十九章.....三三

カリライヤ退去——結婚問題——幼兒御膝に縋る——富の重荷——富豪と天國——さもしき要求

第二十章.....三四

勞働の眞意義——三次び苦難を預言せらる——基督に近侍すべき資格——エリコの盲人

第二十一章……………二九四
 君主の入城——義憤の答——可憐の讚美——無花果樹枯る——權威に就いての質義——二人の
 息子の譬——奸婦なる農夫の譬
 第二十二章……………三二一
 婚宴の譬——王の物は王に、神の物は神に——サドガイ人の謎——法教師の質義——耶穌の逆
 襲
 第二十三章……………三三四
 學者に對する豫告——七個條の悲愁——エルサレムを憫かる
 第二十四章……………三三三
 默示的豫告——亡國の豫告——豫表に對する警告——人の子の來臨
 第二十五章……………三四四
 十人の處女——貨殖の譬——審判の執行順序
 第二十六章……………三五三
 十字架の前夜——哀愁敬仰の獻物——背恩の惡行——最後の晩餐——ゲツセマネの苦悶——亡
 恩漢の追跡——カヤバの審問——メテロの怯懦
 第二十七章……………三七六
 ピラトへ曳かれ給ふ——亡恩漢の末路——ピラトの審問——兵士の玩弄物たる耶穌——十字架

目次終

上の午前——天地晦暝——埋葬——祭司長等の周章
 第二十八章……………三九七
 復活——番兵の復命——ガリラヤに於ける邂逅

マタイ傳福音書講義

日高善一編著

緒論

耶穌基督の事業と其の生涯を直接に描寫してゐる新約全書の始のマタイ、マルコ、ルカ、ヨハネの四卷を合せて四福音書と稱する。福音とは、新約全書の原書が、記さるゝギリシヤ語の「*Euaggelion*」即ち「善き消息」、又は「喜ばしき音信」の意味で、人類を罪の呪呪より救はんがために我等の主が齎らされた音信なるが故に斯く言ふのである。而して其のうち、マタイ、マルコ、ルカの三卷を更に第四卷と區別して共觀福音書と稱する。それは此の三卷が同様な用語を以て同様の事件を同様な順序で殆んど同様に記録し、且つ其の觀察の立場が又共通してゐる

からである。

以上の共観福音書の相互の關係に就いて尙ほ委しく陳べる必要を認むるけれども、研究上の理由と、紙數を各冊均等ならしむる關係からそれは第二篇「マルコ傳福音書講義」の緒論に譲ることとする。

其の内容

マルコ傳中に收められた物語は皆マタイ傳には長い語ことばとなつて表はされてゐる。而して主の教訓の如きはマルコ傳に記されてゐるやうな断片的なものではなく、甚だ整つた長い項目となつてゐる。山上の垂訓の如きは其の一例である。此れは果して主耶穌自ら斯くの如き教訓を垂れ給ふたのであらうか、或は此の福音書の記者が之を斯く布衍したのであらうか。批評家は色々に之を論じてゐるが、然しそれは何の根據もない想像で、矢張り耶穌自身が斯くの如く垂訓されたものに相違はないことが多くの學者に由つて證明せられてゐる。ブルウス博士の如き「弟子を教育せんがために注意深い努力が行はれた點から、連續した訓誡が試みられたと認むるの

が至當である」と言つてゐる。一方に於て又マタイに載せた教訓中には、例へば使徒たちの責任と艱難とを示めされた第十章の如く密集し寫されてゐるものもある。尙同様な例は第十三章に於ける比喻の類集であつて、此れは編輯上同項目に入るべきものを一所に連載したものと思はるゝ。其の七つの比喻は耶穌の親しく授けられたものであることは疑ひないけれども當日一時に語られたものではあるまい。然るに一方に第十八章と第二十三章との大部分は此の福音に記されてゐる色々な機會に語られたものの蒐集に相違ないとブルウフ博士は主張してゐる。即ちカペナウンに於て、十二使徒に對する訓誡の必要が危急であつて、主は其の不信の弟子たちに授けらるべき多くの語を有せられたに相違はあるまい。且つ將に其の死期の近ける際、豫て断片的に批評を加へられ、遂に其の死刑に導くに至つた似非聖徒に對し最後の充實した證言を與へらるゝは至當の行動であつた。

基督教道徳の基礎と稱せらるゝ「山上の垂訓」に對しても問題がある。山上に於て幾分長い教訓が授けられたことはルカの記録に由つても示めされてゐる。ルカは此れもマタイに記さるゝ所を區切つて載せてはゐるが、それでも耶穌が教訓を授けられた點には一致してゐる。然し此

の二つのうち何れが耶穌自身の教訓に近いものであるかと言ふ問題が起る。耶穌は果してマタイが一時に授けられたもののやうに記してゐる斯くの如き長い教訓を普通の聴衆に物語られたものであらうか。ブルウス博士は此れは特に其の弟子たちに對してのみ授けられた訓誡であると主張し、デギツド・スミス博士も同様な意見を發表してゐる。而して兩者共に此れは遙かに後に其の内環圏の弟子に對する訓誡として語られた所であると主張してゐるのである。

マルコが記録してゐる所に斯くの如く教訓を蒐集して挿入してゐる點からマタイの記録が歴史の順序に従つてゐるものとは思ひ難い。寧ろ其の教訓の浮ぶがまゝ記録したもので、時日の前後には深く意を留めなかつたものであらう。前にも言ふ如く「山上の垂訓」の如きは不用意の間に突然現はれて來るのである。而して此れは耶穌が幾多の傳道説教を試みられた後、其の効果なきに鑑み、特に献身したる弟子を周到なる用意を以て教育せんがために授けられたものと認むべきであらう。

一方に於てマタイの記録する談論は年代的と言ふよりも寧ろ項目分類になつてゐる所から其の物語の開展して行く上に弱い點があるけれども、同時に耶穌の談論だと彼の稱するものと、

耶穌が當面せられた全體の事情との相互關係の甚だ明確なものがある。此の點はパリサイ主義に對する批評の如き、第三福音書の記者の如きはそれを背景に隠匿してゐるのに比して遙かに重要な部分を占めてゐる。我等の主と學者並にパリサイ派との激烈な衝突は免れ難い所であつて、此の第一福音書に於ける争論の資料の大部分は、突然耶穌がパリサイ派に加へらるゝ彈劾の活躍せる描寫は其のまゝに傳へられたるが如くに、此の記録中にあつて最も信據すべき事實と認むるに足るものがある。「山上の垂訓」に於けるパリサイ派、學者に對する警告は、其所に當事者がゐなかつたからして論難よりも寧ろ訓令と見えるけれども尙ほ耶穌は此の機會に於て自己の宗教思想と當時流布した宗教思想との相違を示めさんと努められたことは疑なき所である。これはマタイが自ら附加したものでなく、ルカが省略したものに相違はない。

マタイが傳ふる耶穌の教訓は其の性質が統一してゐないとの議論がある。その間には興味を異つた方向が見らるゝ節もあり、又神學の態度に矛盾する所も見えないではない。デエクタルは第一の福音書の基礎となつた文書は最古のもので、今日のマルコと其の内容が甚だ似たものであつた。而してそれが最古のものであると言ふ所から特殊の權威があつたので耶穌の教訓と

思はしきものが漸次にそれに附加せられ、遂に四十五の項目に及んだ。斯くして幼年時代の物語、多くの比喻、基督の人格、教育、復活、再臨等數多の章句を見るに至つたと言つた。然し斯くの如きは謂なき議論である。ブルウス博士は此の福音書は今日見る通りのまゝで一人の手に成つたものに相違ないと言ひ、ヴァイスは此の福音書はエルサレムの滅亡後間もなく著はされたものでユダヤ基督教徒の信仰が此の凶變に由つて耶穌のメツシヤたるを疑ふに至り、約束せられたメツシヤの王國はイスラエルより奪はれて異邦人の間に移さるゝとの懼れが生じた頃にユダヤ國內で著作されたものであると言ひ、此の福音書は耶穌は眞にメツシヤたる王者にして、其の行動には幾多の豫言者の教訓を充實するものが認められ、耶穌はイスラエルの間に其の王國の建設に極力努められたけれども國民、特に有司等の不信に由つて妨げられ、爲めに神の國はユダヤの地を棄て、今は主として異邦人の教會の間に建設せられ、イスラエルは唯だ禍の世嗣として取り殘されてゐるが、それでも尙ほ此の災害を豫想しつゝも其の民を愛し、其の救はれんことを求めて忠誠を盡くし、神に與へられたる律法を守り、身を以て之に服従して（ラビの傳統を尊ばざるものと訴へられたけれども）之を遵奉せられたことを主張するもの

だと論じた。此の推論は確かに此の場合の要求を言ひ盡くしたものである。而して此の福音書全體の意義を明かにし、其の著述の計畫と著者との一致を示めしたものと云へる。

其の著者と福音書の起源及び特質

此の福音書は初代教會に於ては使徒マタイ即ち十二人の一員でガリラヤ湖の岸邊の税關から主に召された税吏が著作したものと重んぜられた。ユウセピアスの引照に由ればパピウス（紀元百四十年頃）は「マタイはヘブルの國語で *Ματθαι*（ロギア教訓集成）を編輯し、各自は己が力に應じて之を註釋した」と言つてゐる。又イレニアスは「ヘブル人の間にマタイは自國語の福音書を發表した。それはペテロとパウロがロマに傳道して教會を建設した頃であらう」と言つてゐる。ユウセピアスの傳ふる所に由るとパンチニウスは第二世紀インドに於てアラマイツクのマタイ傳を發見したと言はれてゐるけれどもそれは確實ではない。

然し何れにしても此の福音はギリシヤ語で編輯せられたもので、ヘブル語の原書は恐らくエルサレム滅亡と同時に消滅したものであらう。シリヤ語及びラテン語の翻譯（第二世紀の終頃

に現はれた)はギリシヤ語譯に由るものである。ジエロウム(紀元三百九十年)はカイザリヤに於て一部、ベレヤに於て一部「確實なるマタイ傳」と認むべきアラマイツク語の著述を發見して之を翻譯してゐる。然し彼は此のアラマイツクを何人がギリシヤ語に翻譯したかは不明であると言つてゐる。此の初代の學者たちが當時のマタイ傳がアラマイツク語のも、ギリシヤ語のも同様であつたやうに言つてゐるのに、他の方面では當時ユダヤ人基督者の間に使用せられた福音書がそれと同一でなかつたことを示めず形跡を遺してゐる點が批評研究上に一番面倒な點である。

斯くの如く其の著者及び起源に就いては諸説があるが、何れも一致せる點はダブルユウ・シイ・アレン氏(イン・クリコン)の言はるゝ所に盡きる。曰く「此れだけの範圍の事は言へるのである。即ち第三世紀の初からユダヤ基督者のナザレ派がマタイの著作と稱して、アラマイツク語をヘブル文字で記した福音書を有してゐた。これは今日の聖書中の福音書が彼の名を冠するに至つたと同様な意味でマタイの著作と言つて差支がない。即ち其の資料中の主要な部分が基督の聖句を其の使徒が蒐集したものであつたからである」と。アニサア・ジョン・マクリイン監

督は(ヘス・バイ・デキク)「使徒マタイはギリシヤ語」マルコ以外の文書、ロギア(教訓のみならず教訓と物語との連絡したもの)の原書をアラマイツクで編輯し、此れがために其の名が第一福音書に冠せらるゝことゝなつた。其の實際の著作は止むなく不明のまゝとせねばならぬ」と。要するに其の著者は自己の教師か、又は先進から聞いた所を、編纂したものであらう。其の舊約全書からの引照から其の著者はヘブル語の著述を知つてゐたものに相違なく従つてユダヤ人であつたことは想像に難くない。

第一福音書に於て最も目立つ特質はそれが豫言者の色彩を以て耶穌の活ける肖像を描いてゐる點に在る。従つて感化が甚だ深刻でインドに於ては之を讀むのみにして既に多くの回心者を起したと傳へらるゝ。マルコ傳に於ては人間として寫實的に描かるゝ耶穌はマタイ傳には基督として描かれてゐる。而して其の豫言者の語句を耶穌の少年時代、其の公生涯及び最後の受難の物語に適用して之を證明しやうと試みてゐる。

縱しマルコが其の實證的なるがために史的であると言つてもマタイに顯著な豫言的色彩があるから其の史的なことを否定する理由とはならないのである。それは一部は此の記者の性格に

も由るのであるが、一部は教訓を主とした目的から斯うなつたものであらう。彼は自己の思ふがまゝにか、或は又當時の讀者の信仰を養ふ必要に迫られてか耶穌を以て基督とする論題の證明に心を用ひてゐる。それは何れの目的から來たとしても記者は豫言の本文を集めて置いて之に應ずる事實を探がしたのではなく、其の有する事實に適應する豫言の本文を求めたものと推定せらるゝ。事實が本文を求めしめたのであつて、本文から事實を造つたのではない。最も或る場合には其の事實を表現する上に本文が影響を與へてゐる所もないではない。此の點からして記者がマルコにあるものは勿論其の他の資料全體に其の豫言の適用法を試みてゐることを心に留めて置かねばならぬ。彼はマルコが單に事實として傳へてゐる事件に速刻豫言の語句を引用するのである、斯くの如くマルコがバプテスマの舞臺から耶穌と其の弟子の北方に進まされた事件を無味乾燥に「彼等カペナウムに到る」と言つてゐる所をマタイは此れを一大事件として異邦人のガリラヤに大いなる光の顯はるゝ豫言の充實したものと論じてゐる。又マルコは安息日の夕にカペナウムに於て廣く病を癒やされた事實を唯だ其のまゝに報導してゐるだけであるが、マタイはエホバの苦難を負ふ僕に就いてのイザヤの有名な豫言を引用して之に懷がれて

ゐる。其他斯くの如き例は他にも之を求むることを得るのである。彼は決して歴史を創作する積ではない。辨證のため又其の教訓を強めるために豫言の證印を押捺して歴史を賑はしたものである。

今日の我等に取つて斯くの如き豫言の句は少しも辨證の用を爲さない。然し斯くの如き引照の甚だ貴い所以は耶穌に對する此の福音記者の概念を窺ひ得る點に在る。彼は耶穌を以てガリラヤの光明、人道の重荷を擔ふ同情厚き責任者、神の愛せらるゝ者、平和を求むる者、弱き者の友、全世界のため基督の職責を完うせんがために賜物と恩寵とを有する人物と考へてゐる。従つてユダヤの基督者に耶穌は基督なりと信ぜしむるに努め、先づ開卷第一、耶穌がアブラハムの裔にしてダビデの系統に屬せらるゝことを掲げてゐる。其のアブラハムの子とは耶穌がユダヤ人にして此の福音の讀者の同國人なるを知らしめんとし、ダビデの子とはメツシヤたる宣言を立證せんがためであつた。然し斯くの如き立證は今日の我等には無意味である。我等が耶穌を神の子と信ずるは斯くの如き外的の根據からではない、世界の救主として至常な贖的適應性を有せらるゝからである。

其の讀者と著作の年代

既に前各項目の中に述べたやうに第一福音書はユダヤ人の基督教團體へ其の信仰を堅めんが爲めに贈つたものに相違はない。

其の著作の年代は第一世紀の終りであつたものと思はるゝ。サンデエイはギリシヤ語のマトイ傳は紀元八十年に著はされたと言ひ、ツエエン博士は八十五年であつたと言ふ。第一世紀の終りに於てユダヤ人の教育に就いても異邦人の教會に就いても其の實際の事情が全く知れてゐない所から、斯くの如き問題には其の正確な判断を下すことが困難となるのである。此の點に於て第三世紀、四世紀の師父たちに取つても我等以上に事情は知れなかつた。然し兎も角もユダヤ國家の潰滅を距ること遠からざる期間に於て著はされたものに相違はない。

マトイ傳福音書

此の標題は決して始めの著作の中に掲げられてゐる譯ではない。古い寫本には四福音書を一

つに纏めて唯だ「福音書」と言ひ、其の一卷一卷に「マトイに由る」、「マルコに由る」と言ふやうに區別がしてある。ギリシヤ語の「福音」と言ふのは最も古くは「善き音信を傳ふるもの」の酬の意味であつたが、次には「贈られたる善き音信の感謝」と言ふ意味となり、最後に「善き音信」其のものの意味となつた。此の意味で新約全書には「神の喜ばしき音信、即ち救の消息」と言ふ所から適用せられてゐるのである。それでマトイ傳福音書とはマトイか傳へたと稱せらるゝ喜ばしき音信の意味である。

第一章

系圖一—十七

主耶穌のアブラハム以降其の王族に屬せらるゝ系圖である。

一 アブラハムの子、ダビデの子、イエス・キリストの系圖。○ニアブラハム、イサクを生み、イサク、ヤコブを生み、ヤコブ、ユダとその兄弟らとを生み、ミユダ、タマルによりてパレスとザラを生み、パレス、エスロンを生み、エスロン、アラムを生み、ヨアラム、アミナダブを生み、アミナダブ、ナ

アソンを生み、ナアソン、サルモンを生み、五サルモン、ラハブによりてホアズを生み、ホアズ、ルツによりてオベデを生み、オベデ、エサイを生み、六エサイ、ダビデ王を生めり。○ダビデ、ウリヤの妻たりし女によりてソロモンを生み、七ソロモン、レハベアムを生み、レハベアム、アビヤを生み、アビヤ、アサを生み、八アサ、ヨサバテを生み、ヨサバテ、ヨラムを生み、ヨラム、ウシヤを生み、九ウシヤ、ヨタムを生み、ヨタム、アハズを生み、アハズ、ヒセキヤを生み、十ヒセキヤ、マナセを生み、マナセ、アモンを生み、アモン、ヨシヤを生み、十一バベロンニ移さるる頃ヨシヤ、エコニヤこそその兄弟らごを生めり。○十二バビロンに移されて後、エコニヤ、サラテルを生み、サラテル、ゼルバベルを生み、十三ゼルバベル、アビウデを生み、アビアデ、エリアキムを生み、エリアキム、アルナルを生み、十四アルナル、サドクを生み、サドク、アキムを生み、アキム、エリウデを生み、十五エリウデ、エレアシルを生み、エレアザル、マタンを生み、マタン、ヤコブを生み、十六ヤコブ、マリヤの夫エセフを生めり。此のマリヤよりキリストと稱ふるイエス生れ給へり。○十七されば總て世なる事、アブラハムよりダビデまで十四代ダビデよりバビロンに移さるるまで十四代、バビロンに移されてよりキリストまで十四代なり。(ルカ三〇二十三—三十八参照)

此の福音の讀者は先づ當初に斯くの如き無味乾燥な系圖に遭つて煩はしく思ふであらう。然

し深く研究すれば道德上の意義を含み、大いなる教訓が學ばるゝ。此れは蓋し日本人同様系圖を重んずるユダヤ人基督者の讀者の爲めに記したもので、原書の順序に従へば「ダビデの子、アブラハムの子」とあり、即ち耶穌が救主としてダビデの王統から起られた所以を明かにして、豫言に應ずるものと暗に示めたものである。嘗に其の第一節のみならず、全體を通じて此の意義を示めさうと努めた跡が見らるゝのである。然し耶穌にして若し實際にダビデの後裔ならずとするも、救主としての至當な靈的資格を有せらるゝならば、ダビデの後裔と言つても精神的には何等の不都合もないのである。耶穌はバプテスマのヨハネはエリヤであると仰せられ、パウロは「汝等若し基督のものならばアブラハムの裔……たるなり」と言つてゐる。此の系圖の中に於て特に注意すべきは婦人の名の掲げられてゐることである。日本の於ても古い系圖には婦人は「女某」又は單に「女」と記さるゝのみであるが、ユダヤに於ても同様なのが常である。然るに此所にはタマル、ラハブ、ルツ、バテシバの四人の婦人の名が掲げられてゐる。然かも其のうちタマルは淫婦、ラハブは遊女、バテシバは二夫に見えた不義の婦で、ルツはユダヤ人の排斥する異邦人であつた。此れは血統に對する福音とも言ふべく、耶穌の福音の恩寵深き特色

が此の事實に現はれてゐると師父たちは註解してゐる。更に或る學者はラハブとパテシバとは罪人を示めし、タマルとルツとは悲惨な境遇を現はすもので、兩様の人間に對する基督に由つての神の恩寵を物語るものであると言つてゐる。ヴァイスは斯くの如き婦人が斯くの如き地位に揚げられたのは、人間の豫想に反して神は特殊の事業を行ひ給ふを示めすものであると言つた。ルカは斯くの如き名を載せてゐない。

一、アブラハムの子、ダビデの子、耶穌基督の系圖。アブラハムは何人も知るユダヤ民族の第一の祖先（創十一〇二十七以下二十五まで参照）、彼に由つて始めてエホバの禮拜は創設せられた。ダビテはユダヤ民族勃興に偉業を遂げた國王、（得四〇二十二、代上二〇以下、母前十六〇以下、母後全王上二〇等参照）、豫言書の至る所に其の後裔からして民を救ふべきメツシヤが現るゝことが示めされてゐる。ユダヤ人は其の後裔たるメツシヤの出現を俟望してゐた。而して此の耶穌こそ俟望せられたメツシヤ即ち基督であることを此所に示めすのである。

「耶穌基督」と言ふ名稱は後に呼び做した言ひ表はし方で福音書にはマター一〇一、十六〇十七、十八、マコ一〇一、ヨハ一〇十七、十七〇三に見えるだけである。使徒行傳及び諸書翰集に至

つて始めて屢使用せられてゐる。二、ユダと其の兄弟ら、ユダヤ民族はヤコブの子の代に至つて十二に分れたが、ユダは其の系統にダビデ王を起した。其の兄弟は同民族として國を造つたがために故更に斯く擧げたものであらう。三、パレスとザラ。舊約にはベレツとゼラとあり。五、サルモン、ラハブに由りてホアズを生み、……エサイを生み。此の年代を查ればサルモンからエサイの間に四百年以上の間隙がある。其の間が四代とせらるゝに過ぎない。年代の計算が間違つてゐるか、此の系圖が略せられてゐるかどちらかである。恐らく前者の誤りである。六、ダビデ王。ダビデは前に言ふ如く重要な人物なるが故に特に斯く稱してゐる。即ち耶穌の遠祖父として敬語を使用したのである。此の部分の系圖はルツ八〇十八―二十二、及び歴史上二〇五―十五より引用したものである。此れで一段落に區切らるゝ。七、ダビデ……十、アモン、ヨシヤを生み。此の系圖にはヨラムとウシヤの間に三代の國王の名が省略せられてゐる。即ちアハジア、ヨアシ、アマシヤが挿入せらるべき筈である。何故それを省略したのであらうか。ジエロウムは此れは一つは系圖の第二段落を十四代、即ちユダヤでの神聖な數の二倍とするためと、一つは神政々治に斯くの如き不徳の王の名を省くためであつたと言ふ。然しそれは至當の註解ではあるまい。

殊 後者は前の悪徳の婦人の挿入された例に見ても受取り難い。クリツストムは之を説明せず
に其のまゝにしてゐると言ふ。十一、ヨシヤ、エコニヤとその兄弟らとを生まり。此所にも省略が
行はれてゐる。ヨシヤの子はエホヤキムで、エリヤキムの子こそエコニヤであつた。代上三十
六に明かである。若しエホヤキムが此の系圖に加はれば十五代となる道理である。十六、ヤコブ、
マリヤの夫ヨセフを生まり、其のマリヤより基督生れ給へり。此所には聖母マリヤの系圖を掲げず、
養父ヨセフの系圖がある。そこで議論が生ずる。ホルツマンの如きは此れをユダヤ人基督者
はヨセフを以て耶穌の實父と思つてゐたものと論ずる。然しそれは此の一句を以て餘り深く
考へ過ぎた推論である。又或る學者はマリヤとヨセフとは同家系に屬し、従兄妹であつたと論
ずる人もあるが、それは想像に過ぎない。ヨセフに養はれた耶穌は、其の妻の子として、ヨセ
フの嗣子たるべく、従つてダビデの血統に屬する家系を承けらるゝこととなるのを示したも
のであらう。日本人たる考へからすればマリヤがヨセフとそれほど近親でなくともマリヤの祖先
だにダビデと聯絡すれば其の後裔として王位を繼承せらるゝに何の不都合も感じないのであ
る。而して此の幾十代の間にマリヤの家系の父祖があつたことは自然と思はるゝほど當然に

見える。十七、アブラハムよりダビデまで十四代、ダビデよりバビロンに移さるゝまで十四代、バビロン
に移されてよりキリストまで十四代。此の表に由るとダビデを前の段落の終りと第二の段落の始
め、エコニヤを第二段落の終りと第三段落の始めに二度宛數へねば各十四代とはならぬ。此れ
は然し必要な部分だけを掲げた意味であらう。學者は此の三つの段落は士師、國王、祭司の三
時代又神政、王政、教職政が基督に由つて概括せらるゝ意味であると言ふ。即ちイスラエルの
運命が、發達、衰頹、没落を経て贖の急に迫つてゐることを示めすものであると言つてゐる。

耶穌の降誕 十八—二十五

十八 イエス・キリストの誕生は、左のごとし。その母マリヤ、ヨセフと許嫁したるのみにて、未だ借に
ならざりしに、聖靈によりて孕り、たるこそ顯れたり。十九 夫ヨセフは正しき人にして之を公然にす
るを好まず、私に離縁せんと思ふ。二十 斯て、これらの事を思ひ回らしたるこそ、視よ、主の使、夢
に現れて言ふ『ダビデの子ヨセフよ、妻マリヤを納るる事を恐るな。その胎に宿る者は聖靈によるな
り。二一 かれ、子を生まん、汝その名をイエスと名づくべし。己が民をその罪より救ひ給ふ故なり』
二三 すべて此の事の起りしは、豫言者によりて主の云ひ給ひし言の成就せん爲なり。曰く、二三「視よ、

處女みごもりて子を生まん。その名はインマエルと稱へられん』之を譯せば、神われらと併に在すといふ意なり。二四ヨセフ寐より起き、主の使の命ぜし如くして妻を納れたり。二五されど子の生まるるまでは、相知る事なかりき。斯てその子をイエスと名づけたり。(ルカ傳一〇二六六一五六及び二〇四一七)

マタイ傳の記事は其の態度に於てもユダヤ人らしく養父たるべきヨセフを中心として描かれてゐる。「その孕りたる事顯れたり」の一句にはヨセフに對する無限の意義が含まれてゐる。彼は其の本文に見ゆる如く、此の不意の事件に就いて如何ばかり心を痛めたであらうか。其の許嫁の處女マリヤの品性を疑はねばならない破目に陥つたのである。彼にして若し其の愛を裏切れた復讐の念があつたならば、之を公にしてマリヤを刑罰に處するやう訴へた筈であつたらう。ユダヤに於て許嫁は結婚と等しき義務を相手の處女に負はする習ひであつたからして、其の不信の行動は妻の不貞と同様な制裁を加へらるゝ筈であつたからである。然し彼は正義の士であつたからして其の許嫁の關係を私かに斷つて、唯だマリヤをして不身持の不名譽のみで事済むこととせしめやうと試みた。彼のマリヤに對する至純の愛が此所に窺はるゝ。彼は其の窮境に

處して豫言者ホゼヤの如く、又詩篇の作者たちの如き憂悶に暗い月日を送り迎へたことであらう。「斯くてこれらの事を思ひ回らし居るとき」、彼は一夜夢に主の使を見た。夢は往々晝間の難題に解決を與ることがある。文案に惱んで寢た夜に、夢のうちに名文を綴るやう例は決して少くない。彼はマリヤの孕めるは神の攝理に由り、其の胎よりして民を救ふべき一人格の産まらるべきを天使より授けられた。彼は志を決してマリヤ娶ることとなつた。然し彼にして敬虔、己れを棄てた人物でなかつた限り、設令天使の語と雖も慎んで之に服従することは出来なかつたであらう。不信の人々には受け入らるべくもなく、郷黨隣人の間にさぞや彼を苦悶せしむる噂も傳へられたことであらうし、或はマリヤや彼の品格をすら傷くる妄評も向けられたことであらう。然かも彼は天使の一言に少しも疑ひを挿まず、後年救主たらるべき胎兒の母を保護し扶養するに遺憾なき道を守つた。デビッド・スミス博士は耶穌が神を以て「天の父」と仰せらるゝとき、其の幼時に於て父と呼び給ひし正義恩愛の人物の倂を聯想せられたものであらうと想像した。ヨセフは實に此の嬰兒を養ひ育つべき地上の父として擇ばるゝに足る人物であつた。

十八耶穌基督の誕生は左の如し。基督とは、ヘブル語のメツシヤに當り「膏塗かれたる者」の意

味で、豫言者、祭司、國王としての耶穌の職名である。以上の三職は其の就任の際、頭に膏を灌ぐから起る。舊約には救主に之を當辨めた所は唯だ一個所、(但九〇二十五、六)である。その母マリヤ、ヨセフに許嫁したるのみにて。マリヤはヘブル語ではミリアム。許嫁は結婚一ヶ年前に行はる。此の間勿論女は實家にゐる。階にならざりしに。夫婦の關係はなかつたのにとの意味。十九、夫ヨセフは正しき人にして、律法を忠順に守る人物であつたからして、其の明白な理由を言はず離縁狀を與へて私かに關係を絶たうと考へた。之を、は「彼女」と言ふ語であるがヴァイスは「愛する者」との強い意味があると言つた。即ち愛する者なるが故に律法に觸れないやうに注意した。公然にする。英語の改譯者は「公衆の見せしめとする」意味に譯してゐる。二十、此等の事を思ひ廻らしむるとき。苦悶、懊惱、錯亂しつゝ夜となく日となく之を思ひ續けたことは想像に難くない。見よ、主の使。見よはヘブル語の感投詞、天使の出現を活々描く意味、古代の註釋者は皆人間の形を以て見えない世界の使者が現はれたと言つてゐる。二十一、其の名を耶穌と名づくべし。此れは豫言の形での命令であるが、未來に對する命令であると同時に慰藉で、ヨセフをして堂々と英雄らしく行動せしめんがために、其の疑惑の中より救はんとして鼓舞するものであるとブルウ

博士は言ふ。耶穌。ヨシユアをギリシヤ語で綴つたもの。「エホバは援護者」の意味。フキロウはヨシユアの事業は主の救ひを象徴する註釋である(教十三〇十六、十四〇六、基一〇一参照)と言つた。此の命名の邊は舊約のイサク誕生の様子(創十七〇十九)に髣髴たるものがある。尙ほヨシユアはユダヤに於ては神聖な聯想の伴ふ名であつた。己が民を罪より救ふ故なり。此の人物に由りてこそ始めて世は政治的に非ずして靈的に救はるゝ所以である。即ち罪とはイスラエルの要する靈的の觀察を指すものである。二十三、二十三、觀よ、處女孕りて云々。此れは天使の語ではない。福音記者がそれに應ずる賽七〇十四の句を適用したものである。ヨセフは蓋し此の句に由つて此の一大難關に處して力を得たものがあつたらうか。イムマニエル。即ち「神我と偕に在り」の意味、此の嬰兒耶穌に由り神の援助を齎らさるゝを言ふ。此れは賽八〇八(ギリシヤ語七十譯)の句が譯として引かれたものである。二十四、ヨセフ寢より起き。ヨセフは此の夢に其の惑の雲を拂はれて、起き出た。最早彼は躊躇しなかつた。而してマリヤの胎兒を自己の法定の子と爲さんがために、マリヤを娶つた。然しそれは普通の夫婦關係のための結婚ではなかつた。胎兒の前途のために合法の手續を急いだためであつた。其の清淨な關係を福音記者は故更に記

してゐる。其の後此の夫婦は生涯不犯であつたとカゾリツク教會では主張する。即ちマリヤを以て久遠の處女であつたと認むるのである。然し福音記者が故更不犯の時期を掲げてゐるのに見ても、後年マリヤとヨセフが普通の夫婦關係に入つたことは明かと言はねばならぬ。若し特殊の夫婦であつたとするならば、それを一言明かにしない筈がない。前後の關係上斯く認むることは決して不當ではあるまい。

第二章

東方の博士來訪 一一一二

一イエスはヘロデ王の時、ユダヤのベツレヘムに生れ給ひしが、視よ、東の博士たちエルサレムに來りて言ふ、二「ユダヤ人の王として生れ給へる者は、何處に在るか。我ら東にてその星を見たれば、拜せんために來れり」三ヘロデ王これを聞きて惱みまどふ、エルサレムも皆然り。四王、民の祭司長、學者らに皆あつめて、キリストの何處に生るべきを問ひ質す。五かれら言ふ「ユダヤのベツレヘムなり。それは豫言者によりて、六「ユダの地ベツレヘムよ、汝はユダの長等の中にて最小き者にあらず、汝の中より一人の君いでて、わが民イスラエルを牧せん」と録されたるなり」七ここにヘロデ密に博士

たちを招きて、星の現れし時を詳細にし、八彼らにベツレヘムに遣さんとして言ふ、往きて幼児の、
 ことを細にたづね、之にあはば我に告げよ。我も往きて拜せん」九彼ら王の言をききて往きしに、視よ、
 前に東にて見し星、先だちゆきて、幼児の在すところの上にと止る。十かれら星を見て、歡喜に溢れつ
 つ十一家に入りて、幼児のその母マリヤと偕に在すを見、平伏して拜し、かつ寶の匣をあけて、黄金、
 乳香、沒藥など禮物を獻げたり。十二斯て夢にてヘロデの許に返るなどの御告を蒙り、ほかの路より己
 が國に去りゆきぬ。(マタイのみの記事)

其の理想に於て、道義に於ては兎も角とするも、實際に於ては人類歴史の始めより、權勢あるもの、威力あるもの、偉大なるものが同胞人類を征服して、之を従屬たらしめ、屈服せしめ、自己の欲するがままに之を驅使し來た。従つて弱肉強食は人類社會の免るべからざる運命であつて、被征服者は隙を窺つては征服者を斃して之に代はらんとし、斯くて人類の間には永遠に怨嗟仇敵の關係が持續せられねばならなかつた。藤原氏の暴に虐げられた民衆の間から各種の報復運動を生じ、源家が勢を得て天下に望むかと思へば、更に平家が起つて之に當り、平家の虐政の下に苦しめる民衆の間からは更に源家が再興して、之に代り、北條家、足利家、織田家、

豊臣家、徳川家、薩長の聯合革命運動、皆此れ權勢威力を以て民衆に望み、更に其の怨嗟を代表せるものが之に代つて同轍を踏む。之が古往人類歴史の何處にも見らるゝ通態であつた。

然るに此所に全く新たな國王が出現した。新たな國王は「事へらるゝ爲めに非ず、反つて事ふることをなし、又多くの人の拯贖として己が生命を與」(二十〇二十八)ふるために出現せられたのであつた。即ち人類歴史を祝福し、強者は弱者のために己を犠牲とし、大いなるものが小なるものの爲めに驅役に自ら甘じ、怨嗟を滅し、仇敵の念を棄てねばならない恩恵を與へ給ふ新たな支配者は出現した。人類歴史を美はしき調和に轉換せしむべき一大新主義の受肉者が出現したのである。實に人類に取つて感謝すべき一新事件でなければならぬ。

東方に於て天文を案じ、己が自身道を修めて人類の行詰まれる世界に一大活路の開かれんとを求めてゐた聖哲たちは、豫て臆氣に傳へられて待望した偉人物の出現を、新たな星の閃めくに由つて察知し、其の偉人物出現の噂の策源地たるユダヤの首府エルサレムを指して訪れて來た。ユダヤ國民自身が其の墮落の爲めに悟るを得なかつた此の大事事件は却つて忠信、敬虔な異邦人に由つて發見せられたのであつた。彼等は尋ね訪ねて遂にベツレヘムに來つて此の祝福

すべき嬰兒を拜した。

暴力を以て天下に望み、思ふ所として行はれないことのない大王ヘロデは、噂を聞いて生れたばかりの嬰兒にさへ懼れ惑ふて戰慄いた。權威を恃むものは外觀の堂々たるに似ず、其の内心には常に戦々恐々たる弱點がある。彼は自分に敵手として民衆の心を収めて現はれ來る將來の新國王に對して國外からまでも使者の到來したのに驚き怖れたものであらう。

博士たちは漸くにして嬰兒を發見し、之を拜して其の禮物を獻げた。其の獻物が黄金・乳香・沒藥である所からして博士の數は三人であると想像し、又東方の國王たちであつたと唱ふる人々もある。國王にせよ、聖哲にせよ、彼等は東方異邦の國民の惱を代表し、新たな生命に接せんとして訪れて來つたものに何の異る所はない。尙ほ我が日出づるの國も亦東方として此の代表者を送つた一つに列せねばならぬ。彼等は心行くまで嬰兒を拜し得て各其の故國に歸つた。

因にマタイ記者は此所で基督降誕の時刻と場所とを示めず積りではなかつた。即ち新たに生れた國王たるメツシヤに對して世は如何なる待遇を與へたかを示すにあつた。

一、耶穌はヘロデ王の時。ユダヤの國王ヘロデはイドム人アンテパスの子で、ロマの元老院に由つてユダヤの王に任命せられた人物である。其の始め父の敵ヒルカナスを滅してユダヤを奪つたのであるが、ヒルカナスの女マリヤムの美に心を傾けて之を娶り、アレキサンダアとアリストブラスの二子を産んだ。然し妻は敵の娘であり、二子は敵の外孫に當る所から何時自分の位を奪つてヒルカナスの怨を酬ゆるかも知れないと言ふので、其の始めに愛を注いだ妻も、自分の二人の子をも殺して了ふほど残忍な男であつた。耶穌の降誕後少くも二年は生きてゐたことは此の記録の後節で明かである。今日我等の使用する紀元は五六年の誤算がある、それは此れを最初に算定したときからの誤りであつた。故に本書發刊の千九百二十六年は實は千九百三十一年又は三十二年に相當する筈である。ユダヤのベツレヘムに生れ給ひしが。マタイではヨセフ、マリヤが外の村から訪れてベツレヘムへ來たと言ふ形跡は少しも留めてゐない。ベツレヘムは肥沃豊饒な地方の中央にあり、「食物の倉」と言ふ意味であつた。書十九〇十五にあるガリラヤのベツレヘム(ゼブロン)と區別せんがために「ユダヤの」と言ふ。ジェロウムは「ユダの」と記すべきだと言つた。エルサレムより南六哩に在る。ダビデ王も此所に生れたので、「ダビデの村」

とも稱せらるゝ。觀よ、東の博士たちエルサレムに來り。博士ちとはマギと言ふ。プラトウはマギをゾロアスタアだと言つてゐる。イスラエルの暴君と異邦人の聖哲とが出遭つたのである。神の選民の間に在つても暴ならんとするものは暴に、異教の間に在つても聖たらんとするものは聖となる。當時の東方はアラビヤ、ペリシヤ、メデキヤ、バビロン、バルテヤ等である。彼等が先づ首府を訪れて來たのは自然である。二、ユダヤ人の王と生れ給へる者は何處に在るか。「生れ給へる王」は六世紀の間ユダヤに起らなかつた。ユダヤ人から見れば、其の出生から言つても、品性から言つてもヘロデは闖入者であつた。「王として生れた」人物ではなかつた。ユダヤの救主出現の希望は世界に廣く傳はつてゐたことは、基督教の文書のみならず、ヨセフスやタンタスの記録を始め其の他の外部の文書で明かである。アルリン氏(イン・クリ・コン)は新しい日本譯、欄外の通りに譯すのが至當で「東にて」とは不當であると言ふ。さう解すべきであらう。マギが星に就いて人物の出生を豫言するのは珍らしい事ではなかつた。アレキサンダア大王出生の前夜マギが、アジアの撲滅者が生れることを豫言したと言ふ。耶穌降誕の星に就いては諸説がある。占星學者たるマギは、天文學上明瞭な一新星を發見して之をそれと認定したと言ふ人

もある。然し主觀に山つて世界には其の意義の明かな自然の出來事があるのを察すればこれは決して不思議なことではない。國民が自己の危急の地位を悟らず、淫靡放逸奢移に流れてゐることを深く働いてゐる人々は千九百二十三年九月一日二日の大震火災を以て神の警告と認め、それを聞いて憤つた人々もある。然し此の事實のために國民の間には道德上から來る——宗教的に之を理解した人々の間には——實現の行動が取られた。自然の現象は學ばんと欲する人々には大いなる意義あること斯くの如くである。新星の發現を見てマジは其の熱望の達せられたことを意識して行動を起した。又一面に占星學の全體系は荒唐無稽な妄想であつたに相違ない。然し神を求むる者には攝理に由つて其の手引となつたものである。スピノザの豫言に對する解釋は此の點で立派な參考である。人間の誤れる思想に伴ふ象徴も眞理に彼等を手引きすると。誠にさうである。阿彌陀如來の第十八願は荒唐無稽な神話である。然かも人類の苦惱から編み出された一宗教體系の中には、耶穌基督なる活ける人格の事業を髣髴たらしむるものがある。三、ヘロデ王之を聞きて憤み憂ふ。原書に由ると王と言ふに重きが置かる。即ち王としてヘロデが大いに狼狽した意味である。我まゝな人間ほど他人の人氣に氣を揉むと等しく殘忍暴

戻な彼は民衆に愛着せらるゝ新國王の降誕に對して、王位のために甚だしく煩悶したのである。仁者に敵なし。仁政を布いてゐれば彼は平和であつたらう。殊に老年に及んでゐると、パリサイ黨を壓迫してゐたのが彼に取つて最も苦惱の源であつた。エルサレム當然。耶穌を十字架に釘けた都人士の輕侮が此所に見える。愛國の至情、正義の念から新國王の出現を喜ぶに非ずして、唯だ自己の安穩のみを冀ひ、萬一の事あらんかと恐怖したのである。四、王、民の祭司長、學者らも。或る註解者はサンヒドリムの召集だと言ふ。然し長老が數へてないので此れは神學に委しい人々のみの集會と見るのが至當である。彼は平生餘り快く思はない此等の人々を召集した。基督の何處に生るべきを。此れは神學の上から何處で基督が生れ給ふべき筈かを質問したのである。ユダヤのベツレヘムなり。此れは決して今の嬰兒基督の降誕を信じて言つた語ではない。唯だ豫言に斯うありと答へたまでで、當時世に行はれた希望を述べたのである。六、ユダの地ベツレヘムよ。此所の引用句がヘブル語、ギリシヤ語七十人譯、及びマタイ記者、各異つてゐるのが逐語默示(註、聖書は一言一句誤謬なく皆聖靈に由る神の默示であると主張する一派、日本では主として智識や學問や往々醫術さへも輕蔑する人々の間に行はれてゐる)の立たくなる一つの確かな

例であるとスレエタア教授は言ふ(センチュ・バイ)。即ちベツレヘムの豫言は迦五〇二から来てゐるのであつて『少なき者なり』が、マタイには『最小なき者に非らず』となり(正反對)『郡中にて』が『長たち』となり、『わが民イスラエルを牧せん』との最後の句は此の豫言とは全く離れ、母後五〇二のダビデに對する神の約束から引用した語である。此れは記者が自由に舊約を註釋する手法に従つたものであらと註解者は言ふ。七、八、ヘロデ密かに博士たちを招きて星の現はれしときを詳細にし。ヘロデは星の現はれた始めのときからどれ程それが見えてゐたかを詳しく正確に科學的に研究した意味がある。彼らもベツレヘムに遣はさんとして。マギはエルサレムまで訪ね來つてヘロデに謁し、祭司學者たちの擧言に由つて知つたベツレヘムへ、ヘロデが彼らを遣はすこととなつた。我も往きて拜せん。信すべからざる動機! 暴君、殺人狂の禮拜! 然しマギの如く心聖潔にして單純なる人々は容易に欺かれたことであらう。十一、家に入りて。ルカは嬰兒が既に於て降誕せられ、馬槽を搖籃とせられたと言ふ。而して牧羊者の訪れたときヨセフとマリヤが側にゐたと記してゐる。又ジャスチン・マアタア、オリゲン、ジエロウム其の他は此れは洞穴であつたと傳へてゐる。マギの來訪のときはマリヤ一人が側にゐたと記され、

家とある。既に厩を出て同情者の家にゐたものと想ふても差支へあるまい。デギツド・スミス博士はマギの來訪を降誕二ケ年後のやうに想像してゐる。黄金、乳香、沒藥。師父たちは此の禮物に神秘的な意義を附して黄金は國王のため、乳香は神に、沒藥は死する運命の人に献げた。即ち國王、豫言者、犠牲として身を献ぐる祭司として基督の三つの職分に對する象徴だと言ふのである。此の禮物が三つであつたためにマギの數を三人であつたとして後には其の名をさへ傳へたものがある。十二、斯くて夢にて。恐らく彼等はヘロデの人物・品性過去の經歷を聴き知つて、さしも單純無垢な心にも大いに警戒する所あり、且つ嬰兒の爲めに慮つたものであらう。夢はヨセフやマリヤの場合と等しく其の頭腦のうちに宿つた正確な思慮が眠れる間に描き出されたものに相違はない。

エジプトへ遁る 十三—十八

十三 その去り往きしのち、視よ、主の使、夢にてヨセフに現れていふ「起きて、幼兒とその母を携へ、エジプトに逃れ、わが告ぐるまで彼處に留れ。ヘロデ幼兒を求めて亡さんとするなり」十四 ヨセフ起きて、夜の間幼兒とその母を携へて、エジプトに去りゆき、十五 ヘロデの死ぬるまで彼處に留り

ぬ。これ主が豫言者によりて『我エシブトより我が子を呼び出せり』と云ひ給ひし言の成就せん爲なり。
 ○十六愛にヘロデ、博士たちに贈されたりと悟りて、甚だしく憤はり、人を遣し、博士たちによりて詳細にせし時を計り、ベツレヘム及び凡てその邊の地方なる二歳以下の男の兒を、こそこそく殺せり。
 十七、ここに豫言者エレミヤによりて云はれたる言は、成就したり。曰く、十八、聲ラマにありて聞ゆ、
 慟哭なり、いさどしき悲哀なり。ラケル己が子らを歎き、子等のなき故に慰めらるるを厭ふ。

幼弱の救主は未だ母の乳房を離れ給はざるに既に世の罪を其の身に負はるゝ苦境に立たれねばならなかつた。光榮と苦難の交響樂は救主を廻つて生涯轉換し來る使命であつた。國王の光榮を以て禮拜せらるゝかと思へば、忽ちに暴虐の手は其の御頭に加らんとするのである。價高き黄金、乳香、沒樂の禮物を受けらるゝかと思へば今は風聲鶴唳にも氣を置く漂浪の子となられねばならなかつた。

然し救主の養育を托せられた聖なる家庭の上には常に神の加護滋きものがあつた。敬虔なる養父ヨセフは天使の告知を受くる否や忽ちに床より起きて、夜中に拘はらず、何の猶豫も躊躇もなく、エヂプトを指して、母子を勞はりつゝ遁亡の旅に上つた。エヂプトよ。それはイスラ

エル人に取つては無限の感慨を宿す國土であつた。イスラエルの君王がエヂプトに暫しの宿を托せらるゝは誠に自然と言はねばならぬ。ユダヤ人に示めすマタイの福音書が之を意義深く記すも道理である。アブラハムも此所に漂浪した。其の國民歴史の重要な記録たるモウゼの出生も律法も、偉業も、其の國民的意義の發端も何れはエヂプトに關聯せざるものはない。國民の祝節に長く遵守せらるゝ習慣も皆此の國土を追懷せしめざるものはない。幼弱の救主にして若し既に東西を辨別せらるゝ交ならんには、彼の始めて過越の祭に首府の神殿を訪れ給ふたときと同様な感慨に胸を躍らさるゝことであつたらう。

餘命幾程もなき殘忍なる暴君は、マギを欺き得ざりしを悟ると同時に手兵を遣つて、ベツレヘムに亂入せしめ、それと見分ち難き耶穌を遁さじと、二歳以下の男兒を悉く殺戮せしめた。世界大戦中、獨帝ウエルヘルム二世は幼年婦女を滿載せるタイタニック號を爆沈せしめて天下の憤情を買つた。然し聯合軍必らずしも無垢至純とは言へなかつた。タイタニック號上にも軍需品皆無なりしと誰が言へやう。其の公明は神にして始めて裁斷し得る所である。然し此れは何等の悪意なく、何等の疑懼すべきものなく、自己の抱育愛撫すべき國民中の然かも天真たる

無辜の嬰兒である。彼は自己の妄想と猜疑の念に驅られ、多年の悪業より自ら良心の苛責に苦しみ悩み、己に加ふべき憤りを世の救主に轉嫁し、加ふるに當面の敵にも非ざる他の嬰兒をまて撲殺するに至つた。罪の罪を生む凄慘之より甚だしきものがあらうか。憎むべき悪虐之より甚しきものがあらうか。然し神の弱きは人よりも強く、大兵を擁し、天と勢を競ふ暴力ありとも攝理の手には勝つを得ぬ、神の加護の下に、平和の君王は既に其の手を脱して遠くアラビヤの沙漠を辿つて居られた。救主は自ら生命を擲たる時の來るまで、如何なる老猾の術を廻らしても人間の謀に由つては一指をだに觸るゝことを得なかつた。

十三、**觀よ、主の使現はれて。** 危険が迫つたので、其の出現も不意であつた。エジプトは饑饉の避護所としても亦政治上亡命にするにも最も便利な地方で、既にアレキサンドリアには夥しきユダヤ人が移住してゐて、パレスチナとエジプトとの間には商隊の群が、絶えず往復してゐた。然しヘロデの権能は此の國外の民には何事も加ふることを得なかつた。十五、**我エジプトより我が子を呼び出せり。** 此れは何十一〇一からの引用句で、ヘブル語原書から抜いたものである。ギリシヤ譯とは異なるものがあると註解者は皆言つてゐる。十八、**其の妻ラマにありて聞ゆ。** 嬰兒

の殺戮の事實は豫言書の中にはない。豫言書のベツレヘムとラケルとの關係が引用されたもの。ラマ(耶三十一十五)はエルサレムの北六哩である。然し高い土地と言ふ普通名詞であるからしてベツレヘムの近郊の高地を指したものであらう。

ナザレへ歸還 十九—二十三

十九 **ヘロデ死にてのち、** 觀よ、主の使、夢にてエジプトなるヨセフに現れて言ふ、二十 **起きて、** 幼兒 **とその母を携へ、** イスラエルの地にゆけ。幼兒の生命を求めし者どもは死にたり。二一 **ヨセフ起きて、** 幼兒とその母を携へ、イスラエルの地に到りしに、二二 **アケラオその父ヘロデに代りて、** ユダヤを治むを聞き、彼處に往くことを恐る。また夢にて御告を蒙り、ガリラヤの地方に退き、二三 **ナザレといふ町に到りて住みたり。** これは豫言者たちに由りて、彼はナザレ人と呼ばれん、と云はれたる言の成就せん爲なり。

三次び天使は敬虔忠信なヨセフに現はれた。權勢の窮極を盡くし、殘虐の限りを行ひ、自己の安全を期せるヘロデも、煩悶、懊惱に滿ちたる七十年の生涯を終つた。其の精神の困憊せるが如く肉體も亦惡臭近づくに堪へざる疾患を得て轉展しつゝ斃れたと傳へらるゝ。多年の暴戾、

悪虐は彼の平相國が悪性の熱病に其の身を終れると等しく、到底天の配劑を免るゝことが出来なかつた。彼等の地上の長き生涯は畢竟野心に蝕^むまるゝ焦燥と罪惡の反應に悶ゆる慘憺たる悲劇の連續に過ぎなかつた。天使は此の暴君の悶死を傳へて、幼弱の救主と望なる母とを擁して故國に歸るべきをヨセフに命じた。常に神の聲に聽く用意の周到な彼は即刻、其の命の如くエデプトを出發した。バビロンの囚虜から解放された昔の物語を此所に見る心地がせられたことであらう。

然し、其の父の器量を有せずして残忍の性状のみを遺傳したアケラオが亡父の最期の望に由つてユダヤを治むるを聞いて思慮深きヨセフは、父祖の地ベツヘレムに再び入らず、轉じて此の地方の邊鄙な村落ナザレに隠れた。

罪人の友、遊女の同伴として生涯侮蔑を被らるべき救主は、遂に人間としては永遠に拭はるべくもなき侮辱の枕言葉を以て其の名を飾らるゝことゝなつた。其の弟子たらんとする人物にすら「ナザレより何の善き者か出づべき」と唾きの如く吐き出さるゝ、其ナザレを以て出身の地と歌はるゝ運命に立たることゝなつた。ナザレの耶穌！ 何の誇りもなく、何の光榮もなく、

平凡、卑陋の賤民、粗暴、狡猾の愚民の群がる寒村に幼弱の救主は其の前生を托して、歴史のあらん限り彼等の一人として其の名を列せらるゝことゝなつた。之に反してナザレの渺たる寒村は、救主を其の懷に抱育したるが爲めに地と共に永く其の名を人心に刻せらるべき祝福を擔つた。實にや救主の坐す所、地獄も終に其の醜と其の苦とを拭ひ去らるゝのである。

二十、生命を棄めし者共。死んだのはヘロデ一名であるが、然し斯くの如き種類の人物は死ねりと言ふ意味であらう。二十二、アケオラ。ヘロデ大王の遺言に由つてユダヤの知事となり、其の所領はイドマヤ、サマリヤをも含んだ。二十三、ナザレ人と呼ばれん。ナザレ派と言ふ禁慾的な一派があつたけれどもマタイ記者がそれと耶穌とを結ぶ道理はない(十二〇九參照)からして、此の豫言が舊約全書に求められないのを見るとそれが失はれた卷中の句であつたものと認むる外はあるまい。

第三章

バプテスマのヨハネ 一一一二

一その頃バテスマのヨハネ來り、ユダヤの荒野にて教を宣べて言ふ、二「なんぢら悔改めよ、天國は近づきたり」三これ預言者イザヤによりて、斯く云はれし人なり。曰く、「荒野に呼はる者の聲す、主の道を備へ、その路すぢを直くせよ」四このヨハネは駱駝の毛織衣をまきひ、腰に皮の帯をしめ、蝗と野蜜とを食せり。五爰にエルサレム及びユダヤ全國またヨルダンの邊なる全地方の人々、ヨハネの許に出来たり、六罪を言ひ表し、ヨルダン川にてバテスマを受けたり。セヨハネ、パリサイ人およびサドカイ人のバテスマを受けんとて、多く來るを見て、彼らに言ふ「蠅の裔よ、誰が汝らに來らんとする御怒を避くべき事を示したるぞ。八さらば悔改に相應しき果を結べ。九汝ら「われらの父にアブラハムあり」心のうちに言はんと思ふな。我なんぢらに告ぐ、神は此らの石よりアブラハムの子らを起し得給ふなり。十斧ははや樹の根に置かるされば凡て善き果を結ばぬ樹は、伐られて火に投げ入れらるべし。十一我は汝らの悔改のために、水にてバテスマを施す。されど我より後にきたる者は、我よりも能力あり、我はその鞋をさるにも足らず、彼は聖靈と火にて汝らにバテスマを施さん。十二手には箕を持ちて禾場をきよめ、その麥は倉に納め、穀は消えぬ火にて焼きつくさん」(マルコ二二八、ルカ三〇一十八、ヨハネ一〇五—一三四)

萬世萬邦を統べ、民衆のために肉を裂き血を流すを以て其の政綱とせる平和の君主は今將に

此の世に出現せられんとして、前衛を司る使臣の警蹕の聲はユダヤの荒野に鳴り轟いた。

イスラエルの歴史に豫言者の姿が絶えてより爰に四百年、宗教は單なる儀禮と化し、教師は唯だ經典の暗誦者に止まり、活ける靈的生命は神の選民の間に全く枯涸し盡してゐた。時に其の昔アハブと奸婦イゼベルの感化の下に國民がバアルの禮拜者と墮落せるに際し、忽然ギリアデの山間より、淫風荒ぶ王宮の庭に闖入し、峻烈なる證言を、國王、王妃、廷臣の頭上に浴せし彼のエリヤに髣髴たる一豫言者が不意に現はれて焔の如き呪咀の叫びを再び其の故國の民衆の上に擲つた。彼は神を畏るゝ信念に戦き、故國を愛する至情に燃えてゐた。彼はアモスの如く「獅子吼ゆ、誰れか怖れざらんや、エホバ物言ひ給ふ、誰か豫言せざらんや」の慨を以て聽て國民に降るべき審判を警告した。

是れぞ即ちイスラエルの歴史に最後の豫言者たるバテスマのヨハネであつた。彼は禁慾孤獨の生活を營み、只管に神に事ふることに励めた正義淳潔の國士であつた。其の風采、人格、居常がエリヤに酷似するのみならず、エリヤの對手はアハブとイゼベルであつたのに對して、彼の對手がヘロデとヘロデヤとであつた點に於て境遇の頗る共通せるものがあつた。

彼は救主の恩寵深き音信が傳へらるゝに先立ちて其の道を備へんが爲に現はれたものである。新約の神の慈愛に感激せんとするものは先づ舊約の峻嚴なる神の訓練を経ねばならぬ。彼が代々の豫言者を代表し、其の舊新相接する境にあつて、其の先進の使命を締括らんがため、救主に先立つて現はれたのは當然の攝理と言はねばならぬ。正に彼は人類を贖に由る救に導く師傳として最後の職責を勤むるものであつた。

彼は救主將に現はれんとして天國の近きに在るを知つた。而して蓄積せる國民の罪惡は必らず、峻烈なる救主の審判を免るゝ能はざるを察して、其の悔改、進善の決意、甚だ急なるものが在るのを觀取した。

彼の意識せるイスラエルの國王、天國の主權者は善果を結ばざる樹は斧を以て伐採し、穀は集めて火に投ずる嚴酷なる審判者であつた。而して其の憤怒の火焰は刻々として野火の如く彼等の頭上に迫つてゐるものと彼は信じた。

彼の衷心より迸る自信ある熱辯に聽衆は其の良心を覺醒せしめられ、描寫し來る凄慘たる審判の光景に戰慄して、打ち惑ひつゝ、其の周圍に群がつた。彼は此等の有望なる志道者に對し

て謙つて自己の使命を傳へ、彼は畢竟來らんとする國王の前驅に過ぎざるを告白し、眞のメツシヤの偉業が己の後に行はるべきを豫報した。彼が自己の赫奕たる傳道の成功に聊かだも高ぶらず、慎んで其の本分を守つた偉大は誠に感歎に堪へざる所である。

一、マルコの福音書は此點から出發してゐる。耶穌の三十年の生涯は全く不問に附せられてゐる。故に本福音書の第二章と第三章の間に三十年の距あることを知る。唯だルカのみが二〇四十二―五十二にエルサレムへ宮詣の一挿話を載せてゐるだけである。典外聖書には耶穌の幼年、少年時代の物語を描いてゐるが、其所に現はるゝ耶穌の品性よりして何人の眼にも偽物であることが一目瞭然である。己の意に満たざるものには奇蹟を以て報復し又信頼せられんがために秘術を行ふ所は恰かも「高僧實傳」中、弘法大師の章を読む心地がする。その頃、續けて讀むと第二章との關係のやうに見えるけれども、それとは何の聯絡もなき語である。寧ろ「次の物語の起つた當時」と言ふ意味である。バプテスマのヨハネ來り。バプテスマのヨハネはユダヤ人中に遍く知られた人物であつた。ヨセフスの歴史十八〇五の二、一一七にもバプテスマのヨハネの記事がある。儀典は全くヨハネの獨創であつたらしい。當時にも斯くの如き習慣を見ない。彼は其

の半生を全く荒野に送つたものと思はるゝ。荒野にて。ユダヤではない。小丘起伏する中央とヨルダン及び死海との間の沃野である。其所を舞臺として彼は活動した。二、悔改めよ。此れが彼の唯一の標語である。耶穌も亦之を用ゐられたけれども更に主要な標語は「信ぜよ」と言ふにあつた。天國は近けり。此れはマタイのみが特に用ゆる語で、ヨハネ福音書にも耶穌の御語にも見えない。是は此の福音記者の獨創であるとヴァイスは言ふ。然し何れの註解者も「神の國」とあるのと別に深い意味の相違はないと言つてゐる。三、これ預言者イザヤに由りて斯く言はれし人なり。マタイ記者はヨハネを以て其の民を救はんがためにエホバの降臨せらるゝに際し之を宣傳する人物として豫言されてゐる其の當人と解したのである。荒野に呼はる聲云々。これは賽十一〇三からの引用句でギリシヤ譯(七十人譯の事以下準之)を用ゐてゐる。ヘブル原書は「汝ら主の道を荒野に備へよ」となつてゐる。

四、このヨハネは駱駝の毛織物……皮の帯……蝻と野蜜……。其の衣服は粗末なもので王下一〇八に見えるエリヤの風貌其のまゝであつた。彼がエリヤの再來とせられたのは歴史上に根拠があるのであつて空想ではなかつた。其の食物も亦鴉の運ぶ餌に養はれたエリヤと同様なものであ

つた。小亞細亞地方の沙漠では今でも尙ほ之を食料とすると言ふ。因にファブラが佛國で有名な昆虫學者となつたのは中學生を伴つて野外に出たとき、彼等が藁を管に用ゐて野蜜を吸つたのを發見して興味を覺えたのが始めであつたと言ふ。五、爰にエルサレム及ビユダヤ全國またヨルダンの邊なる……出て来る。此の「出て来る」は不完全動詞であるからして其の行動が引き續き演ぜらるゝ意味である。従つて陸續として其の群衆が加はつたのであつて、始めは少數の人間の環が漸々に大衆となつたのであらう。マタイの地名の描き方は逆で、本當は始めにヨルダン河畔の人々が集り、それからユダヤ全土に及び、遂に保守的で冷笑的な都人士までも引かるゝに至つたものであらう。六、罪を言ひ表はし。バプテスマを行ふ人物の説教に由つて其の苦悶を感ずるに至り之を言ひ表はすのであるからして即ち悔改の結果である。イスラエルに於ては國民一般の罪を告白した例はあつた。日本の神道に言ふ罪なるものも皆一般的穢の意味である。然し此所には各個人が、自己の特殊の罪惡を感じて悔改した新たな事實が見えてゐる。此れはイスラエルの歴史に未だ曾つて見ざる所で、誠に驚く可き光景と言はねばならぬ。七、パリサイ人及びサドカイ人。何れの福音書にも屢現はるゝ二黨派で、殊に前者は各福音書ともに繁々と其の名を

載せてゐる。これ彼等が律法の墨守に熱注し、宗教に關與してゐたからで、後者は宗務と世俗的の徒黨であつた。パイサイは「聖別」を意味し、マカピイ家(紀元前百六十二年—六十二年)の獨立運動の際は「敬虔派」として其の股肱となつた。サドカイは恐らくサドツクなる創立者又はサドカイトなる一大家族が其の原始であつたので斯く稱するのであらう。彼等はヨハネの説教を聽かんがために靈的要求から訪れて來たものではあるまい。彼等は種々の動機から此所へ曳かれて來たもので、斯くの如き連中には道徳的な單純さは毛頭ないのが常である。好奇心から來たものもあり、流行に驅られて來たものもあり、又事情の内偵に來たものもあつたであらう。それは何れも確固たる同情もなければ又特別に毒心を抱いてゐた譯でもなかつた。どんな場合にも彼等はこれほど深刻で噂の高い運動を等閑にして置く譯に行かなかつた。それで彼等は別にバプテスマを受くるためでもなく、又或る人々が解釋するやうに彼に危害を加へて此の運動を中止せしむるために來たものとも受取れない。唯だ不思議な珍らしい光景を見て、楽しむために此所へ出て來たのであつた。ヨハネは勿論それを喜ばなかつた。寧ろ彼等が其所に居合はすことを不快に感じた。單純で、敏感で、道徳的な彼の本能は即刻彼等の不眞面目な態度で其の裏心

を看破した。而して其の道徳的熱情に驅られた憤怒の念は彼の唇から迸つた。「蝮の齧よ……」。中世紀の註解者は蝮は母の胎を食ひ破つて出て來るからだと言つた、然し此れは冬期に種を蒔かんがため秋切株に火を放ち、枯れた周囲の草原を焼くため蠍や蝮が驚いて飛び出すのを言つたもので、蝮と言ふ語に重い意味があるのではなく、其の逃げ惑ふ様に重きを置くべきだと多くの註釋者は言ふ。來るべき御怒。神の怒、即ち審問の思想こそヨハネの頭腦に浸みた觀念であつた。メツシヤの最大の事業は審問であると彼には思はれた。然し彼が普通のユダヤ人より進んでゐる點は、ユダヤ人が審判を以て異邦人に降るものと信じてゐるのに彼はイスラエルの不信の者に加へらるゝものとして警告してゐることである。八、悔改に相應しき果を結べ。汝等若し此の審判から免れたいと思はば悔改の果を結べ、悔改は罪を告白してバプテスマを受くる以上であるとの意味。悔改は罪を告白するのみでは充分とは言へぬ。「生活の道徳的改善を示めす」意味で外部の行動や規矩よりも思想感情の變化を指す意味を有する。此れは勿論聽衆全體に對するものであらうが然しバプテスマを受けても尙ほ不眞面目なバリサイ、サドカイ兩黨の人々を指して警告するのであつて、誠實な悔改には之と共に道徳的改善が伴ふべき筈であると言ふ。

彼等が悔改したことに信を置かないヨハネは其の改善の行はれないことを看取してゐる。尙ほ耶穌は一層深く道徳は畢竟内部の生活に在るを宣傳せらるゝのが主題であつた。九、我らの父にアブラハムあり。ユダヤのラビはユダヤ國民は割禮あるが故に救はるゝも割禮を受けざる國民はゲヘナに墜つと教へた。即ち救は國民たる權利と儀式とに由つて得らるゝものと心得てゐた。更に自ら身を修めず道を磨かず、日本人なるが故に愛國心強烈なり、大和民族なるが故に日本魂ありと自負すると同様である。武士なるが故に律儀なりと昔の人は考へた。然しいざ事あるとき、五萬三千石の城下に、眞に武士の氣魄を有せしもの僅かに四十七人なりしと思へ。血縁が人を造る力は薄い。況んや宗教は各個人の信仰の問題である。其の人の心に有するもの、其の人の行ふ所こそ宗教であり、救の條件である。殊に斯くの如き不當の宗教を教へつゝある指導者は深く省みねばならないものとしてヨハネは警告するのである。ヨハネの説教、此所を記録したのは福音記者が、此の著作の目的に最も相應と認められたからであらう。石よりアブラハムの子らぞ起し。生命とは最も遠いものにも生命が創造せらるゝを言ふ。十、芥ははや樹の根に置かる。果樹が其の果を實ばねば唯だ無益なるのみならず有害である。パレスチナの如き豊饒な地方、

園藝が其の資産を生ずる源である地方での樹に就いての判断は、樹を見れば即刻建築を想ひ起す日本の我等とは觀念の畢るものがあるのを思はねばならぬ。即ち果實のない木は無用と思はるゝのである。故に邪魔物として取扱はるゝ外はない。審判は斯くの如く實行なきイスラエルの上加へられんとしてゐると言ふのである。十一、我は汝らの悔改のために水にてバプテスマを施す。汝の悔改のためにと言ふ。即ち悔改むる生活の象徴たるに過ぎないことを自ら承認してゐる。此所は「水にて」と讀むので決して「水の中にて」の意味を有しない。然れど我より後に來るもの。ヨハネは自ら唯だ準備の前驅なるを認めてゐる。彼は如何にしてメツシヤが即時に現はるゝことを知つたか。彼の信仰と國民の状態からする推究とはどうしてもメツシヤが出現しなければならぬことを痛感して確信となつたものであらう。國民の墮落が甚だしければ、多少心あるものは必らず天來の何事かが起ることに想倒する。日本の大震火災前、少しく心あるものは必らず何事か起るものとして國民に警告した。ウエスレイは國民の墮落の甚だしきを見て、基督が新たに民心に降臨せらるべきを確信したとも言へる。而して彼は其の宣傳者として之を國民に布告した。基督は果して國民の心に降臨せられた。我は其の鞋をとる。ユダヤに於

ては日本の昔の人々と等しく、鞋を握るは最下等の奴隷の勤と信じた。聖靈と火。往々此所を以て耶穌の仰せられ、又パウロの言ふ聖靈と解し、火は純化する意味に取つた註釋が多い。然し此れはヨハネの説教であるのを思はねばならぬ。耶穌に由る啓示は彼の未だ知らない所である。ブルウス博士は他の註解を排して、此れはヨハネが、國民の審判近きにあり、基督に由つて神の審判の靈と火が彼等の上に浴せらるゝ、即ちバプテスマを授けらるゝものと信じた語であると主張せられ(エキス・グリ・テス)、又スレエタア教授も略同様に言ひ表はされてゐる。斯く解しなければ次の句との連絡が明瞭とならない。手には笑を待ち。日本の收獲時の光景其のまゝに描寫せられてゐるのが面白い。穀物の紐は其の仕末に困じて畔や田の片隅で燻りながら燃さるゝのがである。審判の状を示めすもの。

耶穌のバプテスマ

十ヨ愛にイエス、ヨハネにバプテスマを受けんとて、ガリラヤよりヨルダンに來り給ふ。十四ヨハネ之を止めんとて言ふ「われは汝にバプテスマを受くべき者なるに、反つて我に來り給ふか」十五イエス答へて言ひたまふ「今は許せ、われら斯く正しき事を、こゝこゝ爲遂ぐるは、當然なり」ヨハネ乃ち許

せり。十六イエス、バプテスマを受けて直ちに水より上り給ひしとき、視よ、天ひらけ、神の御靈の、鳩のごとく降りて己が上にきたるを見給ふ。十七また天より聲あり、曰く「これは我が愛しむ子、わが悦ぶ者なり」(マルコ一〇九一十一、ルカ三〇二十一、二十二、ヨハネ一〇三十二—三十四)

三十年、緘黙の生涯、爰に終を告げて耶穌は愈、公然、救主としての職分に就かんが爲め、ナザレより出て、ヨルダン河畔へと訪れ給ふた。古への豫言者の如く「神の靈、臨みて」其の出處を促したるに非ず、耶穌の衷心の感慨は前驅者の活動と共に甚だ深く、其の舞臺へと自ら出現せられた。

ヨハネは其の許に來れる一後進を導き、バプテスマを授けんが爲め、試問を行つて驚愕した。彼は自ら教ゆるの資格なく、指導する不遜の態度を耻ぢたか、俄かに謙讓に其の前に屈服した。彼が神に由つて先驅を命ぜられ、其の宣傳の職に當つたのは正に此の一人の爲めに外ならなかつたことを發見した。是れぞメツシヤに非ずして何人であらう。蓋しヨハネは歡喜と畏敬との念に胸は戦いたことであらう。

耶穌は自ら悔改すべき罪惡を意識せられなかつた。然しバプテスマは悔改の消極的意義ある

と同時に義人たるを象徴する。ヨハネの神を認め、人生を觀すること勿論耶穌を以て見れば其の半面を表明したものに過ぎなかつた。然し耶穌は尙ほ彼の認めた神と人生との半面を承認せられた。斯くて義人たる象徴のバプテスマを授けんことをヨハネに求められた。ヨハネは更に驚愕し、到底其の人に非ずとして固辭した。然し耶穌は之を許されず、重ねて要求せられた。ヨハネは神の側に立つて罪囚を叱咤した。然るに耶穌は同情と、慈愛とよりして神に對して、常に罪囚たる人間の側に立たる。遡りてバプテスマを受けらるゝも亦人間の數に自ら進んで加はらんがためであつた。

耶穌の願ひの如く、ヨハネはバプテスマを授けて、將に立たれんとするとき二つの休徴は天上から示めされた。神の臨み給ふや審判の焔は民衆の頭上加へらるべしと信じたヨハネの豫想は全く誤覺であつた。視よ、耶穌に降る聖靈は柔順と平和とを示めす鴿の姿があつた。ヨハネの聖靈の相像はヨハネの觀念から生れた誤謬であつた。我等は時に路傍にあつて世の罪惡を痛罵し、號泣して聖靈を叫ぶ一派の宗教者を見る。彼等がヨハネの域を脱し得たらんには幸福である。世の罪を負ひ、世のために生命を與ふる耶穌の就任の式に於て、其の上に降れる聖靈

が鴿の姿であつたことを記憶せねばならぬ。而して天上より授けられた聖語は、十字架の將に近かんとするとき變貌の山上に於て授けられたる聖語と同一であつたことに注意せねばならぬ。耶穌の就任は國王として萬世萬民を率ゆると共に、彼等のために罪の重荷を擔はるべき苦難の發端であつた。聖靈の降臨に由つて耶穌は愈、神の公認を経て、其の悩み多き世路に發足せられた。

十三、爰に耶穌、ヨハネにバプテスマを受けんとてガリラヤよりヨルダンに來り給ふ。耶穌はパリサイ、サドカイと異り、温かな友情を湛へてヨハネの許に訪ねて來られた。十四、ヨハネ之を止めんとして。それまでヨハネは其の敬虔淳潔な點に於て己より勝れりと思はるゝものを發見しなかつた。然るに今は其の正義の度に於て己よりも遙かに卓ぐれた人物が現はれて、言ふ所、説く所、到底及びもつかざるを認め、謙りて自らバプテスマを受けんことを願つたのである。ヨハネは未だメツシヤとしての耶穌の無罪にして特殊の人格なるを悉く發見してゐた譯ではあるまい。十五、今は許せ、われら斯く正しき事ごとく。註解者のうちには此の「正しき事」を「律法の要求する所」と言ふ意味に解するものがある。然し如何なる律法も耶穌がバプテスマを受けら

るゝ必要ありと爲すものはあるまい。耶穌の仰せられた正しき事と言ふ意味の内容をはヨハネは悟ることが出来なかつたであらう。然し耶穌の柔和にして謙讓に又權威あり、單純で奥深く、心服せねばならない御語に由つて、之に従つたものであらう。十六、直ちに水より上りしとき。舊い譯と新しい譯とでは「直ちに」の置き場が異つてゐるのを氣着かれやう。それは議論のある所である。耶穌は受洗中に告白する罪がなかつたからして手短かで即刻上られたと解する人もある。解釋は兎も角新しい譯が至當と認むる學者が多いのである。十七、觀よ、天開け……鴿の如く。此れは眼に見ゆる姿として聖靈の降臨が目撃せられたと古への師父たちは解してゐる。鴿の性狀から言つたのだと言ふ説と、其の舞ひ降るのに矢を射るやうな翔り方をすると言ふのだとも言ひ、柔かにふわりと降る様を言つたのだと解く人もある。十七、これは我が愛しむ子。バプテスマと天よりの承認は耶穌に取つても其の弟子に取つても必要であつた。此れは唯だ外形の目に見える休徴のみではなかつた。内的に靈性に與へられた聖靈の賜物であつた。後に變貌の場合と受難週とに二回天よりの聲が記されてゐる。彼此の場合を照合すると此場合の意味が明かな心地がせらるゝ。

第四章

基督を襲へる誘惑

一 爰にイエス御靈によりて荒野に導かれ給ふ、惡魔に試みられんことを爲るなり。二 四十日、四十夜、斷食して、後に飢ゑたまふ。三 試むる者きたりて言ふ「なんぢ若し神の子ならば、命じて此等の石をパンと爲らしめよ」四 答へて言ひ給ふ「人の生くるはパンのみに由るにあらず、神の口より出づる凡ての言に由る」と録されたり。五、ここに惡魔イエスを聖なる都につれゆき、宮の頂上に立たせて言ふ。六「なんぢ若し神の子ならば己が身を下に投げよ。それは「なんぢの爲に御使たちに命じ給はん。彼ら手にて汝を支へ、その足を石にうち當つること勿らしめん」と録されたるなり」七 イエス言ひたまふ「主なる汝の神を試むべからず」と、また録されたり。八 惡魔またイエスを最高き山につれゆき、世のもろもろの國と、その榮華を示して言ふ、九「なんぢ若し平伏して我を拜せば、此等を皆なんぢに與へん」十 爰にイエス言ひ給ふ「サタンよ、退け」主なる汝の神を拜し、ただ之にのみ事へ奉るべし」と録されたるなり。十一、ここに惡魔は離れ去り、觀よ、御使たち來り事へぬ。○(マルコ一〇十二、十三、ルカ四〇一―十三)

神に由つて其の職分を承認せられ、職分に相應しき賜物を受けらるゝや、耶穌は基督としての公生涯に入らるゝに先立ち荒野に退いて神との交通に暫くは寢食を遺忘せらるゝに至つた。勿論耶穌は生老病死の疑題を案じ、解脱の道を究めらるゝ必要は無かつた。耶穌は迷妄を排して涅槃を求めらるゝ必要はなかつた。耶穌は人世より、憂悶、苦悶して神に溯らるゝ必要は無かつた。神と耶穌とは其の名の示めすが如く始めより常に偕に在し給ふた。耶穌には其の偕に在し給ふ神の聖旨は、罪に滅び行く人の世に如何に傳へ、如何に示めさんが冥想、熱禱の主題であつたであらうか。兎も角、靈性は高調して四十日四十夜の長き全く肉體の要求を遺忘して荒野に座せられた。疑題漸くに解けて、靈性の緊張平生に復すると共に始めて肉體の困憊を意識して來られた。

機を見るに鋭い悪魔は速刻に耶穌の耳に囁いた。萬世萬邦の民を永劫彼の驅役に服せしめんとするは彼の志する別である。而して此の救主だに彼が藥籠のものたらしめば永切地上は彼の領域である。救主捷ち給ふか、彼救主を欺き得るか、誠や萬世萬邦の民の運命は此の一舉にして定まるのである。彼が秘術を盡すも道理と言はねばならぬ。

玲瓏珠よりも輝く耶穌の靈性に彼は果してどん奇計を廻らして、暗影を投ぜんとするのであらうか。

耶穌に對する神の公認の御語は今更鮮かに其の御胸に刻銘せらるゝ所である。洗者ヨハネの信仰を以てしてすら神は石をもアブラハムの子たらしむる全能を有し給ふと宣言してゐる。神の聖業に従ひ、其の靈的赫突たる使命を完うせんとせらるゝ基督にして一片のパンのために、貴き身を苦しめらるゝは合理的境地と言へやうか。耶穌の裡には神の全能力に對する信頼の念は四十日四十夜の熱禱に由つて勃々漲つてゐるではないか。民衆の艱苦を癒し得べき自信は牢として胸臆に宿つてゐるではないか。悪魔は老獪にも此所に眼を留めた。「汝若し神の子ならば」然り一身の苦をすら救ひ得ざるもの、いかでか民衆の痛を擔ひ得やう。「此等の石をパンと爲らしめよ」。萬民のためにする我が生命を傷ふは、やがて其の聖業を贖うする所以である。一身を支ふるは萬民を懷ふ誠に過ぎない。然かもそれは今の基督の身を以てすれば、唯だ一言を命じ給ふ勞に過ぎないのである。悪魔は誠に好個の主題を選んだ。然るに耶穌は嚴然として答へ給ふた。「人の生くるはパンのみに由るに非ず、神の言に由る」と。聖旨に由りて生き、聖旨に由り

て死なんと覺悟せられた耶穌にして、又人の子として生きんとせらるゝ耶穌にして、自己のため、神の子の權能を利用して、其の悩みより免れんとせらるゝは無意義である。「人を救ひて己を救ひ能はず、十字架上に死」なるゝこそ其の使命、眞の基督たる生命を得らるゝ所以である。荒野に於てパンの缺乏よりモウゼに咥けるイスラエルの不信の徒の俤は忽然耶穌の胸に描き出てられたか平生深く親まるゝ聖書の申八〇三の聖句を以て其の誘惑者に應戦せられた。悪魔は脆くも敗亡した。

聖句を以て護衛とせらるゝ耶穌には、聖句を以て向はねばならぬ。老獪な悪魔は更に第二の誘惑を試みた。耶穌の神に信賴せらるゝ所こそ彼の覘ひ所である。彼は耶穌の眼前に全イスラエルの集合せる神殿の光景を先づ描いた。彼等は耶穌が其の身を獻げて啓導せんとせらるゝ民衆である。民衆の信賴の念は耶穌の正に收攬せんと欲せらるゝ目標である。嗚呼後年悪魔は幾次びか懲すまにユダヤ人の姿を藉りて此の誘惑を試みたことであらうか。若し耶穌にして神の子ならば、其の信賴の念を以て行はるゝ所神は必らずや其の能力を藉して、民衆の驚嘆する異象を耶穌に由つて示めさるゝことなしと言へやうか。神を信賴し民衆環視の中に於て、神殿

脚下の斷崖に身を投ぜよ、神の子ならば神必らず之を中途に支へて事なきを得しめ給はん、此れ聖書を通じて神の子に對する神の保證せらるゝ所なるが故であるとは誘惑者の私語であつた。「神は祈禱を聴き給ふ。故に祈禱に由つて民衆の面前に病者の平癒を實見せしめよ。」今日の基督者の間にも誘惑者は尙ほ此の奸策を弄しつゝあるではないか。耶穌は即刻同じく申六〇十六の句を以て之に應戦せられた。「主なる汝の神は試む可らず」と。耶穌は絶對に神に服せらるゝが故に神の子である。神を己の目的に従つて驅使するがために神の子ではない。此の應答に由つて悪魔は再び失敗した。

彼は更に耶穌の心の他の門戸を求めてそこから忍び入らうと試みた。國民は今やイスラエルの王者として出現せらるべき國王を待望してゐる。其の目的だに公明ならば手段に於て些細の瑕瑾を意に介するに足らうか。一次び國王の位に座し、民に向ふには神意と善政とを以てすれば其の命に由つて遂に神の國に相應するものとならう。愚民を率ゆるに至高の道を以てしても無益である。若かず彼等を先づ服せしめて後、其の道を行はしめんには、悪者は既に惡の動機に由り、自己のために民衆を其の勢力の下に集むべくば、善者は尙ほ善の動機に由つて、彼等

自身の幸福のために善の勢力下に伴ふことが不都合であらうか。悪魔はの耶穌脚下に萬邦の榮華の狀を映し出した。耶穌にして若し世の君主の手段をだに擇ばるゝならば、萬邦は忽ちに其の手に歸すべきである。渺たるマケドニアに起れる好戦の一青年にして尙ほ萬邦を嚮伏せしめたではないか。神の聖旨を身に負ふ耶穌若し起ち給ふべくば、天下に之に双向ふものがあらうか。今や悪魔は其の假面をかなぐり棄て、彼の手段を以て耶穌に突撃した。耶穌は決然「サタンよ、退け」と叱咤し重ねて神の聖旨を以て之を防衛せられた。即ち申六〇十三の句を引照せられた。斯くて耶穌が基督たるべき試練は終つた。爾來、其の艱難不遇に處せらるゝ毎にサタンは手を代へ品を替へて同様の誘惑を試みたけれども曾つて成功せず、耶穌は基督たるの職分を、聖旨に従つて名残なく盡された。

誘惑者去つて、暗雲退き、耶穌は聖天使に擁護せられ給ふこととはなつた。

一、爰に耶穌御靈に由りて荒野に導かれ給ふ。ヨルダン河畔に於て其の靈の高調せられた耶穌は聖靈の囁くまゝに人間の曾つて住まない野獸の横行する荒野に唯だ一人冥想に耽らるゝ必要を感じられた。場所はエルサレムとヨルダン間の「カラシタニヤ」であつたとも言ふ。惡魔に試み

られんとするなり。惡魔とは如何なるものか。此所で委しく論ずる暇はない。然し靈的經驗を重ねた人々は誰でも自己以外の惡の勢力があつて、それに引かるゝを覺知するであらう。神の靈は、人の苦悶の時以上に親しく接せらるゝことがないとブルウス博士は言ふ。惡魔は其の靈性の高調したときのみならず、沮喪消沈したときにも襲ふのである。ギリシヤ語で言ふとデキアポロス、へブル語のサタンである。虚偽、中傷、誣告の行爲を試むるものと或る註解者は言ふ。

二、四十日四十夜斷食して後飢を給ふ。精神上の高調のために一時寢食を忘れ給ふた意味で、禁慾からの斷食ではなかつたと思はるゝ。勿論斯くの如き場所に食物のあらう道理はないが、然し耶穌は始めからそれを要求せられなかつた。欲するものを故更堪へられた譯ではない。此所に使れてゐる動詞から飢給ふ前に斷食が行はれたと言ふ意味を示す。日本語に「後に」と譯されてゐるのが至當である。精神の高調が平穩に歸るや問題の要求を感じられた。三、試むる者來りて言ふ。此の語氣からすると勿論サタンが形體を取つて現はれたやうに記者は考へてゐたものと見える。此れに就いては色々の議論がある。然し靈的存在者として耶穌に近づいたものとは考へても差支へはない。新約全書では一般に惡魔を以て眼に見えざる存在者としてゐる。兎も

角も耶穌は「凡ての事、我らと等しく試みられ給へり」(四〇十六)。我らの受くる誘惑と異つたものと思へない。然し靈的に深刻な耶穌には其の誘惑も我々より深刻に現實に考へられたこととは言ふまでもない。汝若し神の子ならば。其の子が餓死しても好いと神は思召すであらうか。簡単な奇蹟に由つて神との關係如何を證明が出来るではないか。神の子たるの關係あらばヨハネが言ふ如く石をも神の子たらしむる權能が宿つてゐるべき筈である。況んや石を同じく活物ならざるパンたらしむるは易々たることであらう。然し耶穌は利己的な目的のために其の神の子たる權能を使用せられなかつた。人の天稟の才能も亦之と同様利己の目的に使用すべきものではあるまい。四、人の生くるパンのみに由るにあらず……。申八の三の句たる前に述べた通り。耶穌は人間は全く神に信賴して生活すべきものにして、神は其の要求のままに如何にかして與へらるゝものであると仰せらるる。荒野に於けるイスラエル民族はパンの外に何物も大切な事は存在しないほどに狼狽し、如何なる手段に訴へるでも之を得やうと糞しめいた。耶穌は神の御意と其の律法とは生命よりも重んずべく、肉體の満足を企つるより大切なるを示めされた。

五、耶穌を聖なる都につれ行き、マタイはエルサレムの事を斯く言ふ。ルカには此れが第三の誘惑

となつてゐる。マイヤアはマタイ傳の方が正しい順序であると註釋してゐる。宮の頂上に。此れは高塔がケドロンケドロンの斷崖に蔽ひ被つてゐる神殿の翼。六、汝のために御使たち……。詩九十一〇十一、十二の句。十、主なる汝の神は試むべからず。耶穌は自己の榮光を示めさんがために其の能力を試みらるゝのではない。自己を犠牲として神の榮光を顯はさんが爲めに人の子として勞作せらるゝに在る。同じく申六〇十六の句。八、最高き山。パレスチナに此んな山はない。否な世界の何處にもこんな山はない。唯だ惡魔が高所から俯瞰するが如くに萬國の榮華の光景を耶穌の心に映し出したのである。凡俗がどうして耶穌の如き人物を發見し得る道理があらうか。熱烈な宗教者と雖も至當に理解し得ることは不可能である。大工の子として、此の世に出られた耶穌には民衆の要求にも耳を傾けられなければ、到底救主としての事業に成功は出来ない。光榮と社會上の權勢とが是非必要である。斯う惡魔は囁いた。ユダヤ人は惡魔を以て「此の世の支配者」と思つてゐた(ヨ十四〇三十、十六〇十一、コリ前四〇四、エヘ六〇十二參照)。十、サタンよ退け。今、惡魔は正體を示した。耶穌は明かに指命して叱咤せられた。後年ペテロに對する此の語があるのを參照すれば意義が明かとなるであらう(十六〇二十三註解參照)。此の耶穌の答は同じく

申六〇十三の句である。十一、悪魔去り、御使たち来り。ルカは悪魔が一時去つたやうに言つてゐる。御使たちが来て事へたと言ふのは其の後長く御側に従つた意味の語である。

ガリラヤ値道の開始 十二—十七

十二イエス、ヨハネの囚はれし事をききて、ガリラヤに退き、十三後ナザレを去りて、セアロンとナフタリとの境なる海邊のカペナウムに到りて住み給ふ。十四これは豫言者イザヤによりて云はれたる言の成就せん爲なり。曰く、十五『セアロンの地ナフタリの地、海の邊、ヨルダンの彼方、異邦人のガリラヤ、十六暗に坐する民は、大なる光を見、死の地と死の蔭に坐する者に、光のほれり』○十七この時よりイエス教を宣へはじめて言ひ給ふ『なんぢら悔改めよ、天國は近づきたり』十八斯て、ガリラヤの海邊をあゆみて、二人の兄弟ペテロといふシモンとその兄弟アンデレとが、海に網打ちなるを見給ふ、かれらは漁人なり。十九これに言ひたまふ『我に従ひきたれ、然らば汝ら人を漁る者となさん』二十かれら直ちに網をすてて従ふ。二一更に進みゆきて、又ふたりの兄弟、セバダイの子ヤコブとその兄弟ヨハネとが、父セバダイとともに舟にありて網を織ひなるを見て呼び給へば、二二直ちに舟と父とを置きて従ふ。○二三イエス徧くガリラヤを巡り、會堂にて教をなし、御國の福音を宣べつ

たへ、民の中のもろもろの病、もろもろの疾患をいやし給ふ。二四その噂あまれくシリヤに廣まり、人すべての懺めるもの、即ちさまざまの病と苦痛とに罹れるもの、悪鬼に憑かれたるもの痛癩および中風の者などを連れ來りたれば、イエス之を醫したまふ。二五ガリラヤ、デカポリス、エルサレム、ユダヤ及びヨルダンの彼方より大なる群衆きたり従へり。(マルコ一〇十四、十二、ルカ四〇十四、十五、マルコ一〇十六—二十マルコ一〇十三、ルカ四〇三十一以下)

マタイ記者は慣用の『爰に』の一語を使用せずして、次の物語に移る。此所には若干の時日ありしことはヨハネ記者の記事で明かである。

今や天國の君主は愈公然其の姿を民衆の前に現はし來られた。古へから約束せられたイスラエルの救援者は豫言の個所に其の根據を据へられんとする。ガリラヤより低地ガリラヤ、更に遙に北方に及び王化の薰風は暗を一掃して民衆は光明の彼方へ伴はれんとしてゐる。然かもそれは豫言者が到底夢みるべくもなかつた永遠にして堅實なる王國は建設せられんとするのである。干戈を以て異邦の壓迫より救ふが如きは淺薄にして一時的の事業に過ぎない。人類の運命を閉させる暗雲は此の世の光明を以ては掃蕩さるべくもない。人類を死の蔭より救ふは更に更

に高く力ある光明でなければならぬ。死をも征御する光明でなければならぬ。豫言は遺憾なく周到な意義に於て應ぜられた。

戦端を開くには先づ地理を窮めねばならぬ。敵の咽喉を扼して其の背を撃つ謀が大切である。耶穌はユダヤ全土、更に全世界を制服するに當り、先づ當時の世界交通の衝に當れるガリラヤ湖畔のカペナウンに根據を据へられた。

天國の君主は此所に其の即位の宣言を發表し、先づ廷臣を召集し、其の帯ばるゝ權能を行使し、民衆の歡呼に迎へられんとするのである。然し其の宣言は暴力を以て全世界を並吞せんとする野心の公表ではなかつた。彼の火を吐く豫言者は剛直な侃憍の語に累せられ、自省の念薄く父の殘虐を遺傳せる暴君の爲めに死海の東、マケラスの牢獄に繋がれて其の活躍は中斷せられた。耶穌自ら己が事業の豫告に當られねばならなかつた。天國の築かるゝに當つて先づ準備すべきものは道德的覺醒でなければならぬ。道德的旨目なものに取つては耶穌の謙遜にして卑きに着かるゝ姿を認識することを得ぬ。故に先づ自己の罪惡を知覺して、救の必要を熱望するに至るこそ天國の君王を迎ふる唯一の條件でなければならぬ。

次に君王の行はるべき事業は、生涯、易ははらざる忠誠を獻げて、君主と其の領土とに奉ずべき從臣の糾合であつた。耶穌の君主として其の根據の指定には誤りがなかつた。此の地よりして先づ四人の隨從者が召出された。然かも其の三人までは弟子中に於ても最も深く忠順の誠を盡し、遂に歴史上長く所謂内環圈内の人物として基督教會に傳へらるゝに至つた。其の他の十二使徒多くは此の市又は此の地方の出身者であつた。彼等が耶穌に接するの日向ほ淺くして尙ほ家を棄て、財を擲ち、喜んで耶穌に從隨するに至つたのに鑑みても、其の眼識の凡庸に非ず、志操亦時人に聳つ甚だ高きを察するに難くないのである。

耶穌が其の弟子として二人宛、二組の兄弟を召されたのにも意味がなければならぬ。天國の基礎は斯くて友誼、佛愛の情を以て互に結ぶに足る自然の兄弟の上に据えられた。殊に情緒細やかなヨハネが成功にも失敗にも兄弟相提携して行動してゐるのを見て、彼が兄弟相愛の主張を終生説いて止まなかつた體驗の基礎が窺はるゝ心地がする。

宣言と同時に人間、生老病死の慘劇に對する同情は湧然として此の萬世萬邦を統べんとする王者の胸を撃つた。耶穌は其の慈心の動くがまゝに彼等の病患を癒された。然し既に第二の誘

惑に於てサタンを撃退せられたる耶穌は神癒を以て聖靈の臨在を證明せんとする弟子が後年生じ得べき餘地なきまで明日に彼等の歡呼を無視せられた。耶穌は其の奇蹟を振り返つて神の事業なりや否やを判断せよとは民衆に訴へられた。然し彼等の信頼を繋がんがために曾つて奇蹟を行はれたことはなかつた。耶穌の王國は驚異と單なる憤懣とに由つて服従するもの集合體ではなかつた。悔悟、改悛したる良心が、十字架に吸入せられ、同化せられて以て築かるゝ王國であつた。然し一波、萬波を傳へ、郷民の驚愕と感激とは燎原の火の如くガリラヤ全地、北の境外、南は首都より之を包む四隣に及び、ヨルダン灌域の諸邑も亦傳へて、歡呼しつゝカペナウンに民衆は雲集し來つた。耶穌は其の聖業に心急きつゝも尙ほ彼等を放擲するを得ず、一々之を癒やされた。

十二、耶穌ヨハネの因はれしことを聞き。ヨハネの入獄に就いては十四〇に委しく述べられてゐる。誘惑の後どれほどの間隔があつたか此所には見えてゐない。他の福音書には此の間に色々なことが行はれたやうに記してゐる。然し何れの福音書にも耶穌が一度、ナザレに赴き給ふたことを記してゐる。兎も角誘惑後にはガリラヤに移られた。十三、カペナウム。此のときカペ

ウンに定住せられたとは他の福音書は記さない。然しカペナウンが耶穌の傳道の中心地であつたことは何れも一致する所である。當時カペナウンは旅行の驛路として又商業地として有名で繁華な都市であつたものと思はるゝ。ゼブルンとナフタリの境、即ちガリラヤ湖の西北岸にあつたのである。此れほど有名な土地が今は少しも其の跡を遺さないで不明である。唯だ現今テル・フムと稱する地にある會堂の遺蹟が此の市の會堂の地位だと言ふ。又カアン・ミニエをそれだと主張する人もある。十四、これ預言者イザヤ。即ちイザヤ書八〇十一―九〇六よりの引照。ヴァイスは此れを以て「其の救を異邦人に及ぼさしめんが爲めにカペナウムに定住せられた」と言つてゐる。前にも述べたやうに此の市は魚族の夥しき湖の岸に位し、自ら繁華な市街を有すると同時に近方に都市多く内地の公道に通ずる世界の中心驛に當つてゐた。ガリラヤはゼブルン、ナフタリの兩家系の住地で國境に近く、自然異邦人の血を交へた地方である。ヨルダンの彼方なる一項目も前に在る通り加へてある。それはベリヤ地方の意味で耶穌の最後の傳道は主として此の地方に行はれてゐる。此の豫言の句はギリシヤ譯よりもヘブル原書から引いた語調が見えてゐると言ふ。十七、汝ら悔改めよ。天國は近きたり。丁度バプテスマのヨハネが傳へたと

同様な説教である。然し語は同様でも其の意義に於て大いなる相違がある。既にバプテスマに於てヨハネのは唯だ過失を改むる意味に過ぎないが、耶穌のには「舊きものが全く新たらしくなる」意味があつて、内部から来る一大變化を言ふ。此の福音記者は此れが耶穌の傳道の一歩始めであると信じ、之に先立つ活動は少しも知らなかつたとブルウス博士は認めらるゝ（エキス・グリ・テス）。マルコも亦同様な順序を取つてゐる。

十八、二人の兄弟ペテロとアンデレ……かれらは漁夫なり。ガリラヤ湖とはガリラヤ州にあるから名稱である。ルカは北部の地名に因んで「ゲネザレの湖」とも言つたこともある。今は魚類は更に捷まず、舟も滅多に見えないと言ふ。然し耶穌の當時には多くの漁夫がゐた。シモンとアンデレは兄弟で共に漁夫であつた。十九、我に従ひ來れ、然らば汝ら人を漁る者となさん。此の最初の弟子はヨハネ三十五にあるやうに一度は既に耶穌に召されてゐたと見える。我に従ひ來れとは十一〇二十八にある勞れたるもの重荷を負へるものに對する召命と同じ語が用ゐられ、命令で之に背くことは出来ないけれども、然し其の強要が深切と慈愛から來てゐる。耶穌に従ふは此の世から免らるゝ道でなければならぬ。十三〇四十七―五十に譬として語られてゐる通り、

彼等の職業から職分を譬へて「人の漁師たらしめん」と仰せられた。二十、彼等直ちに網を棄て、從ふ。其の召命に彼等は即刻従つた。誠に驚くべきことで、前に耶穌を知つてゐたものと解するのが自然のやうである。然し設令へ始めてであつても、志を有するものに取つては耶穌の風采、溫容、人格は召さるゝがまゝ従はざるを得ざるものを認められたであらう。カペナウンの會堂に耶穌が始めて現はれ給ふたとき聴衆は此の感を抱いたとある（マルコ一〇十七）。二十一、又二人の兄弟、ゼベダイの子ヤコブと、其の兄弟ヨハネ……。前の二人と同じくゼベダイの子二人も亦召さるゝや否や之に従つた。後の二人は其の父と傭人（マルコ一〇二十）とを残して従つたとあるので此れは有福な身分であつたに相違はない。以上四名は其の後生涯を全く耶穌に獻げて隨従することとなつた。而して十二使徒中の重要な人物となつた。

二十三、耶穌徧くガリラヤを巡り云々。耶穌の活動に三つの方面があつた。教を爲し、福音を説き病を癒すことで、耶穌は傳道者で、主で又病の癒治者であつた。會堂とあるのは主として安息日に人々の集合する場所であつた。もろもろの病、もろもろの疾患。病には熱病、癩病、盲目等と言ひ、疾患とは衰弱から來る症狀のものを指したものであらう。二十四、苦痛に罹るもの。此は原

語は「拷問の石」の意味で罪惡から生ずる苦痛を指す。然し此所では狂氣、癲癩、中風等の意味。
 二十五、ガリラヤ、デカポリス、エルサレム、ユダヤ云々。即ちパレスチナに包有する東西南北あらゆる地方と言ふ意味で、ガリラヤ、ユダヤ、ベリアを始め、異邦人の居住地たるデカポリスと稱するガリラヤ湖の東北岸にある十個所の市邑の住民も群り來つたと言ふのである。耶蘇の名聲は須叟の間に斯く四方に揚がつた。

自第五章

至第七章

山上の垂訓

此所に不意に神の國の君主は驚くべく偉大なる施政方針を供提せらるゝ。事件は唐突に勃發せるかの如くに感ぜらるゝのである。バプテスマのヨハネ、カペナウンの會堂の聽衆、四人の漁夫等何れも耶蘇の智慧と権力と人格に深く魅せられたるは我等の既に觀察し來つた所であるけれども、然かも未だ曾つて斯くの如き説教を行はれたるを認めない。聊かの準備なくして不

意に斯くの如き大説教を試みられたるを我等は驚くものである、従つて此の時まで既に種々の機會に於て此所に掲げらるゝ教訓の幾分は授けられてゐたものと想像するのが自然であらう。
 耶蘇は小丘へと登られ、今や一大群團となれる弟子たちは其の周圍に集り來つた。各節に表現せらるゝ耶蘇自身の地位は、眞理の傳道者に非らずして、倫言を授けらるゝ立法者即ち君王の態度である。而してパリサイ宗徒の傳へ來れる如き註解に非らずして、其の公生涯に入らるる前、既に胸中深く培ひ來られたる君主としての命令を發表せらるゝのであつた。

第五章

幸福なる生涯 一一一二

一 イエス群衆を見て、山にのぼり、坐し給へば、弟子たち御許にきたる。ニ イエス口をひらき、教へて言ひたまふ、三 『幸福なるかな、心の貧しき者。天國はその人のものなり。四 幸福なるかな、悲しむ者。その人は慰められん。五 幸福なるかな、柔和なる者。その人は地を嗣がらん。六 幸福なるかな、義に飢え渴ぐ者。その人は飽くこゝをを得ん。七 幸福なるかな、憐憫ある者。その人は憐憫を得ん。八 幸

福なるかな、心の清き者、その人は神を見ん。九幸福なるかな、平和ならしむる者。その人は神の子と稱へられん。十幸福なるかな、義のために責められたる者。天國はその人のものなり。十一我がために人、なんぢらを罵り、また責め、詐りて各様の悪しきことを言ふときは、汝ら幸福なり。十二喜び喜べ、天にて汝らの報は大なり。汝等より前にありし豫言者等をも、斯く責めたりき。○マルコは之を傳へず、ルカは四〇二十一―四十九に此の一部を傳ふるのみ。

今や國王は、其の國に屬する臣下の資質は如何なるものなるかを示さんとせらるゝ。而して其の生活には必らず幸福の伴ふべきを約束せらるゝ。然かも其の幸福は此の世に屬するもの志す所とは全く相反する方に求めらるゝのである。此れに由つて君主は其の膝下に集へる群衆の虚しき榮に豫がるゝ空想を破却し盡して萬一を期して僥倖に預らんとするものを汰せらるゝのである。世の榮華と優越慾とに驅られて熱するものの頭に氷の如き冷水は浴せらるゝのである。斯くして眞に神の故に神の國を求むる忠誠の臣下のみ獨止り得るのである。

一、耶穌群衆を見て山に登り、坐し給へば弟子たち御許に来る。山下に群衆多くして喧騒なりし爲めか、或は群衆よりも志を寄する弟子にのみ語るゝ爲めに山に登られた。此所に山とあれど

も、小丘き所に過ぎないであらう。上野の山、愛宕の山(東京)、吉田山(京都)、天保山(大阪)は山ではないのと同様である。是等は嚴密に言へば丘に過ぎない。此れぞ新約のシナイ山であつた。ユダヤの習慣では説教する場合には腰を卸した。二、耶穌を口を開き教へて。重要な教訓を與へんとする嚴肅なる態度の場合には斯く描く。三、幸福なるかな。幸福とは此の世の悲惨な状態と全く異なる境界を指す。ヨ十三〇十七に「汝等此等の事を知つて之を行はゞ幸福なり」とあり。此の世の罪惡と悲愁の壓迫を自ら負はるゝ贖主なる神より來る幸福を言ふ。心の貧しきは心の傲慢なるに反する意味。ルカに由れば社會的地位卑くして物質に乏しきものを指すやう傳へたり。蓋し地位の卑きものは自然其の精神も亦卑くして傲慢ならざるを普通とす。耶穌は此れをも含められたるものならん。智慧に於ても亦然り。天國は其の人のもの。現在に非ず。來世の幸福、朽つべきものに由る幸福に非ず、靈性に受くる幸福を示す。富有にして成功したるものよりも、卑賤にして不幸なるもの却つて救主の祝福を喜び迎ふるのである。其の罪多く、希望なきを自ら感ずるものにして始めて神の賜たる天國の義を求むる志を起す。四、幸福なるかな、悲しむ者。自己の罪惡に滿つるものなるを悲痛とする事を第一の主旨とせらる。然し普通の

痛苦、艱難に在る者も亦含まる。罪を悲しむものにして始めて救の歡喜を耶穌に於て發見すべく、痛苦、艱難に閉さるゝものにして始めて耶穌の慈愛に頼らんとする志を起すに足るであらう。五、柔和なる者、其の人は地を嗣がん。野心と闘志に驅られたるナポレオンは世界に脅畏を與へてフランス皇帝たりしも槿花一擲の榮、セント・ヘレナの露と消ゆ。古今の強國皆然り。英雄皆然り。ハンニバルの末路や如何に。ウキルヘルム二世の末路や如何。是れに反して迫害せられたる清教徒の後裔が其の祖先の心を失はざる間の繁榮は如何。若し祖先の志を永く嗣ぐを得ば幸福は失はれないであらう。六、義に饑え渴く者。義に饑え渴く者は自ら柔和なるを得ん。義の故に飢渴に陥る者も此の内に含まるゝと説く註解者もある。飲食に熱中する如く義を求めて始めてパウロの如く耶穌の愛に飽滿することを得る。七、憐憫ある者、その人は憐憫を得ん。頑迷殘虐な人物は如何に慈愛の世界に置かるゝとも、是れを吸收する心の能力がない。赤色に對す色盲には自然界に赤の彩り美はしきを見ることが出来ない。此の宇宙の間に存する愛の最高法則に準じて行動しないものには救を有する最高の義を全ふすることは出来ぬ。十八章の無慈悲の僕の例及び主の祈の第五項参照。八、心の清き者、その人は神を見ん。日本の神殿佛閣には必らず手

水盤ありて、口中手指を洗つて神佛を拜することとなつてゐる。ユダヤ人も亦事毎に身を洗つた。然かも斯くの如き形式的洗滌は宗教には縁遠い。思想、動機、希望の本源たる心の純潔こそ最も貴い。基督の神は斯くして始めて人間の意識に鮮明に映じて來るのである。基督の教育に由つて人間の心が漸次純潔となつて始めて神は一步一步に明瞭となり來る。八、平和ならしむる者、その人は神の子と稱へられん。自ら心の純潔にして神に接し、平和を有するのみならず又單に平和を愛するのみならず、疎隔し分離し闘争する此の世界にあつて其の平和の促進に活躍する英雄的行動あるものを言ふ。耶穌は其の爲めに此の世に降られた。斯くの如きものにして始めて天に在ます父の完きが如く完きを得るのである。愛の行動が如何に神の子らと稱へらるやう我等を召し給へる父の御旨に應うかを思へ。十、義のために責められたる者、天國はその人のものなり。此の語は古來義のために苦められたる人々を指す。日本譯も改譯は過去に作れるを見るべし。義のために苦めるものならずは責められたる者と言ふ條件には當辨らない。然し同様な品性を具備して此れに與かり得る資格ある人物は經驗なくとも此所に言ふ意味に當るであらう。十一、我が爲めに人汝らを罵り、また責め、詐りて各様の惡きことを言ふ云々。異教者、宗教に由

つて眞理を追ひ求むるに熱心ならず、單に商買のために宗教を傳ふ人々は必らず、耶穌に従ふものを罵詈雑言し、讒謗するに相違なし。パリサイ人の悪口は耶穌の活躍と同時に速刻生じた。然し虚偽の悪名には驚き惑ふ必要がない。眞の正義は虚偽の正義と相容れざるは當然である。

十二、喜び喜べ天に於て汝らの報は大なり。此所に使用せらるる「喜び」は「歡喜極まる」の意味である。富士の頂點に登れるものは、其の雄大・廣濶・清純の氣に撃たれ、語を以て言ふべからざる快感を味ふ。道徳的努力を以て其の高きに登るものは低地にあつて味はうべからざる歡喜に溢る。更に初代の基督者が迫害に當り天を望んで歡喜したるを見る。日本の迫害史、「日本西教史」に由つて見ても明かである。汝等より前に生りし預言者をも斯く責めたりき。耶穌の弟子は豫言者たる資格を有す。耶穌自身の死は更に此れに千鈞の重を加ふ。其の昔の豫言者と同列、同行に立ち、又耶穌其の人と同様の境地に立つ所以である。天の報の大いなるは當然であらう。

弟子たるの責務 十三—十六

十三 汝らは地の鹽なり、鹽もし効力を失はば、何をもてか之に鹽すべき。後は用なし、外にすてられ

て人に踏まれるのみ。十四 汝らは世の光なり。山の上にある町は隠るることなし。十五 また人は燈火をともして升の下におかず、燈臺の上におく。斯て燈下は家にある凡ての物を照すなり。十六 斯のごとく汝らの光を人の前にかがやかせ。これ人の汝らが善き行爲を見て、天にいます汝らの父を崇めん爲なり。

神の國の使臣たるものは此の世に至つて、雄大なる責任を負ふ。人を漁る者として召されたるものに重要な義務なき道理はない。耶穌既に基督として世に望まるゝは大陽の東に昇りたる如く四方の地に其の光は普く、其の光を承けたる辰星も亦世界を照さねばならぬ。地の鹽たり、世の光たる其の責務は世界の死活に關係を有する。而して世に隠れたる宗教の教師とは基督の目的が如何に隔絶したるものなるかを示めすに足るのである。

十三、汝らは地の鹽なり。鹽には四つの特性あり、純潔なる事、腐敗を防ぐこと、食物の調味料たる事、及び農業には根本的肥料として有要なる事、是れであるとする多くの註解者は言ふ。鹽若し効力を失はゞ云々。食物の味は失はれ、其の純潔は失はれ、腐敗を防ぐに足らず、肥料としては有害にして、無用なるのみならず有害となる。故に棄つべき所さへなく、路上に撒布して

踏み固むる外なし。十四、汝らは世の光なり。ヨハ〇十二には耶穌は自ら「我は世の光なり」と仰せらるゝ。又ピリピ二〇十五には「汝らは……世の光の如く此の時代に輝く」とあり。基督者の存在は萬人の仰いで以て其の方向を定むる指針たり、規矩たるべきである。山の上に在る町は隠るゝ事なし。エリコの如き、ベツヘムの如き小丘の上に在り、エルサレム亦然り。四方より其の町を望見するを得た。謙遜に、柔和に、純潔なるもの及び慈愛あるものの存在は世界の罪惡と其の弱點とを反證するに足り、自ら赫突として輝かざるを得ない。十五、升の下、ユダヤにて各戸に備へたる計量器。光を要せざる深夜は燈を升にて蔽ふた。燈臺。ユダヤにては卓子の上は置かず、燈は高き臺、我が國の昔の燭臺、或は短檠の如きものの上に置く。家に在る鑿て器ものを、ユダヤ中の總てのもの意。十六、汝らの光を人の前に輝せ。世を憚り、人を怖れて眞理を包むなどの意。怯懦な信者は種々の口實の下に人の前に眞理を以て行動するを懼るゝ。然し如何に當然らしき口實ありとも其の動機は畢竟、不快の結果を招くを忌むにあるのみ。耶穌は之を以て神に對する不忠とせらるゝ。天にいます汝らの父を崇むべし。弟子の堂々たる善行より發する光明は天の父の榮光となる。其の光明を包むものは榮光を消沈せしむるのである。大底の人

人は誘惑に陥り、天の父の榮光を輝すは自己の不譽名を招くと思ふ傾あり。然らず、天の父の榮光の輝く所、必らず自己の譽ともなる。

耶穌自身の地位 十七—二十

十七、われ律法また預言者を毀つために來れりと思ふな。毀たんとて來らず、反つて成就せん爲なり。
 十八、誠に汝らに告ぐ、天地の過ぎ往かぬうちに、律法の一、一畫も廢るゝことなく、悉く全うせらるべし。十九、この故にもし此等のいさ小き誠命の一つをつぶり、且その如く人に教ふる者は、天國にて最小き者と稱へられ、之を行ひ、かつ人に教ふる者は、天國にて大なる者と稱へられん。二十、我らに告ぐ、汝らの職、學者・パリサイ人に勝らずば、天國に入るゝこと能はず。

神の國の君主の降臨は、古へより神の攝理に由つて地上に現はれた世々の豫言者の事業を破壊せんがためではなかつた。即ち古來其の理想とし、其の目標とせられたる神の國を君主自ら建設し、完成せんが爲であつた。「我來れり」との宣言は、古來の豫言者たちに由つて準備、期待せられたる神の國と其の律法との完成の爲に臨まれたる意味である。今や律法は單なる描ける文字に非ずして、人格として出現したのである。

日本人たる我等に取つてもユダヤの豫言者は基督の前驅として特殊の意義を有することは論を俟たない。然し歴史にして若し神の啓導の下に人類の向上發展を企圖せらるゝものと信ずべくば、世界の極東に位し、二千五百有餘年、其の特殊の恩寵を加へ來られたる我が國の歴史に、神の國に近くべき準備を整へたる幾多の聖賢も亦或る意味に於て、我が國に對する豫言者として之を享くるとも敢て不當とは言へまい。

然らば我が國民が道義を進むるに至大の感化を與へたる諸聖賢の教訓も亦基督の君臨に由つて破壊せらるべきに非ずして、完成せられ、聖化せらるゝ所以でなければならぬ。宜なり、釋尊の教義も、孔子の教訓も畢竟は、神の國の君主の出現に由つて始めて、其の光明を發揮し、眞の意義が完成せらるべきである。孔子は「天意」に準すべきを教へた、學者の間にも卑俗の間にも「天」は我が國民の畏敬し、尊崇する所である。然かも孔子の教ゆる「天」は茫乎として其の眞相は明かでない。従つて其の道義の源たる「天意」も亦曖昧模糊として暗中に物を探ぐるの心地がせらるゝ。「天」を「天の父」として肉身の父を見るが如く明確に示さるゝ基督に由つて、始めて孔子の教訓は徹底し、完全なるを得る。従つて其所に基礎を置く、道義も亦基督に由つて

始めて瞭かなるを得、完成せらるゝのである。

生老病死の不幸、凶事を解決して人心の向ふ所を示さんと試みたる釋迦の教理も亦、基督に由つて、其の正しきを愈明かに、當らざるを矯さるゝのである。而して人生の意義は正當に示さるゝに至つた。其の思索の経程も其の中途にして、遂に人間生活の健全なる境地にまで到達するを得なかつた。悲觀して後更に深く進んで始めて出で來るべき樂天の意義は佛教の未だ發見し得ざる所であつた。基督に由つて哀み多き人生も始めて光明を得て神の國の築かるゝ美しき境界たるべき意義は確立した。

釋迦の覺悟も、孔孟の教訓も、卑俗の武士道も、神の國の君主を迎えて始めて深玄な境地へと誘導せられ完成せらるゝのである。

基督に従ふものにして、罪惡に執着し、物質に拘泥し、其の徳操に於て、歴史上に示された道義の實賤に於て、若し上叙の賢人に導かるゝものと比較し、更により高き地歩に立つ能はざるものありとすれば、未だ以て眞の基督者と言ふを得ぬ。

十七、われ律法又預言を云々。耶穌は決して律法や豫言を蔑みせられなかつた。隨所に其の御語

に舊約が引照せられてゐる。殊にルカ二十四〇四十四には書名までも述べられてゐる。(我)來れりと思ふな。耶穌の教訓に由つて古の豫言者が破らるゝものと思つてはならぬ。使徒たちは決してユダヤ教の教義を破らなかつた。神殿を蔑視しなかつた。學者が自己の專賣の如くに宗教を悪用したのに反抗したのみであつた。純粹の福音に由つて總ては完成せらるゝのである。十八、誠に汝らに告ぐ。「誠に」は即ち「ア、メン」である。其の教に力を籠めて「確實に」と言はるゝのであつて、四福音書到る所に用ゐらるゝ語である。一點一畫。ヘブル語の最小の母音も、福音の頭の一劃もの意。律法の過ぎ行かぬうちに律法……悉く究うせらるべし。ユダヤ人は世の終末まで律法は存在するものと信じた。十九、小ちき誠の一つを破り。誠の一つも充實せられざる無く、改削せらるゝことなきを言ふ。其の誠は道德に關するもので、儀式に關するものの謂ではない。ロマ八〇九參照。最小き者と稱へられ。全く棄てられないまでも天國の高位を占むるを得ぬ。耶穌はバプテスマのヨハネを以て人間のうちに於て最も偉大な人物と評しながら、天國に於ては最低下位に屬すると仰せられた。ブルウスはバプテスマのヨハネは神殿に於ける禮拜も諸の宗教的祭典を守らなかつたから此の種の人物であつたと言つてゐる。二十、我汝等に告ぐ、

汝等の義、學者、パリサイ人に勝れずば。學者は聖書の文句の註解にのみ拘泥して其の適用に腐心し、パリサイ人は唯だ形式的儀典にのみ熱注した。基督者の義は其の動機を潔むるにあること前に掲げられたる各節に由つて明かである。

基督者の倫理的態度の訓示 二十一—二十六

二 古への人に「殺すなかれ、殺す者は審判にあふべし」と云へることあるを汝等きけり。二三 然れど我は汝らに告ぐ、すべて兄弟を怒る者は、審判にあふべし。また兄弟に對ひて、愚者よといふ者は、衆議にあふべし。また痴者よといふ者は、ゲヘナの火にあふべし。二三 この故に汝もし供物を祭壇にささぐる時、そこに兄弟に怒まるる事あるを思ひ出さば、二四 供物を祭壇のまへに遣しおき、先づ往きて、その兄弟と和睦し、然るのち來りて、供物をささげよ。二五 なんぢを訴ふる者こそもに途に在るうちに、早く和解せよ。恐くは、訴ふる者なんぢを審判人にわたし、審判人は下役にわたし、遂になんぢは獄に入れられん。二六 誠に、なんぢに告ぐ、一厘も残りなく償はずば、其處をいづること能はじ。

神の國の臣民の遵守すべき律法は、其の形式に表現するに非ずして、靈性的特質に之を表現

するにある。此所に殺人の誠を引いて其の一例とせらるゝ。古への律法は單に人を殺す所爲のみを罪惡と定めてゐる。何れの國の法律も皆然り。此の世の國にあつては單に其の所爲に表現したる不法の事實のみ糺彈する。然るに神の國にあつては其の行動に表現せずと雖も、心中他の存在を咀ひ、之が消滅を希願しつゝ惡意を湛ふるものは、殺人犯者がヒムモンの谿谷に於て處刑らるゝが如くに、其の靈性の發展、成育遂に停滯して、神の國に相應しき資格を帶ぶるを得ず、靈界に成育の停滯は聽て其の死を意味するに外らず、慎惱煩悶の狀、正に熱火に投げせらるゝと等しきものがあらう。故に神の國の臣民たるに相應しき靈性の資格を具備せんとならば、心中同胞の共存共榮をのみ念とし、相共に其の國の國君の志に準ずる覺悟がなければならぬ。

二十一、古への人に。古への國民に教へられた所。即ち古き誠。審判にあふべし。地方法廷の審問に附せらるべし。(申十六〇十八、歴下十九〇五參照)。汝等聽けり。此の如き誠は當時の普通のユダヤ人は會堂に於て朗讀せらるゝ所、又は學者の口から之を聽いたのである。今日の如く自ら聖書を読むことはなかつた。故に「聽く」とある。二十二、然れど我は汝らに告ぐ。此の句は力を籠めて

「我告ぐ」の意味があつて、古のモウゼは神の御語を傳へたが、それが充實のために彼と同等の權威を以て汝等に教ゆるとの意。即ち耶穌の御語は後世充實した意味を神が語らるゝのである。兄弟を怒る者。日本の前譯に「は凡て故なくして」と加へられてゐるが、最古のギリシヤ原本には此の句がない。誠が餘りに峻烈だと感じた後人が是を挿入したものであらう。改譯に是を省いたのは當然である。怒るよりも更に兇暴な感情で非人道的な思念、醒むれば自らも恨悔する如き激烈なる疇情。愚者よと云ふ者は、衆議に……また痴者よと云ふものはゲヘナの火。愚者と譯した原語は「ラカ」とあり、英語の聖書には前譯、改譯共に原語のままに載せらるゝ位であつて、意義が明瞭でない。然しホルツマンは「ラカ」は人間の智的價值を否定すること、「痴者」とは其の宗教的價值なきを指すと云ふ。日本にも「外道」と言ふ宗教的痛罵の語がある。而してそれが始めの意義よりも寧ろ侮辱、蔑視の通語となつてゐる。「衆議」とは死活を判定する權あるサンヒドリムの意。耶穌の眼には斯くの如き情念に驅らるゝものは最高法廷の重罪犯件に相等するものと見られた。「ゲヘナの火」は、エルサレムの郊外ゲ、ヒムモンの谿谷に於て犯人の屍を燻べ焼いた光景、人類最低の恥辱。東京の昔の通用語に「三尺木の上に掛る」と言ふ兇暴非道の惡黨

を意味するのがある。二十三、人若し供物を祭壇に献ぐる時。ホルツマンは此の句を後世弟子の挿入であると言ふ。然し前後の關係からはさう見えないと多數の註解者は反對してゐる。愛の意義なき神の供物は何等の意味を爲さぬ。衆人の怨府となるやうな不當の利得を行ひつゝ献金を以て良心の平安を食らんと試むる如き人物がある。其の献金が他の靈魂を思ひ、衷心から供提した人の如く、自己の靈性の發展に何等の効なきを斯くの如き人々に於て見る。耶穌は自ら供物を献げられた例を見ない。愛の奉仕は供物に勝る。其の身を献げられたる耶穌には他の供物の要はなかつたものと思はるゝ。二十九、人を訴ふるものと……早く和睦せよ。「訴ふる者」とは法律上から反對の側に立つものの意。「審判人」とは判決の權威を有するもの。「下役」とは其の判決を行使するもの。

訓示の第二 姦淫と離婚 二十七—三十二

二七「姦淫するなかれ」と云へるこゝあるを汝等きけり。二八されど我は汝らに告ぐ、すべて色情を懷きて女を見るものは、既に心のうち姦淫したるなり。二九もし右の目なんぢを瞶かせば、抉り出して棄てよ、五體の一つ亡びて、全身がへナに投げ入れられぬは益なり。三〇もし右の手なんぢを瞶かせば、

切りに棄てよ、五體の一つ亡びて全身がへナに往かぬは益なり。三一また「妻をいだす者は離縁狀を與ふべし」と云へるこゝあり。三二されど我は汝らに告ぐ、淫行の故ならで其の妻をいだす者は、これに姦淫を行はしむるなり。また出されたる女を娶るものは、姦淫を行ふなり。〇

二十八、色情を懷きて云々。心中淫慾を蓄へつゝ他に接するものは、其の品性の墮落は既に實行に移せると何の異なる所もない。二十九、右の眼。最も大切なものを犠牲とせよ。日本に於ても「眼よりも可愛い子を」と言ふ語がある。罪に陥るべくば如何なるものも愛惜せず、之を取り去る意。三十、右の手。最も重要な機關。唯一と恃む生活の重要問題。日本にも「股肱と恃む家來」などと言ふ。三十二に就いてはマタイ十九〇九、ルカ十六〇八を見よ。

訓示の第三、誓言 三十三—三十七

三三また古への人に「いつはり誓ふなかれ、なんぢの誓は主に果すべし」と云へる事あるを汝ら聞けり。三四されど我は汝らに告ぐ、一切ちかふな、天を指して誓ふな、神の御座なればなり。三五地を指して誓ふな、神の足臺なればなり。エルサレムを指して誓ふな、大君の都なればなり。三六己が頭を指して誓ふな、なんぢ頭髮一筋だに白くし、また黒くし能はればなり。三七ただ然り然り、否否といへ、

これに過ぎるは悪より出づるなり。

誓は仰も人生に多くの虚偽ある證據であつて、然諾を重んずる者に取つて必らずしも、第三者を以て誓を立つるを要しないのである。武士道の盛なりし頃は「武士に二言なし」として何人も武士の言責を疑はなかつた。然し其の人格の疑はるゝに至るや「刀に掛けて」と自分の人格よりも、其の帯する「大小」を以て信任を得んとし、更に「弓矢八幡も照覽あれ」と、武運の神を引合に出して誓言するに至つた。日本の物語を讀みて最も滑稽に感ずるは武士が「弓矢八幡も照覽あれ」と口外して、何事か誓ふ場合は相手を欺かんとする手段が多いことである。自己の良心を裏切つて何事かを他に信據せしめやうとすれば、必らず、相手が信用しさうなものを捉へ來つて誓を立つるが常である。如何に「刀に掛けて」も腰武士では其の誓言を保し得べき望はない。神の威力も、神の存在さへも確實ならぬものに取つて、其の神の前に如何に大事を誓ふともそれが何の意味を爲さうか。

誓は即ち斯くの如き罪と弊とを伴ふのである。然諾を重んぜんとならば必ず先づ自ら公明正大なる人格を見せねば之を完うすることを得ぬ。公明を缺きつゝ、言責を負ふ誠を有せずして、

如何に神其の他を以て誓ふとも畢竟は善意から出づることは出来ぬ。

三十三、誓ふ勿れ云々。斯くの如き誠は舊約には發見せられない。然しユダヤでは神の御名に於ての誓の外は責任がないと主張せられた所から耶穌は十誡中の第三の誠を廣義に解して之を引照せられたものである。三十四、一切誓ふな。此の誠は全ての誓を禁ずるにある。然し不注意にして不誠實な誓を漫然行ふを禁ずるもので、法廷に於けるが如き誓言を禁ぜられたものではないとア、ルは言ふ。天を指して以下。上叙の如くユダヤのラビの誠に「天地は盡く、故に天地を指しての誓も亦消え行く」との詭辯があつたので、何れにしても畢竟神と關係あるが故に神の御名を濫用すると一般なりとの説明を與へられたものである。三十七、然り然り、否な否な。然諾を重じて此れに忠なれ。誓よりも確實でなければならぬ。ヨセフスの傳ふる所に由ればエツセネ派の人々(耶穌時代の隠遁行者)は誓を爲すを畏れたが、彼等の口外したことは誓つたより確實であつたと言ふ。日本の古への眞の武士も生命を賭しても言責を重じた。

訓示の第四、犯罪の報復三十八―四十二

二八「目には目を、齒には齒を」と云へる。こゝあるを汝ら聞けり。三九されど我は汝らに告ぐ、惡しき者に抵抗ふな。人もし汝の右の頬をうたば、左をも向けよ。四十なんぢを訟へて下衣を取らんとする者には上衣をも取らせよ。四一人もし汝に一里ゆくこゝを強ひなば、共に二里ゆけ、四二なんぢに請ふ者にあたへ、借らんとする者を拒むな。

古の國法は何れも犯罪に對する報復にあつた。然かも耶穌の愛の感化の全世界に及ぶと共に、其の刑法すら尙ほ感化のために之を他より隔離する意義を含むまでに進歩し來つて居る。然し其の意義は斯くの如きに拘はらず、尙ほ殺人には死刑、傷害には懲役の苦痛を課せらる。然し此れは社會の構成上止むを得ずとしても決して最高の方法ではない。弟子たちに對して耶穌は更に高き要求を與へらるゝに在つた。

斯くて個人に對する耶穌の此の訓誨よりして無抵抗主義と稱し、遂に國家が戰を爲すを否定する主張をさへ生じた。トルストイの如き其の一例である。フレンド派も亦同主張を有する。然し此所に耶穌の授けらるゝ所は個人の場合であつて、其の行動に幾多の責任を有する人々が、他の苦難を救はんがために惡者を防ぐを言ふのではあるまい。

其の敵を容して爲すがまゝに委ぬるも、又之を懲戒するも、其の精神は愛より發足せねばならぬ。純然たる愛を其の底深く有するもの取りては些細な行動の爲めに容易に他に懲戒を加へ、又は憤激すべき筈はない。「底深き淵や騒ぐ谷川の、淺き淵にこそ仇波は立て」。木村長門守は殿中に於て粗莽なるお茶坊主のために小鬢をしたゝかに撲りつけられつゝも微笑を含んで過ぎ、衆人の嘲笑の的となつたけれども、後其の人物の世に認めらるゝ及んで彼の茶坊主は恨悔措く能はず、其の忠信なる家臣たるに至つたと傳へらるゝ。戰爭に於て他國に懲戒を加ふるも、將た社會のために惡者を制度するも、畢竟は其の人を惡まざる愛より之を行はねばならぬ。懲戒すべきを放任するは深刻なる意義に於て決して敵を愛し、又世を愛する所以ではあるまい。

三十八、目には目を、齒には齒を。出二十一〇二十三の語。國法や社會安寧の爲めの規定を耶穌は否認せられたのではない。三十九、惡しき者に抵抗ふな。其の惡しき者の定義は次の句にあり。右の頬をうたば。右を先にしたのは普通の習慣であつて、第一に右を撃つと言ふ意味はないと言ふ。或る註釋者は先づ手の背で右を撃ち、次に掌で左の頬を撃つと言ふ。後の句が、輕いものを求められて、更に重きものを與ふるやうに教へられてゐる所に照せば此の想像も不當で

はない。而して使用せらるゝ動詞は右を撃たるゝや否や左を向ける意味である。此の行爲に制限がなければならぬ。何れの時も無抵抗と言ふのではあるまい。耶穌御自身の例を見よ。(ヨ十八〇二十二、三)。**四十**、私の行爲から公の訴訟に及ぶ。『下衣』はシャツの如く膝までのもの。『上衣』とは晝は衣服として夜は夜具として甚だ重要なもの。**四十一**、公役。羅馬の軍隊の過ぐ所人民は其の軍用靴や軍用行李を運搬せしめられた。耶穌の十字架をクレネのシモンに擔はせた如きは其の一例。(マタイ二十七〇三十二)此所に『一里』とあるは羅馬のマイルで千六百ヤアド、即ち一哩弱。以上三箇條の抑制した行動は決して卑屈や奴隸の精神を鼓吹せられたものではない。『長』ものには卷れろ』と言ふやうな打算や、卑怯の事大根性からではない。更に高遠な勝利のための忍従である。心中の敵を服するものは百萬の敵と雖も恐れぬ。**四十二**、請ふもの、借らんとする者。ルカに由ると要求したものの報復に此方より要求するなどあり。強制的の借用申込は何れの時代にも存在する。然しユダヤ人ほど厚顔しい斯の種の問題に苦しめられたものはなす。

訓示の第五、愛の律法 四十三—四十八

【二】なんぢの隣を愛しなんぢの仇を憎むべし』と云へることあるを汝等さけり。【四】されど我は汝らに告ぐ、汝らの仇を愛し、汝らを責むる者のために祈れ。【五】これ天にいます汝らの父の子とならん爲なり。天の父はその日を悪しき者のうへにも、善き者のうへにも昇らせ、雨を正しき者にも、正しからぬ者にも降らせ給ふなり。【六】なんぢら己を愛する者を愛すとも何の報をか得べき。取税人も然するにあらずや。【七】兄弟にのみ挨拶すとも何の勝るこがある。異邦人も然するにあらずや。【八】然らば汝らの天の父の全きが如く、汝らも全かれ。

神の國の民には敵なきを得ない。其の君主に忠信ならんとすれば、此の世は争ひ立つて之に迫まるに相違はない。而して不倶戴天の仇として向ひ來るべきは必然である。個人の生活に對しても毒心を含んで迫り來るものあるべく、其の主義の此の世の政治に活用せられんとすると、死力を盡くして之を撲滅せんと試むる反對派生すべく、殊に宗教上に於ては自己の私心、公明ならざる生活を蔽はんがために策を盡くして抗争し來るものが現はるゝであらう。然かも神の國の使臣の其の心に湛ふるものは愛の外、一點の不純を混じへてはならない。輝く日光と

裕かに濺がる、雨澤とが萬物を發育せしめ、成熟せしむる如く愛を以て望まねばならぬ。如何なる權謀術數に面するも、卑劣不正の手段に訴へらるゝも基督者は愛を以て之に應じて聊かの憂も留めてはならないのである。此れぞ其の國の君王の憲法たり、品性たるが故である。人臣にして其の主の志と馳背しては其の國は立たない。

四十三、汝の隣を愛し、汝の敵を憎むべし。利十九〇十八の句。後の句は舊約になし。然しラビは偏狹な愛國心から異邦人、異教徒を憎むに等しきことを教へた。「汝の仇」とは個人的、政治的、宗教的の反抗者、異邦人迫害者と言へやう。四十四、汝等の敵を愛し、汝らを責むるものために祈れ。相手を愛せねば其の悔悟のために祈ることを得ぬ。祈れば此れを惡むことが出来ぬ。前譯にあるものを改譯には省略せられてゐる、それが至當であつて、最も良い寫本には改譯の通りに記さるゝ。挿入した項目はルカ六〇二十七、八からの引用であるらしい。四十五、天に在ます汝らの父の子とならんため。愛の行動を爲す動機は、忘恩不忠の人間にも尙ほ等しき恩恵を惜られざる天の父の品性を理解せんとするより來る。其の子たることは將來の神の國に於てではない。現在に其の資格が與へらるゝ。愛を以て愛に應ずるは異邦人すら行ふ所で、人間以上に目標を

置いてゐるものでなくとも實行する所である。四十六、取税人。今日の收税吏を言ふのではない。ロマの苛政の手先となり、賣國的行動を爲すのみならず、私腹を肥さんがために暴戾を極め、同胞國民に對して血も涙もない鼠賊に等しき吏員。四十七、異邦人。道德なく、不徳の源たる偶像に事ふる人々。四十八、汝等も全かれ。神の完全には到底達せらるべくもないが將來を望んで進むべき意味。人間の狀態と能力とに比較して完全な愛を行ひ得る所以。

第六章

虚飾なき宗教 一—四

一 汝ら見られんために己が義を人の前にて行はぬやうに心せよ。然らずば、天にいます汝らの父より報を得じ。〇ニさらば施濟をなすとき、偽善者が人に崇められんまで會堂や街にて爲すことく、己が前にラツバを鳴すな。誠に汝らに告ぐ、彼らは既にその報を得たり。三 汝は施濟をなすとき、右の手をなすこと左の手に知らすな。四 是はその施濟の隠れん爲なり。然らば隠れたるに見たまふ汝の父は報い給はん。

神の國の市民の義は此の世の人の賞讃を博せんがため、行爲に非ず。孔子は「其の以す所を視、其の由る所を觀、其の安ずる所を察すれば人焉ぞ瘦さんや」と言つた。天の父に事へて其の品性に倣はんと欲するものにして、單に世の人の毀譽褒貶を行爲の標準とし、其の動機となすもの、焉んぞ天の父の嘉賞せらるる望みがあらうか。然かも人の弱點は目に見えざる天の父よりも眼前に環座せる世の人人を萬事の對照と爲し易し。故に耶穌は慎重に之を警告せらるるのである。

宗教者が自己の宗教の偉大性を世に示さんとして社會事業に熱注し、里耳に入り易き善業を以て其の特質を認識せしめんと焦慮する結果は、新聞雜誌に誇張したる自家廣告を掲載せしむるが如き、神の榮光を表願せんとする志は何時しか自己の事業を宣傳せんとする思念に墮し易し、萬事宣傳を唯一の成功條件と心得る今日に於て基督者の正に警戒を要する所であらう。

一、己が義。パリサイの義は施濟、祈禱、斷食であつた。心せよ。此れに就いて警戒せよの意。此所に示さるゝ所は五〇十六に「汝等の光を人々の前にかがやかせ」とあるのと全く矛盾するやうに見える。即ち隠れんとする誘惑あるときは顯はすやうに努め、顯はさんとの誘惑あるとき

は隠るゝに努むること基督者の道であるとブルフスは言ふ。汝らの父より報ま。芝居掛りの宗教には天の父の干與せらるゝ餘地はない。マタイ十一〇二十五、六参照。二、僞善者。俳優の意。其の思念を忠實に表現したるものではない、其場かぎりに外形的に装ふ意、樂屋に於ては給金や賃金の高に血眼になつてゐる「大野九郎兵衛」のやうな男が、拍子木と同時に清廉純忠の「内藏之助」に扮して舞臺に現はるゝ如きを言ふ。賤業婦に戯れつゝ、舞臺が廻れば緋衣を纏ふ生佛として高座に現るゝ如きは此の類であらう。ラツパを鳴らすな。エデルンヤイムの言ふ所に由れば神殿の婦人の苑に備へられた献金の器は其の形からラツパと稱せられたと言ふ。音を立てゝ献金を投入する意味も含まれてゐやう。今日も尙ほユダヤの會堂にては施物を行ふ。ピラを市中に吊し廻つて施餓鬼を行ふの類。汝らは既に其の報云々。地上に於て既に人よりの賞讃に由り充分の報を得てゐる。四、汝の父は。天地を支配し、如何なる秘密も隠るゝことなき天の父。報い給はん。六節にも、其所にも前譯の「明顯」と言ふ文字が改譯には省かれてゐる。

五 なんぢら祈るさき、偽善者の如くあらざれ。彼らは人に顯さんとして、會堂や大路の角に立ちて祈ることを好む。誠に汝らに告ぐ、かれらは既にその報を得たり。六 なんぢらは祈るさき、己が部屋にいり、戸を閉ぢて隠れたるに在す汝の父に祈れ。さらば隠れたるに見給ふなんぢの父は報い給はん。七 また祈るさき、異邦人のごさく徒らに言を返すな。彼らは言多きによりて聽かれんと思ふなり。八 さらば彼らに效ふな、汝らの父は求めぬ前に、なんぢらの必要なる物を知りたまふ。九 この故に汝らは斯く祈れ。天にいます我らの父よ、願くは、御名の崇められん事を。十 御國の來らんことを。御意の天のごさく、地にも行はれん事を。十一 我らの日用の糧を今日もあたへ給へ。十二 我らに負債ある者を我らの免したる如く、我らの負債をも免し給へ。十三 我らを嘗試に遇せず、惡より救ひ出したまへ。○
十四 汝等もし人の過失を免さば、汝らの天の父も汝らを免し給はん。十五 もし人を免さずば、汝らの父も汝らの過失を免し給はじ。○

祈禱は神と人間との交際である。眼前神の他に標的なき態度に於て始めて神との完全なる交通は行はるゝを得やう。

然しながら後に兩三人集合する所、我も其のうちに在りと宣へる耶穌は、此の教に由つて會集の共同禮拜を否定せられた意味ではない。

墮落した宗教に於て禮拜や勤行が單に此れを傍聽する他の人々を目標とし、其の意を迎へ、或は自己の信仰を廣告する手段に用ゐらるゝを實見せるものには、耶穌の當時に於ける祈禱の通弊を類推するに難くないであらう。此れを警告せんがために耶穌は眞の信仰より出づる祈禱の意義を授けられたものと想はねばならぬ。我等は相手に膝を突き着けて、激越なる口吻と燃ゆるが如き熱情とを以て涙を流しつゝ祈る人々にして、尙ほ祈禱の言句を聽取するとき、果して神に對するものなりや、面前の相手を威嚇する語句なりやを怪しまるゝものを基督者の間に往々觀取するのである。耶穌の警告の甚だ痛烈にして人間の通弊に正しく的中せるを感謝せざるを得ぬ。

祈禱と言へば世の多くの人々は、何等かの要求を神に供提しつゝ強請する行爲であるが如くに思ふものもある。然し基督の教へらるゝ祈禱は斯くの如き行爲のみではない。天の父と其の子等の交際である。故に第一は天の父の徳性に對する讚美である。第二は普き天恩に對する感謝である。第三は天の父に背き其の御意に沿ひ得ざる自己の不徳の懺悔である。第四に始めて斯くあらま欲しとの志を陳ぶる祈願である。

五、立ちて祈ることを好む。立つて祈るのがユダヤの習慣であつた。説教は座して行つた。宛然かも海軍に於て軍艦旗の掲揚、引卸しに際してラツバに應じて、如何なる所に在つても各員が起立擧手の禮を行ふ如く、一定時間神殿に於てラツバが吹奏せらるゝと同時に佇立して祈るのがユダヤの習慣であつた。然るにパリサイ人は其の頃を量つて家を出で故更に街上に於てラツバを聞いて祈るやうに心掛けた。六、己が部屋。納戸、ルカ二十二〇二十四、マタイ二十四〇二十六。財寶を蓄へ、又は秘密の談合を爲す室。隠れたるに在ます汝の父に祈れ。至聖所に在ます父。即ち父のみを丁標とせよ。然らば會集と共に祈るは不都合なりや。然らず。此所は祈禱と言へば必らず聲張り上げて行へるものを誡められたるもの。密室の祈禱を爲すものが集合してこそ公會の祈禱も意義あり。七、徒らに語を反覆すな。其の原語は「吃音者」と言ふ所から出たもの。無意味な語を重ねる意。一切經の誦讀、念佛、題目の反覆は如何。「異邦人」とは「俗衆」と言ふ意義。尙ほイスラエル人は此れを日本人が「土人」と普通稱する如き氣分と調子にて用ゐたもの。八、汝らの父は……知り給ふ。父は神である。萬事を知り給ふ。祈禱は人間が子としての情念を訴ふるにある。父に教育を行ふ必要なし。九、此の故に斯く祈れ。基督者の祈禱は此の典型の

如く純單、卒直、簡明でなければならぬ。パリサイ人や異教徒の祈禱の如く綿々として長たらしき祈禱を爲すを要せず。天に在ます我らの父よ。基督者の祈禱は父に對する子の訴へである。怒れる神をなだむる祭典ではない。天にいます父として神を仰ぐことが基督教の中心である。「天に在ます」が故に、眼に見るべからず靈的である。援護するに全能の御手を以てし、廣大無邊の恩寵と智慧とを有せらるゝ。御名の崇められんことを、神の「御名」とは其の本質的の榮光の意。地上の總てに其の榮光普及せんことを思ふの念を告白す。従つて斯くの如く榮光の普及することに努力せんと願ひがある筈。十、御國の來らんことを。ユダヤのラビさへ「神の國の來らんことを念願せざる祈禱は祈禱に非ず」と言つた。神の國は個人臣民——即ち神の國の民となれるものゝ集合するに由つて始めて建設せらるゝ。御意の天の如く地にも行はれんことを。天とは神の御意を體して此れに事ふる靈的存在者、即ち天使の群。此の地上に於ても道德上、神の御意が完全に理想的に行はれんことを、或る人々は、前二個條に皆「天の如く地にも」の句が適用せらるる筈と言つてゐる。十一、我らの日用の糧を云々。此所の「日用の」と言ふ語の意義に就いて種々の議論がある。其の原語が色々の意義に解せらるゝからである。アウガスチンは「肉體と靈魂に

必要なるものは皆此の「日用の糧」のうちに含まる」と解したが、大底の註解者は之を取る。苟も基督の弟子たらんものは富貴や贅澤物のために祈るべからず、唯だ其の生活に必要なものゝために祈るを示されたものである。十二、我らの負債。負債とは罪惡、神に事ふるに不當な弱點。我らの免したる如く、マタイ十八〇二十一―三十五の譬参照。苟も天の父と等しからんと欲するものは、速かに他を免すに於て亦父の如くなければならぬ。父に祈るの前、先づ他の罪を赦さぬばならぬ。十三、我らを嘗試に遇せず。神は人間に對して罪に陥るべき誘惑を試みらるゝ理由がない。然し其の攝理に由つて人が試練せらるゝを許さるゝ。基督者の品性は試練を経て始めて純化せらるゝ。人間が善を受感し得る特質は惡をも亦受感する憂がある。故に試練は止むを得ざるも、求めて之を受くべきものに非らざらん。惡より救ひ出し給へ。危險の迫まるや速刻の意。即ち惡者サタンの手より時を移さず救はせ給への意。「頌榮の句」、前譯には此所に頌榮の句が加へられてゐるが、ルカ傳にはないのであつて、禮拜式のために加へられたるものに相違なく、改譯には省略せられてゐる。ロマ教會では「主の祈」にも此の頌榮句を省略すると言ふ。

虚飾なき断食 十六―十八

十六 なんぢら断食するとき、偽善者のごとく、悲しき面容をすな。彼らは断食することを人に顯さん
 して、その顔色を青ふなり。誠に汝らに告ぐ、彼らは既にその報を得たり。十七 なんぢら断食するこ
 き、頭に油をぬり、顔をあらへ。十八 これ断食するこその人に顯れずして、隠れたるに在す汝の父に
 あらはれん爲なり。さらば隠れたるに見たまふ汝の父は報い給はん。

十六、断食するとき……悲しき面容をすな。施濟と祈禱と断食とはユダヤの宗教生活に必須の條件であつた。パリサイ人はモウセがシナイに登つた木曜日と、降つて來た月曜日とを記念して一週二回に断食した。俳優なる彼等が如何んぞ此の一大機會を取り逃すべき、廣告の愁歎を演じた。「悲しき面容」ルカ二十四〇七のエマオの途上の二人の弟子の様子と同語、然し彼等のは衷心から出づる容貌であつた。その顔色を青ふなり。顔を洗はず、髪を梳らず、色褪せた衣服を纏つてゐた。十八、汝ら断食するとき以下。前の句と對句にて裏を其のまゝ言ひ表はさる。ブルウスは「宗教に於ける眞摯と現實とを示す以上の懇切なる教訓は神を父とする此の説明を間接に

與ふるものである。父としての神は禮拜者が斯くの如き資格を以て已に望まんとことを要求せらる。何れも密接な關係を示し、父と子、夫と妻の如くに虚飾を去つて現實の愛情を以て結ばるを要し給ふ』と言ふ。

貪慾と吝嗇との戒飾 十九—三十四

十九 なんぢら己がために財寶を地に積むな、こは蟲と蝼蛄が損ひ、盗人らがちて盗むなり。二十 なんぢら己がために財寶を天に積め、かしこは蟲と蝼蛄が損はず、盗人らがちて盗まぬなり。二一 なんぢの財寶のある所には、なんぢの心もあるべし。二二 身の燈火は目なり。この故に汝の目ただのくば、全身あかるからん。二三 然れど、なんぢの目あしくば、全身くらからん。もし汝の内の光、闇らば、その闇いかげかりぞや。二四 人は二人の主に兼事ふるこそ能はず、或は、これを憎み、かれを愛し、或は、これに親しみ、かれを輕しむべければなり。汝ら神と富とに兼事ふるこそ能はず。二五 この故に我なんぢらに告ぐ、何を食ひ、何を飲まんぞ生命のこそを思ひ煩ひ、何を著んぞ體のこそを思ひ煩ふな。生命は糧にまさり、體は衣に勝るならずや。二六 空の鳥を見よ、播かす、刈らず、倉に收めず、然るに汝らの天の父は、これを養ひたまふ。汝らは之よりも遙に優る者ならずや。二七 汝らの中た

れか思ひ煩ひて身の長一尺を加へ得んや。二八 又なに伊豆衣のこそを思ひ煩ふや。野の百合は如何して育つかを思へ、勞せず、紡がざるなり。二九 然れど我なんぢらに告ぐ、榮華を極めたるソロモンに、その服裝この花の一つにも及かざりき。三十 今日ありて明日、燼に投げ入れらる野の草をも、神はかく装ひ給へば、まして汝らをや、ああ信仰うすき者よ。三一 さらば何を食ひ、何を飲み、何を著んぞて思ひ煩ふな。三二 是みな異邦人の切に求むる所なり。汝らの天の父は凡てこれらの物の汝らに必要なるを知り給ふなり。三三 まじ神の國と神の義とを求めよ、然らば凡てこれらの物は汝らに加へらるべし。三四 この故に明日のこそを思ひ煩ふな、明日は明日みづから思ひ煩はん。一日の苦勞は一日にて足れり。

基督の教訓、生活は實に此所に其の根底を有する。自己の修養に志を傾けんがために他に供養を求むるに非ず。又靈界に憧がれて地上の生活を等閑に附するに非ず。天の父を父として實生活の目標對手とするに在り。父に信頼し、父を中心として其の國の建設に熱中せば父は空飛ぶ鳥にすら食を給し、野の草花にさへ装を凝らしめ給ふ。況んや人類をや。人事百般の凶事、不祥の問題は、其の源を忘れて、生活に狂奔するより生ずる。孔子は『蔬食を飯ひ、水を飲み、

眩を曲げて之を枕とするも樂亦其の中に在り、不義にして富み、且つ貴きは我に於て浮雲の如し」と言つた。獨孔子のみではない。人皆良智良能を有する。財を積む慾望に惑ひ、其の道を誤らば、憂悶、煩累を免るゝ能はず、人生を以て浮世とし、其の矛盾、不如意に心を痛むるの外はない。然かも自己を恃み、自己の外認むる能はざるものは、其の衣食の由つて來る所を明かにせざるが故に、之を度外に置く能はず、營々として是がために苦悶する他なきを得ないのである。

古への武士は上に祿を給する主君あり、其の道を完ふすれば、子孫のために後顧の憂なきを期すればこそ忠誠を専らと爲すを得た。後門饑餓の脅迫するものあるを意識しては活ける人間安んぞ決然たる行動に出づるを得やうか。道の説かるゝこと喧しくして世に其の道の行はれざるはこれが爲めである。神の國の君主は既に明白なる實證を掲げて、此の人生最大の不安に對して保證を與へらるゝ。孔子は「言尤寡く、行悔寡ければ祿其の中に在り」と稱した。これ夫子自らの體驗に由る訓言であらう。神の國の君主は既に自ら手を以て大工の職を執り、多くの家族を擁して、天の父に事ふるの道を究め、其の國の建設のために今は煩累多き世に現はれ、

安んじて其の事業に身を委ねつゝ、其の生活に實證せらるゝ所を授けられるゝのである。其の人格を信じ、其の宣言を體して、基督者は後顧の憂なく、天の父に信頼し、以て神の國の君主に純忠至誠を盡くすを得る。

斯く基督の道は靈界にのみ熱中して物質を忘るゝものではない。物質の本源たる天の父に信頼し、其の根底の上に靈界の事業を經營する所以である。

十九、地に財を蓄ふる勿れ。財寶を熱愛するは昔も今もユダヤ國民の特性とあつた。然しこれはユダヤ國民にのみ限るまい。「蟲と鏽」ユダヤに於ては高貴な織物や腐蝕する寶物を蓄へた。數萬圓の古織、骨董を庫に蓄ふる類である。二十、天に頼め。ルカ十二三十三には「古びぬ財布」とあり。時も變遷も關係なき靈界。二十一、汝の財寶……汝の心。其の歡喜も希望も擧げて打ち込まるゝものが寶である。地上に其の財寶を有すれば、其の熱愛も其所に葬られざるを得ず。二十二、身の燈火は目なり。前譯には「光」とあり、改譯の方至當。此れは種々議論のある句である。道德上の光明と物質的の眼とが錯雜して陳べられてるやうである。然し眼は視覺を與ふる機關なると同時に尙ほ内的の性状を表現する窓なるが故であるとブルウスは言ふ。汝の目

正しくば。目にして誠實純潔ならば、神に事ふるを唯一の標的となすを得ん。従つて寶も一つ、光明の源も一つ主も亦一つなるべし。而して其の進路に一點の闇影もなからん。二十四、**人の主に兼ね事ふる**。鹽が用に堪へんとすれば味を有せざるべからざる如く、其の眼が忠實な指針ならざる可らざる如く、其の目標と行爲に統一あらしめんとすれば、心情の統一なるを要する。奴隸は其の主人を二人有することは出来ぬ。又斯くの如きはあり得ざる所である。神と富、此所に富とあるは原語には人格化されて用ゐらるる。神に事へて富有となる能はずとの意味ではない。神に事へつゝ富を偶像として事ふることを得ずとの意味である。二十五、**思ひ煩ふな**。富に對する苦悶ほど神に不忠を來たすものはない。其の心配は蓋し心意を攪亂せしめて正鵠を得ざらしむる。「諸の心勢を神に委ねよ、神女の爲に慮ばかり給へばなり」ペテロ前五〇七。基督者の特質は此所に存する。此の句は決して準備や勞働を否定する意味ではない。神の攝理を信頼すると稱して手を束ねて暮すは懶惰にして又罪惡である。神は其の需用のものを準備せしめんがために人には勞働を課せらるゝ。鳥と雖も食物に就いて豫想し又此れを得んがために搜索する。二十六、**空の鳥を見よ**。蔭かす刈らざる鳥すら斯くの如し。況んや此れを知りて準備することを

知る更に高等なる人間に於てをや。二十七、**身の丈一尺を加へんや**。前譯には「生命を寸陰も」とあり。原語には身の丈と生命と兩様の意味を有する。ルカ二〇五十二に由れば身の丈に相違なし。「汝らの思はざるうちに神の爲し給へる所を汝は到底行ふ能はず。神にして若し汝が成長する間之を養ひ給へりとすれば、其の成長の中止せられたる今神を信頼する能はざるか」と言ふのが耶穌の思召であるとブルウスは言ふ。二十八、**野の百合**。パレスチナに於て荆棘の下蔭に夥しく咲き競へる赤色のアネモネであるとフアラアは言ふ。或る註釋者は「百合」とは「野の草花」の總稱なりと言ふ。(改譯欄外参照)。二十九、**榮華を極めたるソロモン**。ソロモンはシバの女王が驚嘆したるほど(王上十〇)の榮耀榮華を極めたれど、神の御手に裝飾せられたる野の花に及ばざる遠き人工の美に過ぎなかつた。「信仰の薄き」弟子たちの眼には然しも美しき天然も其の眼に映らなかつた。三十、**爐に投げ入れらるゝ**。粘土煉瓦で築かれた上の窄んだ窯。滿洲地方に於ける如く此の地方には薪用の木材少なく燃料は主として枯草や藁類使用せらるゝと言ふ。三十一、**異邦人の切に求むる所なり**。試みに世の道德を見よ。何れも富に非ずんば名、然らずんば權勢である。立派傳中の人とは富を成せるものと言ふ。異邦人の切望する所は此れのみ。弟子た

ちは新たなる生活の主義に立つ、故に最高の求むべきものに向つて惑ひなき判断を下して進まねばならぬ。三十三、まづ神の國と神の業とを求めよ。神の國の祝福こそ熱望と努力の第一の目標でなければならぬ。我等が當然の責任を盡くすを以て其の唯一の思念となさば、神は我らの幸福を思念せらるゝに相違ない。此の最高法則に對する智慧を求めねばならぬ。オリゲンの傳説に由れば、基督は「至高のものを求めよ、低きものは加へられん」と宣うたとある。此れは全く物質を顧みる勿れと言ふのではない。其の當然の地位に置き、「まづ」求むるものではないとの意味である。三十四、明日は明日 其の日の苦勞を負はゞ足りる。明日の勞苦をどうして豫測し得やうか。故に杞憂を抱きて煩ふなかれとある。

第七章

人を審くな 一一五

一 なんぢら人を審くな、審かれざらん爲なり。二 己がさばく審判にて己もさばかれ、己がはかる量にて己も測らるべし。三 何ゆゑ兄弟の目にある塵を見て、おのが目にある梁木を認めぬか。四 視よ、お

のが目に梁木のあるに、いかで兄弟にむかひて、汝の目より塵をとり除かせよと言ひ得んや。五 偽善者よ、まづ己が目より梁木をとり除け、さらば明かに見えて、兄弟の目より塵を取りのぞき得ん。

此所に言ふ審くとは、他の品性に對する正當なる研究を廢せよとの意義ではあるまい。若し他の品性に全く盲目ならんか、耶穌は如何にしてパリサイ、サドカイの真相を觀破し得られたであらうか。聖賢に倣ひ、偽善者に鑑み、自己の品性の陶冶發達を期せんとならば、必らず先づ細心の注意を拂つて他の品性を考究しなければならぬのである。孔子は言ふ「善を見ては及ざる如くす。不善を見ては湯を探ぐるが如くす」、又曰く「賢を見て齊しからんことを思ひ不賢而内自ら省るなり」と。

然し他人の品性は是れに對して献身の愛ありて始めて其の真相を觀取し得る所以である。「子を觀る親に若かず」愛ありて始めて徳性を理解し得るのである。耶穌が掌を指すが如く他人の品質を識別せられたるは、「人に役はれて、其の贖償」たる覺悟ありしが爲めである。

此所に言ふ「審く」とは他の眼に存在する塵即ち弱點をのみ眼に留めて之を批判する意味である。他人の缺陷の指摘者ほど世に用なきものはない。

然しながら他人の缺陷を指摘し、之を彈劾するものは同じく其の弱點を攻撃せられざるを得ぬ。今日労働運動にせよ、社會問題にせよ、或は政黨政派にせよ、他人の缺陷を覘つて之を陥るゝに汲々たるが故に、其の本然の面目、目的を忘れ、相互に理解なく、相闘ぎ相争ひ、遂に人間文化の大業に何等の貢献なくして終らんとするのである。個人に於ても亦同様である。故に其の弱點、缺陷を赦して之を愛するの雅量なくんば、他の真相を明かにするを得ぬ。

一、審くな。白らは神より寛大に處せられんことを希望しつゝ人は資料も定かならざる他の弱點に無情の攻撃を加ふるが常である。ロマ十四〇三以下、コリント前四〇五。神の審判は無私公平である。故に「汝らが量る量にて汝らも量らるべし」。神の裁定は確實に來る。三、塵を見て……梁木を認めぬ。此れはユダヤ及びアラビヤに行はるゝ諺である。シセロ曰く「愚人は他の弱點を知りて、自己の弱點を知らず」と。「見て」と「認めぬ」と相對し、「塵」と「梁木」の相對するを思へ。四、除け。パリサイ人が攻撃する種々の罪惡よりも彼等の罪惡の方遙かに重し、故に其の根底より大罪を除くに非ずば他人を正解するを得ぬ。

附 録 の 誠 六

大聖なる物を犬に與ふな。また眞珠を豚の前に投ぐな。恐くは足にて踏みつけ、向き反りて汝らを噛みやぶらん。〇

六、聖なる物を犬に眞珠を豚の前に。

此の句は突然に此所に挿入してあるが如くに思はる。然し前叙の問題に就いての道德的批評は別問題であることを思ひ誤るなどの意味である。人道のため、愛を以て行ふ批判は耶穌自身さへ此れを行はれた。「聖き物」に就いて種々の議論がある。或る人は基督教の眞理なりと言ひ、第二世紀頃には晚餐の意味であると言つた。然し個人の經驗に由つて、自己の最も神聖とし貴しと思ふものと心得て誤はあるまい。道德的批判力なくして純潔なる婦人が野卑なる男子に交際せば如何。其の神聖は廳て危いであらう。「犬」、「豚」、何れもユダヤに於ては耻知らぬ不潔の動物と思はれたるもの。即ち彼等と憎に在るために何等の益も受けざる種類の人物を言ふ。野良犬は聖き物を與へられても、曲れる根性より叩き着けられたものとして齒を剝いて咬み來

るべく、豚は食ふ能はざる眞珠は何の價値なしとして地に踏みつくるのみであらう。

祈禱に就いての訓戒 七一十二

七 求めよ、然らば與へられん。尋ねよ、さらば見出さん。門を叩け、さらば開かれん。入すべて求むる者は得、たづぬる者は見いだし、門をたたく者は開かるるなり。九 汝等のうち、誰かその子パンを求めんに石を與へ、十 魚を求めんに蛇を與へんや。十一 然らば、汝ら惡しき者ながら、善き賜物をその子らに與ふるを知る。まして天にいます汝らの父は、求むる者に善き物を賜はざらんや。十二 然らば凡て人に爲られんと思ふことは、人にも亦その如くせよ。これは律法なり、豫言者なり。

神の國の臣民に對して父なる神の與へらるゝ恩寵は愈詳やに、愈具體的に示されて來た。此れを求むるものには、天の父は必らず其の溫容を示さるべく、又地上の父すらパンを求むる子に對し、欺きて石を與ふる殘酷なる態度なく、魚を求むる子に蛇を與ふる不慈の行動なし。況んや天の父は慈愛の本源である。其の名を「愛」と言ふ。焉んぞ、熱愛せらるゝ子等の號叫、苦願する所を貶けらるゝ道理があらうか。パウロは其の經驗に鑑みて曰く「己の御子を惜ずして我ら衆のために付し給ひし者(神)はなどか之にそへて萬物を我等に賜はざらんや」と。求めて得

れざるは得れば我等に傷害を來たすがためのみ。故に地上の父に其の子が滿腔の信頼を置きて其窮乏、希望を訴ふる如く、更に慈愛に満ち、能力極まりなき天の父に對して、基督者は求むる所を卒直に、敬虔に、又信頼の念に溢れて訴へなければならぬのである。神の國の君主は既に之を保證し給ふ。

七、求めよ、然らば與へられん。ルカ十一〇九—十三に同様の教訓を載す。而して此の條を主の祈の後に加へてゐる。其の求むるには發達あり。即ち「求むるより、「尋ねる」に進み、更に「叩く」に至る。祈禱は益進んで切實とならねばならぬ。九、パン……石……魚……蛇」。此の二つの對照は共に形體の似たものがある。ユダヤのパンは一塊の石のやうであつた。所謂フランスパンで類推出來やう。魚と蛇とも形相似たるものあり。十一、汝ら惡しきものながら。獨の外に善きものなし、神のみ善である。最善の人間と雖も尙ほ不完全たるを免れず。善き物を賜はざらんルカ(九〇十三)に由つて「聖靈」を指すこと明かである。即ち朽つべき物質よりも靈的の賜物を指す。十二、凡ての人に爲られんと思ふことは云々。神は斯く善なるが故に基督者は天の父に似ねばならない。舊約典外聖書の一巻トピットに曰く「汝の忌む所は何人にも行ふなかれ」とあ

り、孔子は「己の欲せざる處、人に施す勿れ」と。然し兩者共に消極的である。耶穌の教訓は積極的である。消極は單に正しきを守るに過ぎないが、積極は恩恵を施し、寛容の徳を進んで行ふべきを示す。

二つの道 十三—十四

十三 狭き門より入れ、滅にいたる門は大きく、その路は廣く、之より入る者おほし。十四 生命にいたる門は狭く、その路は細く、之を見出すもの少なし。

十三、狭き門、滅に到る門。ルカは十三〇—二十二に於てエルサレムに赴かるゝ途上の教訓であつたと傳へてゐる。而して救はるゝもの少なきや否やを質問したときの耶穌の答としてゐる。何れにしても眞正の謙遜、至誠、堅實の志操は守るに易くない。然し儀式的の恭謙、職業的の敬虔は行ふに易い。クリソストムは「門は狭けれども市内は廣し」と言つてゐる。「滅び」に就いてはピリピ一〇二十八、ヘブ十〇三十九、ベ後三〇七、十六參照。十四、生命に生る門は狭く云々。門は狭く、路細く、人跡稀れにして、容易に其の方向を迷ふ虞れあり。

偽預言者に対する警告 十五—二十三

十五 偽預言者に心せよ、羊の扮装して來れども、内は毒ひ掠むる豺狼なり。十六 その果によりて彼らを知るべし。茨より葡萄を、薊より無花果をさる者あらんや。十七 斯く、すべて善き樹は善き果をむすび、惡しき樹は惡しき果をむすぶ。十八 善き樹は惡しき果を結ぶこと能はず、惡しき樹はよき果を結ぶこと能はず。十九 すべて善き果を結ぶ樹は、伐られて火に投入せらる。二十 然らば、その果によりて彼らを知るべし。二一 我に對ひて主よ主よといふ者、ここそこは天國に入らず、ただ天にいます我が父の御意をおこなふ者のみ、之に入るべし。二二 その日おほくの者、われに對ひて「主よ主よ、我らは汝の名によりて預言し、汝の名によりて惡鬼を逐ひだし、汝の名によりて多くの能力ある業を爲ししにあらすや」と言はん。二三 その時われ明白に告げん「われ斷えて汝らを知らず、不法なす者よ、我を離れされ」と。

宗教は外形に其の證據を容易に現はし能はざる精神上に行はるゝ事實である。故に厚顔無耻良心を蹂躪して憚らず、神を詐つて畏れざる徒が、見様見真似を以て宗教の名を冒し、詐術を以て人を惑はさんとすれば、神を畏れ、良心に忠なる人々は驚き騒ぎて彼等の乗する所となり、

識らず知らず彼等の術中に落ち、遂に身を誤るに至る。彼の我のみ聖靈の恩化に浴したりと誇稱し、或は病者の果敢なき悶えを奇貨とし、其の弱はれる心に蝕ひ入りて、奇蹟を行ふ能力を有すなどと主張する輩、今に於て尙ほ世に多く見る所である。

然かも詐術は長く其の馬脚を包むを得ず。殊に耶穌の宗教は、諸徳の源たる基督を中心として天の父に事ふるもの、必らず禮拜者の日常に其反映を印せざるを得ない。彼等に由つて禮拜者の徳性に進歩ありしや。愛に於て更に深さを加へ來つたか。其の品性人格向上するを得たか。徒らに偏狭に、傲慢に、笑ふべく悲しむべく憫むべき狂愚の行動のみ多く現はるゝに至つたのではあるまいか。基督の眞の弟子は委細に本末を考究して、自己の立場を定めねばならぬ。

口に神の名を唱へ、基督を主と仰ぐかの如くに標榜すると、其の品性にして自我に固着し、更に愛の發達するものなく、謙讓の徳に於て秀ぐるゝなくば、神の國に適するの徒とは言ふを得ぬ。此れに欺かれざる用意あると共に基督者は自ら之に陥る危険を深く警戒せねばならぬ。

十五、僞預言者を心せよ。 基督教の僞の教師である。此れはパリサイ人の意味ではない。マタイ二十四〇十一―二十四に言ふが如きもの。容易に基督者たり得る廣き門を教ゆるの徒。多く

の人々に取つて道は餘りに狭きが故に易きを以て誘はんとするもの。羊の扮装したる狼の類教會に出入する處れあり。**十六、茨より葡萄を、薊より無花果を。** 彼等の品行に由つて豫言者の眞偽は明白である。茨と薊はヘブル六〇八にも關連して使用せらるゝ。茨には葡萄にちよつと似たる果實を結ぶ。果實、即ち其の生活と行爲であつて、思想ではない。若し教理の主張のみが其の果實と言はるゝのならば正統派を持するものは一人も滅びない譯である。**十九、總て善き果を結ばぬ樹。** パテスマのヨハネも斯く稱した。マタイ三〇十、ルカ三〇三―九。樹は其の根に由つて判斷せられず、其の朝、其の葉の繁茂で判斷せらるゝのではない。主たるものは果實である。弟子も亦職分の威嚴や社會的地位では審判に何等の効もない。其の事業、行動こそ審判の基礎である。**二十一、主よ主よと云ふ者。** 僞預言者の虚偽の信仰から出づる語。耶穌を己を主と唱ふよりも神の御意を行ふことの更に重要なるを主張せられた。南無阿彌陀佛の念佛さへ丹念に唱へてゐれば救はるゝのと大いに態度を異にせねばならぬ。此の「主」の尊稱はマルコ十六〇十九、二十、ルカに十一回、ヨハネに六回載せらるゝ。**二十二、其の日。** 審判の日。預言し、惡鬼を逐ひ。此所に豫言は將來の事を宣言するに非ず、基督の教理を宣傳する意。パウロは總て

の信者は豫言せねばならぬと言つた。コリン前十四〇一、三。審判の日には説教の能力や、悪鬼の驅逐や、奇蹟の遂行は其の功業として顧みられない。ルカ十〇二十参照。クレメントは「若汝我が胸に居りて尙ほ我が誠を守らずば、我汝を逐ひ出すべし」との御語を傳へてゐる。ヴァイスはギリシヤ語の福音の著はされた當時小亞細亞に僞信徒が多く存在したと傳へてゐる。二十三、不法を爲す者よ。律法を蹂躪するものよ。日本改譯は、前譯よりも英改譯よりも適切。ヨハ一三〇四「總て罪を行ふ者は不法を行ふなり。罪は即ち不法なり」とある。「我斷えて汝を知らず」とは「汝の口に我が名を唱へて汝の心は我を離る。我汝を我が弟子と認むる能はず」との宣言。クレメントは「然らば我等をして彼を主と稱ふるのみならざるやう努めしめよ。然らずんば我等の救に功なければ」と言つた。

結 論 二十四—二十七

二四さらば凡て我がこれらの言をききて行ふ者を、磐の上に家をたてたる悪き人に擬へん。二五雨ふり流瀝り、風ふきて其の家をうてど倒れず、この磐の上に建てられたる故なり。二六すべて我がこれらの言をききて行はぬ者を、沙の上に家を建てたる愚なる人に擬へん。二七雨ふり流瀝り、風ふきて

其の家をうてば、倒れてその顛倒はなはだしし。

二十四、我……擬へん。「斯くの如く汝は何れの人に似るべきかを示めさん」との意。岩を教會や基督と解するは當らず。ユウセピアスは「德行は家、信仰は岩、風雨暴風は各種の誘惑なり」と言つた。マタイの表現に由ると雨は家根、風は壁、洪水は礎を碎いたと言ふやうに對照されてゐる。賢者は堅固な基礎を擇び、愚者は基礎なき虚飾の家を建つ。

教訓の印象 二十八—二十九

二八イエスこれらの言を語りて給へるとき、群衆その教に驚きたり。二九それは學者らの如くならず、權威ある者のこそく教へ給へる故なり。

二十八、群衆その教に驚きたり。説教を終らるゝや、群衆は忽ち驚きと敬慕の念を言ひ現はしたほど深い印象を受けた。其の當初から既に聴衆は耶穌に捉へられたのである。二十九、學者の如くならず、權威ある者の如く。學者は曾つて傳へられた説話を引き、古への語なるが故に權威あるものとして教へたが、耶穌は彼等の理性と良心とに訴へつゝ自ら保有する權威を以て教へられた。

民衆は此れを何故とも知らなかつたが、唯だ何となく斯く感ぜらざるを得ざるものがあつた。

自 第八章

至 第九章

奇 蹟

山上の垂訓は種々の機會に於て授けられたる教訓が、其の中に加へて輯集せられてゐるやうに、此所に奇蹟の數々が連掲せらるゝ。神の國の君主にして斯くの如き精神、斯くの如き慈愛を其の人格に湛へられたりとすれば、何れは此れが外部に發露しない譯には行かぬ。マタイ記者が、其の胸中を披歴せられたる教訓を掲ぐるに次いで、其の人格より發露する能力に満ち、慈愛に漲る事業を掲ぐるは當然の用意と言はねばならぬ。基督の教訓は理想を前程に望んで偕に自ら進まんことを慫慂する先覺の警告ではない。人格其のものが、其の授けんとせらるゝ教訓の本體である。「その果によりて彼を知るべし」。道義の本源たり、權威を以て之を授けらるる基督なるべくば、其の居常自ら本質發露せざるを得ぬ。奇蹟は決して耶穌が神の子たるを證

明せんとする手段ではない。教訓に權威を附與せんとする證據ではない。然しながら此の教訓を授け、此の權威を保有せらるゝ基督には斯くの如き慈惠と、斯くの如き權能との其の人格より發露するは甚だ自然であると言はねばならぬ。

第八章

癩病者潔めらる 一一四

一 イエス山を下り給ひしとき、大なる群衆これに従ふ。ニ 視よ、一人の癩病人もここに來り、拜して言ふ「主よ、御意ならば、我を潔くなし給ふを得ん」三 イエス手をのべ、彼につけて「わが意なり、潔くなれ」と言ひ給へば、癩病だちに潔れり。四 イエス言ひ給ふ「つつしみて誰にも語るな、ただ往きて己を祭司に見せ、モーセが命じたる供物を獻げて、人人に證せよ」(マルコ一〇四十一—四十四、ルカ五〇十一)。

癩病は何れの國に於ても天刑病と稱せらる。其餘波實に九族に及ぶ。何人も此れを特殊の天罰に處せらるゝ罪過に因するものと思做すは自然である。不治にして不潔、然かも傳染と遺

傳の慘事を伴ふ。一次び此の病に冒さるゝものは、我を思ひ、親戚の將來を偲び、憂悶・痛苦、病患の外に負ひ難き苛責を擔ふ。其の病者が來つて謙讓の誠を盡して訴ふ。何人か臉の暖まるを感じざるものがあらうか。況んや慈愛の化身たる耶穌に於てをや。其の御意と共に自ら御手が彼の頭上に伸ぶるは止むなき仕儀と謂はねばならぬ。斯くて彼の祈禱は即時に應ぜられた。絶望の憂愁苦惱を抱くものは正に此の御意を心に留めて仰がねばならぬ。

一、耶穌山を降りしとき云々。耶穌は山を降つてカペナウンの方へ赴かれた。然し此の以後の出來事が即刻引き續き起つたものと思つてはならぬ。(他の福音書参照)。二、癩病人御許に來り云々。癩病は其の發端が不意に起るため殊に罪に原因するものと考へられた。此の病者は全身に腐敗が及んでゐた。(ルカ参照)。「主よ」、未だ眞に基督を認めてではない。「ラビ」の意に用ゐたるもの。彼は耶穌の能力を疑つたものではない。「御意」なるや否やを謙讓より危んだ。手を伸べ、彼につけて。御意の傾倒せらるゝや御手が自ら伸びて同情の誠が表はれた。我が意なり。親み深き決然たる調子にて仰せられたもの。何れの福音書も注意して載せてゐるを見よ。結果は拭ふが如く、全く患部が消滅した、四、モウセが命じたる獻物。利十四〇四十参照。己を祭司に見せ、人々に

置せよ。基督は決して古への律法を無視せざるを祭司及び弟子たちに示せ。然かも民衆が奇蹟に驚いて信仰に入るを慾せられざるが故に公に宣傳するを禁ぜられた。

慕せられたる信仰 五—十三

五イエス、カペナウムに入り給ひしとき、百卒長きたり、大請ひていふ「主よ、わが僕、中風を病み、家に臥しゐて甚く苦しめり」セイエス言ひ給ふ「われ往きて醫さん」八百卒長「たへて言ふ」主よ、我は汝をわが屋根の下に入れ奉るに足らぬ者なり。ただ御言のみを賜へ、さらば我が僕はいえん。九我みづから權威の下にある者なるに、我が下にまた兵卒ありて、此に「ゆけ」と言へば往き、彼に「きたれ」と言へば來り、わが僕に「これを爲せ」といへば爲すなり」十一イエス聞きて怪しみ、從へる人々に言ひ給ふ「まことに汝らに告ぐ、斯る篤き信仰はイスラエルの中の一人にだに見しことなし。十二又なんぢらに告ぐ、多くの人の、東より西より來り、アブラハム、イサク、ヤコブささもに天國の宴につき、十二御國の子らは外の暗に逐ひ出され、そこにて哀哭・切齒することあらん」十三イエス百卒長に「ゆけ、汝の信すること汝になれ」と言ひ給へば、このとき僕いえたり。(ルカ七〇一—十)

天刑病として他に忌まれたる患者に慈愛の御手を伸べさせ給へる耶穌は、今は異教徒にして

異邦人なる百卒長を憐み給はうとする。他に排斥せられ、嫌悪せられ、頼る邊なきものこそ耶穌が先づ以て其の御意を傾けらるゝ對象である。

更に其の弱者、後進に對して眞に衷心よりの愛を瀦ぎ、之を貴び尊んずるものは耶穌に對して恭謙、其の真相を直觀するの能力が與へらるゝこそ不可思議である。下民に伍するは自己の價値を存するが如くに思做す傲慢な高官貴族は唯だ自己の安全を期すればこそ忠君を高唱し、之を標榜すれ、其の行動に誠意なきは世上多く見らるゝと同様、精神的にも亦漫りに他を瞥視し、有るか無きかの德行を誇負して傲然たる輩には基督は遂に發見せらるべくもない。

後進、弱者に對して同伍に立つ謙讓の徳あるものは、上長に對して又恭敬の誠を盡す人物である。此の誠あつて始めて人と成り給へる神、基督の權能と慈愛とは發見し得らるる。

五、耶穌カペナウンに入り給ひしとき、カペナウンの市内にて起る意。百卒長。一團の六分の一を卒ゆるもの。百人の隊長、日本の大尉即ち略中隊長に相當せん。此の人はパレスチナに生れてロマ軍隊に入りしものならん。ルカに由れば異邦人にてユダヤ人中に人望ありしものなりと言ふ。耶穌が軍務を否定せられなかつたことが見らるゝ。六、我が僕。此所に言ふ「僕」の語は「我

が少年」の意義をも含む。時には「我が息子」の意味に用ゐらるゝ。此の百卒長に取りて愛惜措く能はざりし僕であつた。中風。多くは甚だしき苦痛なきも、筋肉の收縮を伴ふときは耐難き苦痛を訴ふ。此の種の病と見ゆ。七、耶穌言ひ給ふ。耶穌の御語は彼の豫期以上であつた。故に彼は平生よりユダヤ人が異邦人の家に入らざる態度を知つて驚きつゝ、異邦人當然の立場を守りて謙遜に其の信念を告白した。八、御言のみを賜へ。自己の部下を率ゆる經驗よりして彼は耶穌が超自然力を自由に驅使し賜ふべきを信じた。十、耶穌聞きて怪しみ。多くの人が耶穌の癒治の能力をすら疑へる場合、イスラエル以外に斯くの如き篤信のものあらんとは、驚異に値ひした。耶穌は之を怪しみ且つ嘉せられた。十一、多くの東より西より來り。此の御語こそ教會に異邦人が續々加はつて來つたとき新たな意義が生じた。ユダヤ人は異邦人と偕に座するを屑としなかつたけれども、斯くの如く侮蔑せられた人々が、神の國の子供として最高の地位を占むるに至るのである。十二、外の暗に逐ひ出され。ユダヤ人は天國を以て神の選民たる彼等が古への聖賢と共に宴筵の歡樂に與かる個所と心得、異邦人は戸外の闇黒の中に放棄せらるゝものと解した。耶穌は其の教理を捉へて彼等の迷妄を打破し、其の審判の基礎を道德に置かるゝ。(マ

タイ七〇十九参照。

ヘテロ姑癒さる 十四—十七

十四イエス、ベテロの家に入り、その外姑の熱を病みて臥したるを見、十五その手に觸り給へば、熱去り女おきてイエスに事ふ。十六夕になりて、人々、悪鬼に憑かれたる者をおほく御許につれ來りたれば、イエス言にて靈を逐ひいだし、病める者をこころよく醫し給へり。十七これは預言者イザヤによりて『かれは自ら我らの疾患をうけ、我らの病を負ふ』と云はれし言の成就せん爲なり。(マルコ一〇二十九—三十一、ルカ四〇三十八、三十九)

耶穌の公生涯に入らるゝや、私の時間なく、隱家は發見せられず、疲労困憊、休養のために入られたる旅宿も亦神と人とに事へらるゝ活動の舞臺たらずんば止まず、耶穌は即刻之に従事せらざるを得なかつた。

其の愛嬌を耶穌に献げたる家庭は、今や無限の祝福を被る豫表を明かに示さるゝこととなつた。家を蓋ふ不安と苦悶とは耶穌の來着と共に名残なく一掃せられた。

十四、ベテロの家に入り。ベトロとアンデレはベテサイダの人であつた。此の頃既にカペナウ

ンに居を移したるか、或はベテサイダはカペナウンの接續の場末なりしか。或る人はベテサイダはカペナウンの舟着場なりしと傳へてゐる。熱を病み臥しる。此の句は或る期間の病患の意を示す。或る註釋者は其の症狀はチプスの特質があると言ふ。十五、熱去り、起きて。其の癒治が急にして完全なるを示す。此れは奇蹟の性質を證するものである。十六、夕になりて云々。何れの福音書にも此の群衆の糞り來た狀を描いてゐる。十七、イザヤによりて。賽五十三〇七。他の福音書に由れば此の日は安息日なりしと言ふ。『マタイ記者は耶穌が單に病を癒されたるのみならず、此れに御意を用ひ給ふことを特に傳へんとしたものと思はるゝ。』

弟子たるの覺悟 十八—二十二

十八さてイエス群衆の己を環れるを見てさもに彼方の岸に往かんことを弟子たちに命じ給ふ。十九一人の學者きたりて言ふ『師よ何處にゆき給ふとも、我は從はん』二十イエス言ひたまふ『狐は穴あり空の鳥は壙あり、然れど人の子は枕する所なし』二十また弟子の一人いふ『主よ、先づ往きて我が父を葬らるゝこと許したまへ』三十一イエス言ひたまふ『我に從へ、死にたる者にその死にたる者を葬らせよ』

世に安價の歎美者あり、物の真相に徹せず、唯だ外面を撫てて感激し、直ちに之に雷同する。然かも斯くの如き人々は終生、基督の如き深玄、遼遠なる問題を供提せらるゝ眞精神に到達するを得ず。基督の愛に感激したりと稱し、あわたくしく立ち騒ぎ唯だ賑かに狂奔し、其の結果の落ち行く所に關心せず、或は安價なる矯風運動を以て宛然、基督の精神盡きたる如く、深刻、永遠なる靈性の問題の如きは社會に無用の閑事實の如くに取扱ふ人々である。同じく斯くの如き事業に安價なる讃辭を獻げ、基督の宗教を以て此れに盡きたる如く思做す人々である。斯の種の輩は耶穌の取つて以て弟子とするを欲せられざるかに察せらるゝ所である。

更に他の種類の人々がある。衷心深く耶穌の教訓行動に感激するも、生來の怯懦より、或は周圍を怖れ、或は前途を危み、頻りに口實を設けて、良心の囁きを隠蔽し、起つべき時に起たざる徒輩である。前者と等しく耶穌は之を貶けられた。然し此の種の人々は耶穌の鼓舞に由つて漸く力を得、此れに従ふの日なしとは言へぬ。前者より稍や望ありと言ふべきであらう。

十一、弟子たちに命じ。群衆に惱まれたる耶穌は此れを免れんとして旅立たれた。此所に「命ず」とは強きに失す。然し今や耶穌に對して弟子たちは恭順其の言はるゝ所に奔走することと

なつた。十九、一人の學者。何れも耶穌に反對したるに此の人は其の感化の下に來つた。恐らく山上の垂訓の聽衆中にも加はつてゐたであらう。何處へ行き給ふとも、耶穌の智慧と道德的熱心及び勇氣に感激して斯く言へども、耶穌は其の階級、其の人を信任せられなかつた。宗教を生活の手段と心得る人々が基督を信するに至つても、其の眞に徹底するものは甚だ少ない。耶穌は利厚なる眼光を以て其の意中を觀破せられた。二十、人の子は枕する所なし。但仁理七〇十三に「人の子」をメシヤ即ち救主の稱號として掲げらるゝ。故にユダヤ人には「メツシヤ」の意義なること容易に知られた筈。然かもメツシヤは最高の地位に陞らるべきものと期待せられたのであつて枕する所もなきものとは意表の外であつたであらう(エペソ一〇三)。二十一、往きて。は去つてである。二十三、死にたる者。神の國の新生命を受けざるもの。其の弟子には兄弟ありて耶穌に従ふことを欲せざりしものならん。人生最も大切なる義務も王事の爲めには省みる豫猶がない筈である。

湖上の暴風 二十三—二十七

二三 かくて舟に乗り給へば、弟子たちも従ふ。二四 視よ、海に大なる暴風おこりて、舟、波に蔽はるるばかりなるに、イエスは眠りの給ふ。二五 弟子たち御許にゆき、起して言ふ「主よ、救ひたまへ、我らは亡ぶ」。二六 彼らに言ひ給ふ「なにゆゑ臆するか、信仰うすき者よ」乃ち起きて、風と海とを禁め給へば、大なる風となりぬ。二七 人々あやしみて言ふ「こは如何なる人ぞ、風も海も従ふさは」。

(マルコ四〇三十五—四十一、ルカ八〇二十二—二十五)

奇蹟論として最も説明するに困難なる事件は是れである。

然かも耶穌にして若し神の家庭の内苑たる此の地上に生存しつゝ、自然界の現象に畏懼狼狽せられたりとすれば、天父の攝理に安堵せらるゝの實、何所にあらうか。耶穌は自然界の造次顛沛の出來事も皆天父の御手より漏るゝことなきを確信し、其の御意を天父に於て安ぜられた。嘗に安んぜらるゝのみならず、是れを以て其の榮光を顯はす機會に利用せられた。

自然界と人事とは誠に密接なる關係を有する。大洋の一粟に若かさる人間の智識を以てすら、尙ほ能く自然界を制御する。翼なくして大空を飛び、腮なくして深海を航する。皆自然法を利用する智識を以て自然界を制御するのである。

道德律の人事に於ける自然法以上の能力を發揮するを得る。今日の人の企て及ばざる道德的權能を有せば智識を有するに勝る驚異の行動を爲し能はざる理由がない。唯だ斯くの如く類例を會つて求め得ざるがために世は其の無双の出來事を見て、信を繋ぐに容易ならざるのみである。

耶穌は罪なき異常の人格としても、科學的智識の異常なる人物に勝さりて自然界を克服する權能を有せられたのである。

人事の凶變、其の悶、其の憂の自然界の現象に因するもの甚だ深い。耶穌にして此れに對して無能ならば、其の救主の事業は半ば破らるゝ。耶穌は自然を克服する權能を有し給ふ。感謝すべきかな。

二十四、海に大なる暴風。ガリラヤ湖に時々起る。琵琶湖にて學生の短艇が怒濤に翻弄せられ、汽船に救はれ、九死に一生を得たる例、往々傳へらるゝ。沉んや陸地と高低甚だしきガリラヤ海には屢斯くの如き變化を生ずる。不意に急激なる暴風起り、狂瀾怒濤舟を包んだ。眠り居給ふ。耶穌は深く眠られた。耶穌の睡眠を記すは此所のみ。二十五、主よ救ひ給へ。自己の庭園か工場

の如く親しく知れる湖上に、幾多の経験を重ねたる弟子たちが恐怖し狼狽した。マルコには「師よ」とあり、ルカには「主よ」とあり。二十六、信仰薄き者よ。臆病者よ、汝等の信仰何所に在りやの意。信仰は、信任、信頼の意。此の吐責は自己の不動の態度を示しつゝ、親切を含めての警告である。風と海とを。勿論風だけに鎮まらば波は収まる譯であるが、然し此れは詩的な表現。二十七、人々怪しみて。舟上の弟子たちの事で此れを傳へ聞いた人々の意ではないとヴァイスは言ふ。こは如何なる人ぞ。此れが弟子たちの耶穌に信頼するに至つた大なる行動であつた。彼等が経験から到底遁るべくもなしと覺悟した彼等の熟知せる湖上に於て斯くの如き偉大な権能が示されたのである。故に驚き畏れた。

ガダラ人の地方にて 二十八—三十四

ニイエス彼方にわたり、ガダラ人の地にゆき給ひしとき、悪鬼に憑かれたる二人のもの、暴はり出でたりて之に遇ふ。その猛きこと甚だしく、其處の途を人の過ぎ得ぬほどなり。ニル視よ、かれら叫びて言ふ「神の子よ、われら汝の何の關係あらん。未だ時いたらぬに、我らを責めんして此處にきたり給ふか」十遊にへだたりて多くの豚の一群、食むたりしが、三悪鬼ども請ひて言ふ「もし我

ら逐ひ出さんとならば、豚の群に遣したまへ」三彼らに言ひ給ふ「ゆけ」悪鬼いでて豚に入りたれば、視よ、その群みな崖より海に墮け下りて、水に死にたり。三飼ふ者ども逃げて町にゆき、凡ての事と悪鬼に憑かれたりし者の事を告げたれば、三視よ、町人こそりてイエスに逢はんさて出できたり、彼を見て、この地方より去り給はんことを請へり。

(マルコ五〇一—二十、ルカ八〇二十六—三十九)

人は縦んば其の愛の盡きざる間にも、能力と智識とを缺く。斯くて止むなく之を放棄せざる可らざる境遇に立つ。空しく病兒の顔を打ち眺めつゝ途方に暮るゝ兩親あり、狂へるものを拱手して打ち守る外なき無力の友、如何に焦慮すれども施すべき術はない。故に耶穌あつて始めて慈愛も友情も其の名残なき解決は與へらるゝ。耶穌を迎へ、耶穌に訴ふることに、これのみぞ無力の人間が盡くし得る最後にして最高の道を得る所以である。

ガダラの人々は狂へる同郷のものを如何とも爲すことが出来なかつた。然るに彼等は求めずして全市内を戦慄せしめた凶暴なる病者を耶穌に由つて癒さるゝを得た。然かも彼等の無情なる、此の大いなる憂を除かれたるを餘所に、僅なる資産の失はれたるにの

み心を濺ぎ、此の全市を祝福せらるべき救主を拒絶して、復た得べからざる機会を逸し去つた。身邊を騒がす強盜、博徒の類を耶穌に救はれ、大いなる祝福を與へられつゝ、偏見に閉され、我執に固着し、終に大いなる感化の及ぶべき耶穌の事業を其の村町より驅逐し去るものを我等は今の世に於ても見るのである。

此の事件に由つて耶穌が私有財産を失ふを許容せられたりとの攻撃を試むるものを往々認めらるゝ。然かもそれは人間の價値を認識せざる財寶崇拜の結果のみ。人間一個の價値大いに勝れる今日、何人か二千の豚と一個の人間とを比較して其の輕重に惑ふものがあらうか。一個の人間の行先不明のために政府は驅逐艦をすら派遣して搜索せしむるではないか。

二十八、ガダラの地に行き給ひしとき。耶穌は湖の東岸に渡られた。ガダラはマルコ、ルカは何れもガラセネと傳へてゐる。ペリアの首府ガダラと言ふのがあつたけれども、それは湖邊より遙か奥地で、此の物語の舞臺と認められない。若し此の地方が其の首府の管轄の下に在つたとすれば、「ガダラ人の地」と稱せらるゝに不思議はない。惡鬼に憑かれたる二人の者。マルコ及ルカは一人として描いてあるが、マタイは二人と言つてゐる。此れには諸説があるけれども、アウガ

スチンは二人のうちの一人が最も狂暴を極めてゐたので他の福音書には其の主要人物を描いたものであると解した。他の所にマタイは「二人の盲者」と言つてゐる所に他の福音書は一人として傳へてゐる。二十九、我等と汝と何の關係あらんや。「我等と汝と何等戦端を開くべき理由がない」の意。狂者は自ら惡鬼が憑けりと信じ、其の惡鬼の語として叫んだもの。斯くの如き狂者の常態である。「生醉本性違はず」、人は狂へるとき却つて其の本性を發揮することがある。利害を打算して己を欺き隠蔽する能を缺くからである。「神の子よ」、メツシヤに對する希望が既にガダラ地方にまで廣つてゐた證據である。デキッド・スミス博士は其の「彼の肉の目」——基督傳の中に、「彼はカペナウンにも渡つたことがあつたに相違なく、其の説教を聴き、又奇蹟を目撃したことであらう」(原書一九三ベエジ、拙譯「受肉者耶穌」上卷三七四ベエジ)と、未だ時いたらぬに、指定せられたる審判の日を言ふ。豚に入りければ、豚に移る惡鬼を目撃したるに非ず、豚の狂ひ走るを見て斯く認められたもの。

此の物語は「狂氣」即ちマニアの一種で、斯くの如き病の多くは不潔の罪より來る。故に罪と病とに大いに關係あり。尙ほ豚の死滅に就いては神は神秘の目的のために戦端其の他に由りて

數千萬の人の死をすら容さる。此所に豚の一隊の滅亡に由つて道德上不朽の教訓を遺さるとカアルは言つてゐる。三十四、去り給はんことを請へり。此の人物に留まられては此の上如何なる騒動より損害の生ずるやも知れずと恐怖してであるとマイヤアは言ふ。

尙ほ豚の狂奔を氣候の變化のため一匹が狂つたため全群が驚き騒いだと解する人もある。

第九章

靈性を先づ救ひて 一一八

一 イエス舟にのり、渡りて己が町にきたり給ふ。二 視よ、中風にて床に臥しなる者を、人々もそこに連れ來れり。イエス彼らの信仰を見て、中風の者に言ひたまふ「子よ、心安かれ、汝の罪ゆるされたり」三 視よ、或る學者ら心の中にいふ「この人は神を潰すなり」四 イエスその思を知りて言ひ給ふ「何ゆゑ心に悪しき事をおもふか。五 汝の罪ゆるされたりと言ふと、起きて歩めと言ふと、孰か易き。六 人の子、地にて罪を赦す權威あるこそを汝らに知らせん爲に」——ここに中風の者に言ひ給ふ——「起きよ、床をとりて汝の家にかへれ」七 彼おきて、その家にかへる。八 群衆、これを見ておそれ、斯る能力を人にあたへ給へる神を崇めたり。〇（マルコ二〇一—二十一、ルカ五〇十八—二十六）

暴風を鎮め、狂者を助けられたる耶穌は愈進んで其の出現の天命を啓示し來らる。自然より更に貴き人間の肉體に及び、更一層貴き人間の靈性に其の超人の御能は及んだのである。科學者は或は自然界を制服し得べく、醫師は肉體の病を癒すを得ん。然るに靈性の疾患に至つては、如何なる人間も等しく同病者のみ。到底之を救ふ由はない。孔子は曰ふ「徳の脩らざる、學の講せざる、義を聞いて徒る能はず、不善改むる能はず、是れ吾が憂なり」と。自ら此の憂あり焉んぞ他を顧みる餘裕があらうか。古往今來人類にして人類の罪を赦し得るものは耶穌の外にはない。

得意成功は往々人をして其の本性を失はしむる。之に反して失意逆境は人をして自己を正視せしめ、其の本性に歸住せしむる。従つて平生を反省して其の罪過を發見し、遂に悔恨の情に堪へ能はざらしむる。勿論「君子は坦かに蕩々たり、小人は長へに戚戚たり」で、省みて心に疥しき所なくば逆境にも心を病まざるを得る。然し病患の如き、明かに其の原因す所が自己の不覺と不節制にあるを知りては、正鵠なる心を有するものならば、其の肉の苦患よりも寧ろ自己の罪過に煩悶、苦惱せざるを得ないのである。肉體の病患は或は醫療の術もあらん、此の良心

の苛責より来る憂愁、苦患は永遠に自己の力を以て除かるべくもない。此れを抱擁し、此れに蝕食れつゝ、墓に赴く外はないのである。

耶穌は人生に於ける此の絶望の境界より、人を救はんがために出現せられた。罪を赦さるゝ基督の出現に由つてのみ人生は始めて最後の解決を得るのである。

一、己が町に渡り給ふ。カペナウンの意。二、中風にて。此れは前に言ふものと異り、苦痛の輕きものなりしと見ゆ。「子よ」との御語より此の患者は少年であつたと思はるゝ。従つて其の罪も、特に不潔、不品行等に耽つたためではなかつたであらう。罪の意識は其の人の品性の如何に由る。客觀的の輕重に關係は薄い。心安かれ。氣を取り直せ。三、或る學者の中に言ふ云々。彼等は耶穌が罪を赦すと仰せられたのを、虚偽の宣言だと心得へた。内觀力なきものには耶穌の品性も御語も意味が徹しない。故に耶穌は起つて歩めと言ふ以上「罪を赦す」は不可能であると仰せられた。而して内的罪惡の赦された實證は起つて歩むを得たことに由つて與へられた。「汝らに知らせん爲に……中風の者に言ひ給ふ」と其の光景活躍してゐる。六、床をとりて……歸れ。日本の如く床は折疊んで、所用の時に之を展ぶ。寢寢産の類。八、群衆……畏れ。學者の説に暗に

共鳴するやうな心を有してゐたものたちは恐怖した。

取税人の宴筵 九—十三

九イエス此處より進みて、マタイといふ人の收税所に坐しをるを見て「我に従へ」と言ひ給へば、立ちて従へり。十家にて食事の席につき居給ふとき、視よ、多くの取税人・罪人ら來りて、イエス及び弟子たちと共に列る。十一マリサイ人これを見て弟子たちと言ふ「なに故なんぢらの師は、取税人・罪人らと共に食するか」十二之を聞きて言ひたまふ「誰かなる者は醫者を要せず、ただ病める者、これを要す。十三なんぢら往きて學べ「われ憐憫を好みて、犠牲を好まず」とは如何なる意ぞ。我は正しき者を招かんぞにあらで、罪人を招かんぞて來れり」(マルコ二〇三—十七、ルカ五〇二十七—三十二)

愈進んで基督出現の使命は明かにせらるゝ。我等此所に驚くべき出來事に接する。「性は本善、性相近く、習へば相遠し」トルストイ、ドストウエンスキイが讀者を泣かしむる聖愛は源を此所に發してゐる。世に棄てられたる廢物の間に、尙ほ神の子の影鮮やかなるを認められたるものは耶穌である。此の慧眼人生に徹してこそ、一人の共鳴者を其の膝下にすら發見する能はざるに、十字架上に其の身を殺す信任と慈愛とは生るゝ。耶穌は人を分つに其の境地を以て君子

とし小人とする偏見を有せられなかつた。耶穌の眼を留めらるゝは、大盜も尙ほ悶々の情ある罪過に對する悔恨の念おもひのみ。感謝すべきかな。

蓋しマタイは山上の垂訓に痛くも心を打たれたる聽衆の一人であつたらう。天刑病者として全く世に排斥せられたる癩病人すら、其の御衣の袖に縋つて恩寵に浴した。祖國の民よりして人外に置かれたる異邦人にすら、其の悲痛の訴へには耳を藉された。取税人、賣國奴として白日同胞の前に起ち能はざる此の罪の身を思ひ、而してパリサイ派に見る能はず、バプテスママのヨハネに認む能はざる耶穌の寛宏、深玄の慈心を讀みつゝ、心の躍るものがなかつたであらう。敬慕、欣仰しつゝ尙ほ境遇を耻ぢ私かに志を運ぶ身に、耶穌は忽然其の執務の面前に現はれ、「我に従へ」との貴くも有り難き恩命を下さるゝ。彼が感激して即時に之に隨從したのも道理である。

感激の誠は其の同類に對する訣別の宴となつて現はれた。同族同類に對し、此の未だ曾つて望まらるべくもなかつた吉祥を發表して以て、水平の恩寵を辱ふするに足る所以を示さずして止むを得るであらうか。宴筵の間に、此の恩寵に漲る主の挺身の慈愛は益明かにせられた、彼が驚

喜の状は察するに難くない。

九、マタイと言ふ人の收税所に産し居るを見て。マタイと此所に言はるゝも、マルコとルカとはレビと言つてゐる。恐らく基督に従つて後マタイと稱したものであらう。收税所は即ち税關である。カペナウンは國境に近く、エジプトとダマスコの商隊の驛路に當り、繁忙な役所であつたに相違はない。立ちて従へり。召命に驚きつゝ即刻從隨した意。十、家にて。ルカ及びマルコは此レビの家であつたと言つてゐる。觀よ、多くの取税人、罪人ら來りて。ブルウスは此の召命は此の宴會の序幕で、眞の意義は此の宴會にあると言つてゐる。耶穌が世に侮蔑せらるゝ人々の群に其の使命を遂げんとして先づマタイを召され、彼を中心として其の階級の多數のものに交を結ばるゝ計畫であつた。十一、パリサイ人を見て。招かれざるに彼等は見物に來た。正客主人側の傍らへも宴席に自由に他の者の入込みて、客や主人と語を交はすはユダヤの習慣であつた。十二、健かなるものは云々。健かなりと思ふもの意。健なりと自ら思ふものは健ならず。耶穌は反語を用ゐられたものである。後節の正しき者も亦、自ら正しとなすもの意。不健全を意識するものにして始めて醫師の要求を有する。十三、我憐憫を好みて犠牲を好まず云々。何西亞六

○六よりの引照。學者たちが好んで引用したる句。ホゼアが當時の愛なき不眞面目の形式主義者に對して彈劾したる言。罪人を愛することを律法を完ふする所以である。招かんとて。宴席に招待する意。天國の歡樂に召さんがための意ならん。

斷食問題 十四—十七

十四 爰にヨハネの弟子たち御許にきたりて言ふ「われらとパリサイ人は斷食するに、何故なんぢの弟子たちは斷食せぬか」十五 イエス言ひたまふ「新郎の友たち、新郎と偕になる間は、悲しむことを得んや。されど新郎をさらるる日きたらん、その時には斷食せん。十六 誰も新しき布の裂を舊き衣につぐことは爲じ、補ひたる裂は、その衣をやぶりにて、破綻さらに甚だしかるべし。十七 また新しき葡萄酒をふるき革囊に入ることは爲じ。もし然せば囊はりさけ、酒ほどばしり出でて、囊もまた廢らん。新しき葡萄酒は新しき革囊にいれ、斯て爾ながら保つなり」

(マルコ二〇一八—二二、ルカ五〇三三—三九)

十四、我等とパリサイ人は斷食するに。耶穌も其の弟子たちも斷食を守られなかつたことは此の句で明かに知らる。弟子たちは六〇十六の理由と目下主と共にあつて幸福に浸されたるが

ために斷食をしなかつた。十五、新郎の友たち。新婦の家庭より新婦を導いて新郎の家庭に赴く一團。中途に音樂に合せて喜び歌ひ踊りつゝ、街路を通過する慣習ありしと傳ふ。婚筵の準備せらるゝ席、即ち新婦の未來の家庭へ導き行く華美と歡喜とを示す。尙ほユダヤにては新婦を教會又は集會の譬とした。然らば耶穌は自ら基督教會の新郎を以て譬へられたるものであらう。とらるゝ日來らん。耶穌は始めて己が死を豫告せられた。その時斷食せん。心から自然に發する斷食である。愛兒の死の床にあるを看護し、又其の死に會はば、食慾全く失はる。基督と偕なる間は何人にも悲痛なし、一次び基督の姿を失はば、食慾も感ぜられざる憂愁は襲ひ來る。斷食は形式に行はるべきものに非ず。十六、誰も新しき布を。恐らく此れは婚筵の想像より聯想せられたものならん。代々の婚衣が仕立直して使用せられたるもの。新たな布片を以て古き婚衣を修善するとも用に堪へず。古き衣はユダヤの律法。基督教をユダヤ教の補とはされない。十七、新しき酒。此れも婚筵のために新しき酒の蓄へを行ふ。パレスチナ地方では木材乏しく桶なし。革囊に酒を蓄ふ。自由を有する新たなる教は舊形式に收まるべくもない。新たなる神の國は此れに適したる形を以て發展すべきである。

ヤイロの娘の癒治

附 血漏の婦 十八—二十六

十八 イエス此等のことを語り給ふとき。視よ一人の司きたり、拜して言ふわが娘いま死にたり。然れど來りて御手を之におき給はば活きん。十九 イエス起ちて彼に伴ひ給ふに、弟子たちも從ふ。二十 視よ、十二年血漏を患ひぬたる女、イエスの後にきたりて、御衣の總にさはる。二一 それは御衣にだに觸らば救はれん心の中にいへるなり。二三 イエスふりかへり、女を見て言ひたまふ「娘よ、心安かれ、汝の信仰なんぢを救へり」女この時より救はれたり。二三 斯てイエス司の家にいたり、笛ふく者と騒ぐ群衆を見言ひたまふ、二四 「汝は死にたるにあらず、寢れたるなり」人々イエスを嘲笑ふ。二五 群衆の出されし後、いりてその手をさり給へば、少女おきたり。二六 この聲聞あまれく其の地に弘まりぬ。(マルコ五〇二十二—二十四、ルカ八〇四十一、二、四十九—五十六)

歡樂の宴筵は立所に悲痛なる舞臺へと轉ぜらるゝ。宴席に訪れ來れる會堂の司は愛兒が死に頻して居ることを訴へて耶穌の救を求めた。人生は歡樂の壁一層には悲愁が配列せらるゝ。耶穌は此れを聽かれては焉んぞ遍疑せられやう。即刻起つて彼の後に從はれた。要求の切なる所、

即ち耶穌の喜び應ぜらるゝ所である。「叩けよ、さらば開かるゝことを得ん」。

其の訴へに應ぜんとして赴かるゝ途上、更に久しく恥づべき病に苦しめる一人は窃かに耶穌の背後より御衣の裳に觸れて、癒されんことを計畫した。彼女は公然と其の身を衆人の中に露はすを恥ぢ、且つ治療者其の人も知られざる間に恩寵のみ盜まんとしたのである。世には神の恩寵を窃かに盗み、其の資質の道にかなはざる弱點のみを癒されんことを志す求道者がある。然し此の婦人には尙ほ信仰があつた。彼女は耶穌の能力を信じた。尙ほ其の恩寵を信じた。耶穌は其の信仰を嘉賞せられて、彼女の要求の如く病を癒しつゝ、尙ほ其の窃かなる信仰を公然告白せしめ、暫に病を癒さるゝのみならず、彼女に對して深甚の慈愛と同情とを有せられ、且つ彼女の信仰を嘉賞せらるゝ所以を明かに彼女に告げて以て彼女の胸に不朽の印象を刻まれた。

斯かる間にヤイロの娘の病は俄かに進んで遂に斃れた。父親を始め家族の悲歎思ふべしである。然し救ふべきを約して訪れ給へる耶穌の保證は確實である。一次び耶穌の保證を得、其の同情を得たるものは、途上に如何に障礙ありとも、其の事情の訴へたる當時に比して如何に惡

化せりとも失望すべきではない。人力の全く盡きたる所に、耶穌には尙ほ手段があつた。斯くて、御手を觸れ給へば忽ちに癒へた。

十八、一人の司。マルコ及びルカに由ればヤイロと稱する人物であつた。我が娘。我が稚なき娘〔マルコ〕。十二歳ほどの一人娘〔ルカ〕。今死たり。『いまはの際なり』〔マルコ〕。死ぬばかりなる故なり〔ルカ〕。十九、耶穌起ちて。十節に接す。宴筵、斷食、死去、是れぞ即ち人生である〔ブルウス〕。二十、耶穌の後に來りて。婦の羞恥からか、長き病に氣もくじけてか、或は律法に由りて穢を憚りてか、耶穌の前には現はれ得なかつた。御衣の端。ユダヤの上衣は四角の布に誠を思ひ起さしむる總を吊した。二十一、それは御衣だに觸らば救はれん云々。耶穌には隠れて私に癒されたしての念がつかとは思ひ難い。然し信仰と迷信と狡猾とが含んでゐる。『心の中にいへるなり』とは心のうちで繰返して考へた意。二十二、娘よ。此れは成年の婦に用ゆる娘の語。汝の信仰汝を救へり。耶穌の同情ある眼中には迷信も狡猾も認められず、信仰のみが認められた。二十三、斯くて耶穌司の家に至り。マルコとルカは此の時始めて少女の死を掲げてゐる。『笛ふく者』とはマタイのみが言ふ。然し何れも其の悲愁の狀を描く。皆其の死を働けたが、耶

穌が『眠つてゐる』と仰せられたので一同は嘲笑した。二十五、舞臺。同情もなきわいわい連が病室までも闖入してゐた。二十六、其の地。國中に弘つた意。ヴァイスは此の著者がバレッチナの住民ならざりし故に斯く稱すと言つてゐる。

盲者の開眼 二十七—三十一

二七 イエス此處より進みたまふ時、ふたりの盲人さげびて『ダビデの子よ、我らを憐れたまへ』と言ひつつ從ふ。二八 イエス家にいたり給ひしに、盲人も御許に來りたれば、之に言ひたまふ『我、この事をなし得ざ信するか』彼等いふ『主よ、然り』二九 爰にイエスかれちの目に觸りて言ひたまふ『なんぢらの信仰のこころ汝らに成れ』三十 乃ち彼らの目あきたり。イエス嚴しく戒めて言ひたまふ『慎みて誰にも知らすな』三一 されど彼ら出でて、徧くその地にイエスの事をいひ弘めたり。(他の福音書になし)

大いなる奇蹟を以て家人を慰めて出で給ふや、耶穌は再び切實なる叫びを聽き給ふた。二人の盲者が耶穌の過ぎ給ふを知り、大聲に憐憫を請ふて止まなかつた。彼等の眼の不自由は彼等の生活に對する脅威であつて、恐らく路傍に物乞ひて其の日を暮せる人々であつたであらう。彼等は『ダビデの子よ』と叫びつゝ訴へた。肉眼の暗黒は往々にして靈眼を光明に誘ふ。ミル

トンは世俗の物質に全く窮乏し、齡漸く傾きて、其の眼の明を失ふや、其の靈界に思ひを馳すること愈深く、斯くて始めて『失樂園』の雄揮縁大なる不朽の詩を産んだのであつた。浮薄なる人々に取りては眼に世上の榮華榮耀を目撃するは、大いなる誘惑であつて、遂に其の物質の根源を遺忘し、斯くて最高の本能之がために遮断せられて發達せざるに終るのである。窮乏は浮薄なる人性のためには祝福である。止むなく其の活路を熱求するに至るからである。肉體の重要な機關に缺くる所あるは却つて幸福である。憂悶の極は遂に精神の缺陷をも發見し、延いて永遠の救ひを求むる便を得るからである。

耶穌は彼が絶叫を容易に聽取せられなかつた。蓋し熱求するものへの恩寵は愈深刻に味はるるからである。輕々しく應せば輕々しく思做すは人の痛弊である。哀求し、懇願して得たる所に、其の恩寵の永遠に記憶すべき印象は刻まるゝ。

二十七、二人の盲人。ユダヤでは空氣中に石灰粉が飛散するのと溫度の變化の急激から多くの盲人が生じた。とトレンチは言ふ。マタイ二十〇三十にエリコで同様な事件があつたと傳へてゐる。ホルツマンは同一の事件を二重に傳へたものだと言ふ。然しヴァイスは反對する。ダビデ

の子よ。三回共に盲目は此の稱號を奉つてゐる。マタイ九〇二十七、十二〇二十三、二十〇三十。耶穌に對して始めて適用しての表現で、此れはメツシャたるを示すもの。弟子たちは大に注意を喚起したであらうが、耶穌は誤解を忌んで此の語の適用を喜ばれなかつた。三十、嚴しく戒めて力を籠めて命令せらるゝ意。強い情熱を籠めて言ふ意味である。

惡鬼に憑たる啞者 三十二—三十四

三二 盲人どもの出づるとき、視よ、人々、惡鬼に憑かれたる啞者を御許につれきたる。三三 惡鬼かひ出されて啞者ものいひたれば、群衆あやしみて言ふ「かかる事は未だイスラエルの中に顯れざりき」三四 然るにパリサイ人いふ「かれは惡鬼の首によりて惡鬼を逐ひ出すなり」(ルカ九〇十四、五)

「犬に聖き物を與ふる勿れ」偉大なる神の力に虚心坦懐の民衆は大いに驚き之を讚歎したけれどもパリサイ人は其の頑迷不靈の根性よりして彼等自身の論理を築き、此の恩寵溢るゝ事實をさへ、惡魔の勢力に歸して攻撃を加へた。斯くの如き輩には奇蹟も神の能力も、其の曲れる心を矯むる由はない。

三十二、啞者を御許につれきたる。マタイ十二二十二の場合の事を述べたものとスレエタアは言ふ。此れは肉體の缺陷に由るに非らず、他の靈に由つて其の發音を妨げらるゝものと信ぜられた。三十四、彼は惡鬼の首によりて云々。此れに就いての問答は後章、十二二十五—三十參照。

傳道と治療 三十五—三十八

三五 イエス 徧く町と村を巡り、その會堂にて教へ、御國の福音を宣べつたへ、諸般の病、もろもろの疾患をいやし給ふ。三六 また群衆を見て、その牧ふ者なき羊のごとく憐み、且たふるるを甚く憐み。三七 遂に弟子たちに言ひたまふ『收獲はおほく労働人はすくなし。三八 この故に收獲の主は労働人をその收獲場に遣し給はん、こゝを求めよ』。

耶穌は國內を彼方、此方に傳道しつゝ、又病者を憫みつゝ奔走せらるゝ間に、其の民衆の眞相を洞觀しては轉た痛嘆せらるゝ外はなかつた。

政治は野望を包む惡漢のために私せられ、慾を以て動く外、曾つて國民の利害休戚を顧みる

ものなく、従つて統一なく、何れを信じ何れに頼るべき方もなかつた。宗教者は腐敗し盡して民衆の淨財は唯だ彼等の私腹を肥さんがために集めらるゝのみ。其の靈魂の苦惱、煩悶を曾つて顧みて心に留むるものもなく、或は政治家と結托し、或は迷信を鼓吹して如何にせば自己の職業の繁榮を來らすを得べきかにのみ腐心する有様であつた。生命を托する醫業も亦あらゆる詐術射利の手段にのみ利用せられ、憐むべき患者は其の財を盡くして後空しく斃るゝを待つのみ状態であつた。耶穌なき所、耶穌の精神を帶する者の存在せざる所、社會の困苦、離散、滅亡は免れざる所である。道を基とし、何れの時にあつても眞に民衆のために泣き民衆の爲に其の身命を挺して之を率ゐるものは耶穌の他に地上に之を見出さるべくもない。

三十五、耶穌昔く町と村とを巡り、四〇二十三の句が繰返さる。此の傳道の一段落を示す。三十六、その牧ふ者なき羊の如く憐み、且つたふるゝを。次の段落には一層の努力の必要を認められたるものである。其の道徳的、宗教的狀態を耶穌が明白に發見せらるゝこととなつた。即ち外人の支配の下に在り、政治家や租稅徵收者の犠牲とせられ、社會の首腦は自己の徒黨の私利に汲々として分れ争ひ、民衆は混亂して離合集散常なく全く牧羊者なき羊の如く、御座なりの傭人に引き廻

されてゐた。甚く憫み。現状を働き、其の前途に涙を飲まれたのである。三十七、收獲は多く。ルカには七十人傳道の際に此の御語を掲げてゐる。巡回の結果、其の活動を待つ多くの事業あるを發見せられた。「收獲」とは靈的感受性に適用せらるゝ。三十八、その牧場に遣し給はんこと。マルコ一〇十二には「逐ひ遣る」と譯されてゐる語が使用せらるゝ。主に……求めよ。此の需用に對して神の同情を懇請せよ。基督は恩寵深き攝理に全幅の信頼を有せられた。

第十章

十二使徒の選定 一一四

一 斯てイエスその十二弟子を召し、穢れし靈を制する權威をあたへて、之を逐ひ出し、もろもろの病もろもろの疾患を醫すことを得しめ給ふ。〇 十二使徒の名は左のごとし。先づペテロさいふシモン及びその兄弟アンデレ、セベダイの子ヤコブ及びその兄弟ヨハネ、三ビリポ及びバルトロマイ、トマス及び取税人マタイ、アルパヨの子ヤコブ及びタダイ、熱心黨のシモン及びイスカリオテのユダ、このユダはイエスを賣りし者なり。(マルコ三〇十四—十九、ルカ六〇十二—十六)

十二使徒の選定 一一五

此の世の歴史は人間の鴻業の記録である。然るに教會の歴史は神の事業の記録である。人の爲せる功績に就いては事々しく記されざるが故に十二使徒の出所進退の如き委しく知るを得な

ら。先づ第一に此所に列記せらるゝ使徒の名を聖書中に搜り求めて我等の感激措く能はざるは彼等が世上の地位よりすれば何れも甚だ微賤の者共にして、多くはガラリヤ湖畔の漁夫か、世の指彈排斥せらるゝ階級の出身で、中には政府の黒表に上れるらしき御尋者さへ加はれるを見る。然かも彼等に由りて、當時全世界に其の覇を唱へたるロマ大帝國は遂に基督の領有に歸し、萬世萬邦に基督の榮光の宣揚せらるゝ基礎の築かれたるを思ふては轉た驚歎の外はないのである。誠や、神の事業は智者學者に由つて繼承せられず、世に有るか無きかの雜輩に由つて建設せらるゝのである。是れ實に「神は石をもアブラハムの子と成し給ふ」もの、基督に召さるゝものは、其の現在の境地の如何に深く思ひひがむる要はないのである。

彼等の出所すら既に明かでない。況んや彼等の行へる鴻業に至つては、唯だ神の事業を傳ふる便宜を以て載せらるゝのみ。中には名をのみ此所に留めて、彼等が如何にして其の托せられたる基督と協同し、福音の宣傳に當り、病を醫する能力を行使したるか、全く不明である。基督者の事業は神に對する忠誠を致す外に更に他の意義を有しない。野望を挿む餘地なく、虚榮を満足せしむる機會はない。然かも此所に録せられざるこそ、天に其の名の愈輝けるを證せねばならぬ。

彼等のうちには何千何萬の信徒を興せるものもあるべく、涙ぐましく犠牲の生活を送れるものもあつたであらう。斯くして今日全世界に傳播せる基督の福音は繼承せられ、其の靈的領土の擴張の基礎は築かれたのである。彼等の形見は嚴として連綿存在しつゝも、彼等は遂に其の榮光を神に歸して全く不問の間に其の個々の鴻業は傳らない。印刷の術、交通の便大いに開け、加ふるに神よりも人の榮譽の圖もすれば重きを爲す時代に、些細の努力や其の効果が、針小棒大にすら、忽ち天下に傳へらるゝ今の世に在るもの、聊かの不覺も遂には此の世の記録に鮮やかにして天に於ては其の名の録せられざる憂がある。深く心に之を潜めざるを得ないであらう。

一、耶穌、其の十二弟子を召し云々。此れは普通の人間を弟子として召さるゝのではない。既に弟子であるものを特殊の使命に召さるゝ意味である。マルコ、ルカ等の記事に由つて彼等に三つの職責あるを知る。即ち基督に近接する事、教を宣ぶる事、及び病を癒す事である。二、十二使徒の名は、使徒とは「遣はされたるもの」、或は「使節」の意味である。使徒の名は主として此の十二人に用ゐられたけれども必らずしも此れに極限した譯ではなかつた。十二の數はイスラエルの種族の數に凝せられたものであらう。後に至つてマテイヤ、パウロ、ヤコブ、バルナバの如き皆使徒と稱してゐる。共觀福音書及び使徒行傳に由つて四つの使徒名簿が残されてゐる。皆同一の人物を擧げてゐるが其のうち一人二人疑はしいものもある。先づペテロと言ふシモン。何れの表にもペテロを第一にイスカリオテのユダを最後に掲げてゐる。勿論此れは主權を意味しない。マタイ二十二〇二十五參照。ペテロはアラマイツクの「ケバ」をギリシヤ語に譯したものである。(ヨハネ一〇四十二)。アンデレとピリポは共にギリシヤ語である。耶穌の最期間近にギリシヤ人が訪れて來たときピリポとアンデレとを介した所を見ると、名のみでなく、ギリシヤ人と何等か關係があつたやうである。ゼベダイの子ヤコブ、其の兄弟ヨハネ。第四福音書にはヤ

コブの名を見ず。ヨハネより前に記さるゝを見れば見であつたらう。此の兩人の母はサロメで、聖母マリヤの姉妹であつたから、彼等は耶穌と従兄弟同士であつた。三、ピリポ及びバルトロマイ。ピリポは前叙の如くギリシヤ風の名。バルトロマイはヨハネ一〇四十五に言ふナタナエルの事ならん。トマス及び取税人マタイ。トマスの名は福音書中マタイには他に見られず、然しヨハネには屢現はる。或る人はマタイの兄弟であつたらうと言つてゐる。アルバイの子ヤコブ及びタダイ。ヤコブはマタイの兄弟であつたに相違はない。レツバイとタダイとは同一人、「ヤコブの子ユダ」も亦此のタダイの事であらうと多くは言ふ。(ルカ四〇十四及使徒行傳一〇十三参照)四、熱心黨のシモン及びイスカリオテのユダ。ロマの主權に反抗して謀叛したる政治黨に熱心黨(ゼロテ)と言ふのがあつた。シモンは其の與黨であつた。「イスカリオテ」とはユダヤ郡の一種族「カリオテの人」の意。彼のみはガリラヤ出身でなかつた。

使徒に對する訓示 五一四十二

ヨイエスコの十二人を遣さむとて、命じて言ひたまふ、「異邦人の途にゆくな、又サマリヤ人の町に

入るな。六、寧ろイスラエルの家の失せたる羊にゆけ。七、往きて宣べつたへ、天國は近づけりと言へ。八、病める者をいやし、死にたる者を甦へらせ、癩病人なきよめ、惡鬼を逐ひいだせ。價なしに受けられば價なしに與へよ。九、帶のなかに金・銀または錢をもつな。十、旅の囊も、二枚の下衣も、靴も、杖も、もつな。勞動人の、その食物を得るは相應しきなり。十一、何れの町、いづれの村に入ることも、その中にて相應しき者を尋ねいだし、立ち去るまでは其處に留れ。十二、人の家に入らば平安を祈れ。十三、その家もし之に相應しければ、汝らの祈る平安は、その上に臨まん。もし相應しからずば、その平安は、なんぢらに歸らん。十四、人もし汝らを受けず、汝らの言を聽かすば、その家、その町を立ち去るとき、足の塵をはらへ。十五、誠に汝らに告ぐ、審判の日には、その町よりもソドム、ゴモラの地のかた耐へ易からん。○ 十六、視よ、我なんぢらを遣すは、羊を豺狼のなかに入るるが如し。この故に蛇のごとく慧く、鴿のごとく素直なれ。十七、人々に心せよ、それは汝らを衆議所に付し、會堂にて鞭たんと。十八、また汝等わが故によりて、司たち王たちの前に曳かれん。これは彼らと異邦人に證をなさん爲なり。十九、かれら汝らを付さば、如何なる言はんと思ひ煩ふな、言ふべき事は、その時さづけらるべし。二十、これ言ふものは汝等にあらす、其の中において言ひたまふ汝らの父の靈なり。二一、兄弟は兄弟を、父は子を死に付し、子どもは親に逆ひて之を死なしめん。二二、又なんぢら我が名のために凡ての人に憎

まれん。されど終まで耐へ忍ぶものは救はるべし。二三この町にて、責めらるる時は、かの町に逃れよ。誠に汝らに告ぐ、なんぢらイスラエルの町々を巡り盡さぬうちに人の子は来るべし。○二四弟子はその師にまさらず、主にまさらず、二五弟子はその師のごとく、僕はその主の如くならば足れり。もし家主をベルセブルと呼びたらんには、況てその家の者をや。二六この故に、彼らを懼るな。敵はれたるものに露れぬはなく、隠れたるものに知られぬは無ければなり。二七暗黒にて我が告ぐることを光明にて言へ。耳をあてて聴くことを屋の上にて宣べよ。二八身を殺して靈魂をこらし得ぬ者どもを懼るな、身と靈魂とをゲヘナにて滅し得る者をおそれよ。二九二羽の雀は一錢にて賣るにあらすや、然るに汝らの父の許なくば、その一羽も地に落つること無からん。三〇汝らの頭の髪までも皆かぞへらる。三一この故におそるな、汝らは多く雀よりも優るるなり。三二然れば凡そ人の前にて我を言ひあらはす者を、我もまた天にいます我が父の前にて言ひ顯さん。三三されど人の前にて我を否む者を、我もまた天にいます我が父の前にて否まん。○三四われ地に平和を投ぜんために來れりと思ふな、平和にあらす、反つて劍を投ぜん爲に來れり。三五それ我が來れるは人をその父より、娘をその母より、嫁をその姉婦より分たん爲なり。三六人の仇は、その家の者なるべし。三七我よりも父または母を愛する者は、我に相應しからす。我よりも息子または娘を愛する者は、我に相應しからす。三八又おのが

十字架をとりて我に従はぬ者は、我に相應しからす。三九生命を得る者は、これを失ひ、我がために生命を失ふ者は、これを得べし。○四〇汝らを受くる者は、我を受くるなり。我をうくる者は、我を遣し給ひし者を受くるなり。四一預言者たる名の故に預言者をうくる者は預言者の報をうけ、義人たる名のゆゑに義人をうくる者は、義人の報を受くべし。四二凡そわが弟子たる名の故にこの小き者の一人に冷かなる水一杯にても與ふる者は、誠に汝らに告ぐその報を失はざるべし』

五、耶穌此の十二人を遣はさんとて命じて言ひたまふ。彼等の使命は異邦人には及ばなかつた。

異邦人……サマリヤ人の町に入るな。將來は異邦人の地にも及ぶべけれど、今はそれを禁ぜらる。

『サマリヤ人の町』は苟も其の人種の間人口の多き中心の各地の意。此れは耶穌自らも其の事業をイスラエルの中に於て行はれたると、使徒たちの宗教が未だ熟しなかつたので斯く禁ぜられたものであらう。六、イスラエルの迷へる羊。此の國民の道徳的又社會的狀態が此所に主として努力せられねばならないほど痛ましいものであつた。耶穌は自己の活動を此の國民の間のみ制限せられた。十五〇二十四。『迷へる羊』とは是を攻撃の意味なく、憫むる情より斯く言はるゝもの。七、往き宣へ傳へ云々。彼等は未だ天國に就いては深く知らされども、其の君主に就い

て之を受けんとする人々に傳ふべき多くものを見聞してゐた。知れる程度を傳ふるのが召されたものの使命である。八、病める者……死にたる者……痲病。病者のうち癩病人を含めてゐないのは、此れを特殊のものと認めたからであらう。マタイの記事が最も完全である。他には死人を甦す個條加へず、又其の實例も聖書中に求むることを得ない。或る人は此れを精神的意義に解するも採用し難い。七十人の弟子の傳道報告にも死者を甦らしめたる個條なし。九、帯の中に金銀又は錢。ヘロデ大王の貨幣は銅のみであつた。即ち國內の貨幣。金銀はロマ及びギリシヤの貨幣、何れもユダヤに通用した。帯の間が袋となつて財布の用をなせるもの。日本婦人の習慣に似たり。十、葦藁、物を入れて肩に擔ふもの。二つの下衣。下衣を重ねて着る要なし。着更も必要なし。此れは餘り文字に拘泥せず、其の精神を汲むべきであらう。鞋も、杖も。サンダルも杖さへも。勞働人の其の食物を得るは相應しきなり。一般に知られたる諺である。使徒パウロは此の御語を其のまゝに引用してゐる(コリ前九〇十四)。彼は十二使徒に對する御意を好く理解した使徒である。十一、何れの町、何れの村に入るとも云々。豫言者たる使徒たちは此の新宗教に對して共鳴するものを努力して發見しなければならぬ。彼等の事業は主として家庭の傳道

であつた。十二、人の家に入らば。福音を受くべき家を認めて此れに入らば、其の待遇の厚薄を比較して、さもしき思ひから移り易はるなどある。それは主人の感情を害し、自己の品性を損ふ。十三、平安は汝らに。其の厚意を受けずとも尙ほ平安を祈らば、其の受けざる平安は使徒に歸す。傳道も亦同じ、福音の宣傳を受けざる場合ありとも、其の傳道の祝福は傳道するものに及ぶ。十四、足の塵を拂へ。兩者の側に全く關係なきを示す象徴的行爲。ユダヤ人は異邦人の地で附着せる塵は穢れたるものとして足を拂つた。即ち福音を受けざるものとは友誼なし。十五、審判の日は云々。ソドム、ゴモラの不徳極りなき地に對する刑罰(賽一〇九)も、此の福音の大いなる持權を受ることを拒む者に比しては、其の負へる責任亦輕からん。十二使徒に托せられた福音が如何に重要な意義あるかを知るに足らん。

十六、羊を狼の中に入る、が如し。「我」は力を籠めて言はるゝ。即ち其の能力を與へらるゝのみならず、耶穌は彼等の苦痛にも責任を負はるゝ。彼等は敵のために圍まれん。蛇の如く響く、錫の如く素直なれ。此れはユダヤ人の間に普通行はれたる格言。此の品性は防衛なき旅人が安全を期するに必要である。蛇は甚だ敏捷なる動物とせらるゝ。創三〇一、詩五十八〇四。如何なる

残忍の敵に對しても鴿の如く單純にあれ。弱きものの防備は謹慎と無害の態度である。何七〇十一。『角や齒を有せざるもの』(ベンゲルは言ふ)が尙ほ豊かに生存せるを思へ。 十、人々に心せよ。此の提言は隨所に見らるゝ。マタイ二十四〇九、マルコ十三〇九、ルカ二十一〇六十二。然し耶穌の在世中には起らなかつた。衆議所、會堂、高等法廷。會堂は禮拜堂たると同時に罪惡の審問を行つた。 司たち、王たち。地方の知事たちの意。 로마の治下には地方にプロプリエ、タア、プロコンソル(總督と譯してある)、プロキユレタア(總督又は大守)等の知事の役名があつた。多くの基督者は彼等の前に曳き出された。マタイ八〇四、二十四〇十四、ピリピ一〇十三。『王たち』とはヘロデ・アグリツバやロマ皇帝にも適用せられやう。十九、如何に言はんと思ひ煩ふな。危急の場合に如何なる言語を使用し、如何に言明せんかなどと杞憂を懐くなかれとある。説教や講演を『言ふべき時には聖靈に由つて示めさるゝ』と稱して準備しないことの口實に此の句を適用するは奇怪千萬と言はねばならぬ。二十、言ふものは……汝らの父の靈なり。公明なる辨證は基督者自らに由つて生じない。此の靈こそ全世界の教會を鼓舞する語を危急の場合に與へらる。テモテ後四〇十六、十七。

二十一、兄弟は兄弟を、父は子を、宗教上の争亂には此の悲しき結果を免れず。内亂の際すら既に然り。況んや眞理に従はんとすれば肉親にすら背かるゝ。『父は子を』とは人情最高、最強の關係すら離るゝを言ふ。『人の仇は其の家者なるべし』。基督者にして此の苦悶を味はざるもの幾人かある。二十二、又汝ら我が名の爲に。弟子たちは此の苦き杯の澀も残らず飲ましめられた。宗教的偏狭心から至らざるなき迫害は加へらるゝ。實に『基督者』なる名目が敵の残忍性を壇まにする唯一の理由となるのである。然れど終りまで耐へ忍ぶもの。審判の日には必らず救はる意。然し其の危急の場合に道德的節操を缺き卑怯なるがために如何ばかりか多くの人々が品性に悲惨な結果を受けたことであらうか。耐忍は道德的破滅より人を救ふ。二十三、此の町に……かの町へ。自衛の念を以て勇氣と忠誠とを失はざる努力こそ必要である。逃亡も或る場合には決して卑怯ではない。新兵は無暗に危険に身を晒すけれども、老巧の兵は其の戦闘力を考慮して自重しつゝ身を處する。古來天下に名を成せる名將にして何れか逃亡した經驗のないものがあらうか。汝らイスラエルの町々を巡り盡さぬうちに人の子は来るべし。彼等が其の傳道事業を完成しないうちにエルサレムの陥落は来るべしとの意に解するものもある。『人の子』は即ち耶穌。

人道的の福音が遍く述べ傳へらるゝまでは完全な事業は行はれ難い。故に一個所に成功しなくとも悲しむな之意。

二十四、弟子は其の師に勝らず。辛い事もあるであらうが、弟子は其の師よりも厚遇せらるゝものと思ふな。二十五、ベルゼブルと呼ばたらんには。其の家の主をすら悪魔の頭と言ふほどならば、其の家族には一層侮蔑の名を與へることであらう。二十六、蔽はれて現はれぬなく云々。耶穌は「懼るゝな」と三次び繰返し、使徒の事業は危険なれども必らず公けの注意を引かざることなき故であると仰せらるゝ。兵士や水夫が自己の職分より来る危険に對して冷靜に之を當面する以上に使徒は其の職分より来る危険に懼を懷いてはならない。兩個條の對照は主と弟子との公衆に對する關係を示さるゝもの。此の運動の發展に伴ひ、彼等は公衆の眼に晒らさるゝに至るとの意。二十七、暗黒にて……光明に……耳にあて、聴く……屋の上に。新時代を劃する運動も其の發端は世に認められない。ユダヤのラビは弟子の耳に口を當て、教を授けた。「屋の上に」とは、ユダヤの屋根は平面にて其の上に往來するは普通の事であつた。高所に登つて大なる群衆に高聲に宣傳せよとある。二十八、身を殺して靈魂を殺し得ぬものを懼るな。迫害者は財産及び肉情の對

象を損ひ得るのみ。「身と靈魂とをゲヘナにて滅し得る者」とは誰か。多くの註解者は神を指すと言ふ。「否な、私は直ぐ次に雀を守り給ふ父として述べらるゝ神を斯く基督が言ひ現はさるゝものとは信じない……迫害者を懼るゝな誘惑者を懼れよ。汝が忠實なるによりて汝を殺す人は懼るゝに足らず、汝を買収し去る人こそ懼るべし、斯くの如き人物は惡魔の使である」とブルウスは言ふ。二十九、二羽の雀、宇宙のもの細大漏さず父の御手の下にあり。一錢とあるは古貨一ドラクマの十分の一、略我が一錢に相當。雀と譯されたる語は總ての小鳥に通用す。三十、汝らの頭の髪。自己には全く知れざる身體の一部も明かである神なる父。三十一、多くの雀よりも優るゝなり。人類の絶對價値を斯く單純な比較を以て示さる。三十二、凡そ人の前にて我を言ひあらはす者ぞ。我を其の告白の中心目的とするもの意。弟子の利益は中心なる基督と結んで始めて全いのであつて、斯くの如き友誼を有せざるがため不忠なるものは損失を受く(オリゲン)。

三十四、我地に平和を投ぜんために來れりと思ふな。聖書には其の目的と結果とが區別して書き表はされない。此れはそれを目的としてではない自然の結果が此所に及ぶ。弟子たちは平和に福音が傳へらるゝと想像してゐるやうであるが、然らず、激甚の反對が生ずると言ふのである。

『地』は地上の意味ではない。『此の地』即ちイスラエルの地である。三十五、我が来るは人き…父より…娘を…母より…嫁を…姑嬢より。思想の革命は先づ若きものより始まるを常とす。三十七、我よりも父又は母を愛するものは云々。親類と眞理と何れを選ばんかと言はゞ、弟子は何れの關係をも離れて基督に従はねばならぬ。三十八、己が十字架をとりて我に従はぬ者。聽者はユダヤに於て死刑囚が十字架を負ひ行くのを親しく知つてゐた。三十九、生命を得る者は、之を失ひ云々。罪囚の如く十字架と侮辱の死を遂ぐるは悲惨である。然しそれは慘劇であるが此所に救が宿る。聖者は何れも『生きんがための死』を理解し、斯く行動した。『身を棄てこそ浮ぶ瀬もあれ』。

四十、汝らを受くる者は我を受くるなり。峻嚴な教訓の後に此の鼓舞、獎勵の御語が與へらる。主を受くるは其の神を受くるに等しく、同時に主の使臣を歡待するは主自身を歡待するのである。大使館の國旗を辱むれば、其の派遣國の元首を辱むるに當ると同様。四十一、預言者たる名の故に。基督の福音を述ぶるものは豫言者である。エヘ二〇二十、四〇十一参照。『名の故に』とは其の品性を以て之を承認する意。品性を認めて之を貴ぶものは同様の品性のものとして取扱は

る。斯く宣ふは弟子たちに對し信徒をして歡待せしめんがためである。四十二、小ちき者の一人に冷やなる水云々。其所に使徒たちを圍める人々に對しての宣言であらう。『小さき者』とは若き弟子、基督にありて信仰の乳兒。『冷やかなる水』パレスチナの如き炎暑甚だしき荒涼たる原野を旅行せねばならないものに取つて隨所に水を發見し難く、又氣候溫和な我等には想像も及ばざる價値があるのである。基督の弟子の乳兒に等しきものなりとも基督の弟子なるが故に最少限度の深切を盡くしても尙ほ其の祝福は必らず酬らるゝ。

第十一章

耶穌單獨の傳道 一

一、イエン十二弟子に命じ終へてのち、町々にて教へ、かつ宣傳へんさて、此處を去り給へり。(マルコ四〇十二、三、ルカ九〇六)

一、弟子に命じ終へて後…此處を去り給へり。十二使徒を派遣せられたる地方を除きて尙ほ其の説教を繼續せられた。『彼等に餘地と尙ほ事業を行ふ時間を與へられた。それは基督と偕に在つ

ては何人も彼等に来つて訴ふるものはなかつたでめらう故に(クリソストム)。

バプテスマのヨハネの使者 二一九

二ヨハネ牢舎にてキリストの御業をきき、弟子たちを遣して、三イエスに言はしむ「来るべき者は汝なるか、我は他に待つべきか」曰答へて言ひたまふ「ゆきて、汝らが見聞する所をヨハネに告げよ。五盲人は見、跛者はあゆみ、癩病人は潔められ、尊者はきき、死人は甦へらせられ、貧しき者は福音を聞かせらる。六おほよそ我に贖かぬ者は幸福なり」七彼らの歸りたるを、ヨハネの事を群衆に言ひ出でたまふ「なんぢら何を眺めんして野に出でし、風にそよぐ葦なるか。八然らば何を見んして出でし、柔かき衣を着たる人なるか。視よ、やはらかき衣を着たる者は王の家に在り。九さらば何のために出でし、預言者を見んしてか。然り、汝らに告ぐ、預言者よりも勝る者なり。十「視よ、わが使なんぢの顔の前につかはす。彼は、なんぢの前に、なんぢの道をそなへん」と録されたるは此の人なり。十一誠に汝らに告ぐ、女の産みたる者のうち、バプテスマのヨハネより大なる者は起らざりき。然れど天國にて小き者も、彼よりは大なり。十二バプテスマのヨハネの時より、今に至るまで、天國は烈しく攻むる者は、これを奪ふ。十三凡ての預言者と律法との預言したるは、ヨハネの時までなり。

十四もし汝等わが言をうけんことを願はば、来るべきエリヤは此の人なり、十五耳ある者は聴くべし。十六われ今の代を何に比べん、童子、市場に坐し、友を呼びて、十七「われら汝等のために笛吹きたれど汝ら踊らず、歎きたれど汝ら胸うたざりき」と言ふに似たり。十八それはヨハネ來りて、飲食せざれば「悪鬼に憑かれたる者なり」といひ、十九人の子、來りて飲食すれば「視よ、食を食り、酒を好む人、また取税人・罪人の友なり」と言ふなり。されど智慧は已が業によりて正しとせらる。

(ルカ七〇十八—三十五)

身は空しく牢獄に繋かれ、畢生の鴻業は曠しく半途に撓け、快々として果敢なき餘命を鐵鎖の下に送つたヨハネは、耶穌の名聲隆々としてユダヤ全土に揚れるを己が弟子より傳へ聞いて、身は此所に朽つるとも、鞋の紐を解くに足らざる我の到底企て及ばざる大事業は此の人を待つて維々成就せらるゝであらう。

我すら尙ほ之を見るに耐えず、侃諤の諫言を寄せたる彼の淫蕩窮りなく、不倫の極を盡せるヘロデの如き、此の君の鎧袖一觸、忽ちに其の傲然たる面皮を剝がれ、金冠を蹂躪せられて、當然の末路をや遂ぐるであらうと彼は私かに望を寄せて只管に其の警報を待つた。然るに何事

ぞ、メツシヤと確信して欣仰せる耶穌は温順鴿の如く、其の鋒鋦を包み、宛然國內に蔓れる墮落も、不倫も全く眼に映ぜざるもの如く、従らに微賤の民と交はり、賤業婦を近け、諄々として無用にしてまどろき宣教に従事せらるゝと聽く。メツシヤの審判は何れの日に行はるゝのであらうか。類廢淫靡の彼、巨魁を叱咤して、其の腐肉に韃たるゝの日は何れに来るか。彼は圖つ措きつ苦悶に其の心を蝕ばまれたことであらう。

彼は遂に其の堪忍の最早寸刻も延ぶべからざるを感じた。故に親しく其の弟子を耶穌に遣はして、明々に耶穌の證言を徴せんと焦慮した。

然し如何に輩濟を抜いて純潔なりとも、彼は罪の世に屬する一靈魂に過ぎない。彼の感知して以て彈劾すべしと爲す所も、畢竟は人間の皮相の觀察に過ぎない。故に如何に語句は激烈を極むるとも、世の人々に取つて尙ほ其の前面に立つて若干の餘裕あるべきは當然である。況んや彼は其の半生を荒野に送り、全く俗世と縁を絶てるもの、其の説示する所に迂遠のものも存すべく、當らざるものも多かつたであらう。

然るに神の品性と其の能力と權威と智慧を合せ有せらるゝ耶穌にして一度起つてヨハネの故

知に學び、己が心鏡に映するまを公言して人類の頭に攻撃の熱火を降さるべしとならば誰か其の面に立ち得るものがあらうか。耶穌にして思がまゝに審判の斧鉞を揮はれたりとすれば、天下其の前に一片の完膚だに遺し得るものがあらうか。斯くて耶穌の降誕も全く空しき畫餅の事業と成り終るべき筈である。ヨハネにして一次び新たに生れずば耶穌の意中は到底想像も能くし得る所ではなかつた。

耶穌は彼の質問に對して徐ろに其の使命を聲明し、自己の職分の何者に該當するかを直接に辯證せず、其の後影に隨ふ愛の事業を啓示して以てヨハネの判断を促された。想ふに此の答へを得て、ヨハネは自己の不明を耻ぢ且つ今や喜んで志す靈界へと赴くに些の恨事をも遺さなかつたであらう。

二、ヨハネ牢舎にて其の御業を聞き云々。ヨハネは死海の邊りマカエラスの要塞中にある土牢に捕へられてゐたことは四〇十二に記さるゝ。其の孤獨寂寞の中に時々訪れ來る弟子に由つて基督の今日までの事業を聞いた。此所に故更に記者が「基督」と言つたのは其の事業が基督たるを示すからである。彼は耶穌に使者を遣はした。恐らく報告をした弟子たちを使つたものであ

らう。前譯には二人とあるが改譯には單に復數としただけである。三、來るべき者は汝なるか。『來るべき者』とはメツシヤに對して言ふ普通の稱呼であつた。即ち耶穌は實に基督なりや否やの問題であつた。何故にヨハネが使者を送れるかに就いては種々の議論がある。第一は、期待せんとする希望と、自己の心中の沮喪からして、我がバプテスマを施し又知れる彼の人物は基督であらうか、今此所に報告せらるゝ事業が果してメツシヤの事業であらうかと考へたものであるとの説、第二は彼の弟子の信仰を堅固ならしむるために質問せしめたものであるとの説、第三は耶穌をして其のメツシヤたることを公然發表せらるゝやうに迫つたものであるとの説である。第一の説が最も自然で意義も深い。人の信仰は時に搖らぐ『主よ、我信ず、我が信なきを憫み給へ』と敬虔な聖徒が涙を以て祈ることは屢見らるる。四、汝らが見聞する所をヨハネに告げよ。此れはヨハネの弟子たちに對して新たな見聞ではなかつたであらう。然し其の表現が奇蹟を以て預言書を思ひ起すやうな説明の仕方である。賽三十五〇五、六十一〇一などを思ひ起さるゝ。五、貧しき者は福音を聞かせらる。地上の王國では使命は富める者、偉人に對して送らるゝ。然し神の國では心の謙遜なるものに送らるゝのである。弟子たちは耶穌が富者の誘惑多く救は

れ難きを聲明せられたとき『然らば誰か救ひを得べき』と怪んだ。『富者すら天國に入り難しとすれば、貧しきものは如何にして入り得ん』と卑俗極まる觀念を有してゐた。神の國では心の貧しき者が貴いのである。六、我に頭かめ者は幸福なり。基督が驚天動地の大事業を行はるゝのみならずが如く誤信するものは蹟く。然かも耶穌の御業こそ教主の事業なりと認むるものは幸福である。『幸福』とは靈的洞觀力と眞の生命への進歩を指すのである。七、風にそよぐ葦なるか。耶穌の行動には常に多くの民衆が環視してゐることを忘れてはならぬ。此所に萬人稠座の中に於てヨハネに警告を與へられたが故に、更に民衆に對して彼を正當に紹介せらるゝ必要があつた。彼等は耶穌が此の有名なる預言者を如何に評せらるゝかと待つた。當時に於てヨハネの確信は明かで彼の信仰は堅固であつた。其れに接する爲め汝等はヨルダンの彼方に赴いたのであらうと言はるゝ。葦は吹けば飛ぶ輕薄な人物の意に用ゐらるゝ。或る人は此れを文字の如く解してヨルダン河畔の葦を見に出たかと仰せられたとも言ふ。柔かき衣を着たる人なるか。剛毅高官を畏れず、王者を眼中に置かず、敝衣唯だ品性を以て輝くヨハネを見よ。世には其の品性俗物中の俗物にも劣る宗教者が、緋衣を纏ひ金冠を頂けるため、崇拜する迷信家が多い。斯くの

如きは俗世の事のみ。宗教に於て重んずべきは品性人格のみ。九、然り預言者より勝る者なり。預言者は皆臚にメツシヤを豫測せしのみ、ヨハネは親しくメツシヤに接した。而して神の國に於て其の前驅を務めたのみならず又預言者の預言をさへ受けてゐる人物である。十、觀よ、我が使を汝の前に云々。馬三〇三のヘブル原書より引用した語。七十譯とは異つてゐる語があると註解者皆言ふ。十一、ヨハネより大なる者は起らざりき。身親しく神の國の出現を目撃した彼は、之を見る能はざり先覺者よりも高き地位に在るに相違なし。然かも彼も亦靈に由りて生れた子に非ずして、婦の産みたるまゝの人間であつた。人物の大小は神の國に其の力を致す多少によつて定まる。然れど天國にて小さき者も彼より大なり。神の國のうちに在る者即ち神に一層近ければ、神に就いて靈的意義を一層明かとせられたる人々は基督以前の何れの聖者よりも偉大なる特權を有するのである。十二、バプテスマのヨハネの時より、今に至るまで云々。ヨハネは新時代を劃する人物にて神の國の出現に會した。神の國に對して人々が熱注するに至れるはヨハネの説教の時からであつた。其の説教こそ總ての預言者が目標とした時代の曙であつた。烈しく攻めらる。船が港口を閉塞せる防材を乗り碎いて入港する如く闖入する(カアル)。即ち人々が神

の國を熱望し、之に入らんとして激烈に努力すに至つた、即ちヨハネによつて宣傳せられ、基督に由つて据着けられた新なる律法と生活とを求むるに至つたのはヨハネの説教が其の曙を劃した。彼の功や没すべからず。烈しく攻むる者は之を奪ふ基督に熱烈に不撓に隨ふものは神の國を握る——戰に金鶏勳章を得る如く。十三、凡ての預言者と律法との預言したるは。即ちヨハネは單に預言を繰返した人物ならず預言者の列に加ふべきものならず、神の國は來るが故である。彼は特殊の除外例たる使命を有して現はれたる人物である。十四、若し汝等我が言を受けんことを願はば云々。前節を受く。蓋しヨハネは馬拉基に「大いな日を預言せんとして來るエリヤ」と言はれてゐる人物で「神の國は近く」と言つたのみならず「神の國は此所に在り」と宣傳した人物なるが故である。即ちエリヤの精神と威力とを有した人物である。十六、市場に坐し友を呼び云々。此の時代のユダヤ人は遊戯をする小兒の群に似たり。恐らく耶穌は眼前に斯くの如き光景を認められたのであらう。ユダヤ人はヨハネが無邪氣に踊らないと言つて苦情を言ひ、耶穌が悲觀的な態度に共鳴して慟哭せられないと言つて苦情を言ふ。耶穌は禁慾主義のエッセネ派の如くならず、友人と共に飲食せられ、ヨハネは之に反して其の欲望を節するに餘りに峻烈に過ぎると非

難した。十九、然れど智慧は己が業(又は子)に由りて正しとせらる。智慧は愚者には否定せらるゝが當然であるけれどもやがては其の事業に由り、之に同ずるものに由りて正當な光を放つに至る。ヨハネの嚴格も、謙遜に取説人罪人と共に食せらるゝ、耶穌の慈愛も共に靈的人物は神の智慧として認むるに至るとの意。

頑迷なる都市 二十一—二十四

二十 爰にイエス多くの能力ある業を行ひ給へる町々の悔改めぬによりて、之を責めはじめ給ふ、二三『禍害なる哉、コラシンよ、禍害なる哉、ベツサイダよ、汝らの中にて行ひたる能力ある業をツロシンドンにて行ひしならば、彼らけ早く荒布を着、灰の中にて悔改めしならん。二三 されば汝らに告ぐ、審判の日にはツロシンドンのかた汝等よりも耐へ易からん、二三 カペナウムよ、なんぢは天にまで擧げらるべきか、黄泉にまで下らん。汝のうちにて行ひたる能力ある業をソドムにて行ひしならば、今日までも、かの町は遣りしならん。二四 然れば汝らに告ぐ、審判の日にはソドムの地のかた汝よりも耐へ易からん』○(ルカ十〇二十一—二十六)

耶穌の期待は全く裏切られて、其の恩寵溢るゝ事業も熱愛せらるゝ都市の上に全く空しに歸

せんとしてゐる。耶穌の悲痛は其の極に達した。此の頑迷なる同胞の末路や如何。一瞬にして過ぐべき肉の世に執着、眩惑して、貴き靈性を破り、永遠の滅亡に自ら進んで赴かんとしてゐる。耶穌は其の胸も破るゝを覺えられたるらし。況んや耶穌は其の素朴を愛し、勇敢なる性狀に望を囑し、其の美しき山川に培はれたる民衆に特殊の信任を置きて傳道の本據を此所に定め、諄々懇々として之を啓導せられたのではないか。彼等は迷妄を以て其の好機を逸し、終に再び受くべからざる特殊の權能を棄却せんとする。愛撫措く能はず深く思ひを寄せられたる珠玉も遂に眞光を放つに至らずして御手を脱せんとする。悲愁憂悶耶穌が胸を叩いて慟哭せらるゝも理である。

素朴なる漁夫の村落も、商事に狂奔する都市も皆等しき運命に陥らんとしてゐる。僅かに神の輪廓を傳へて其の畏るべきを示し人生の皮相を觀取して罪の悲しむべきを説きたる預言者に由りて悔改せざりしツロヤシンドンすら尙ほ神の審問には其の醜を赦されざりしとせば、人と成れる神、現に此地を踏み、親しく其の權能を目撃するを得しめられ、幾次か幾次か奇しき御業を示され譬へ難き恩寵を與へられたるに狗はらず、尙ほ頑として悔改して慈愛の御手に投ぜん